

特別史跡加曽利貝塚グランドデザイン



2019年2月

千葉市
千葉市教育委員会

はじめに



貝塚として初めて特別史跡に指定された加曽利貝塚は、その規模や存続した期間ともに全国屈指の遺跡であり、まさに日本文化の象徴として相応しい価値があります。

そこで、この加曽利貝塚を将来にわたって適切に保存していくとともに、周辺地域を含めた魅力向上を図る取組みを示した「特別史跡加曽利貝塚グランドデザイン」を策定しました。

今後も、市民の皆様をはじめ、企業や団体等と連携を図りながら、「特別史跡加曽利貝塚グランドデザイン」に基づく取組みを進め、多くの人々が、縄文時代の暮らしを体感できる体験型学習観光施設を目指すとともに、縄文時代から続く千葉市の住みやすさを発信する拠点となるよう、さらなる魅力の向上に努めてまいります。

結びに、策定にあたって、多くの皆様より貴重なご意見・ご提案をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

平成31年2月

千葉市長 熊谷 俊人



このたび策定した「特別史跡加曽利貝塚グランドデザイン」では、史跡のさらなる魅力向上を図るための様々な取組みのほか、加曽利貝塚の目指すべき将来像のひとつとして、縄文文化と貝塚の性格を究明していく拠点としていくことを示しました。

この調査・研究は、学校教育や生涯学習への将来的な還元だけでなく、加曽利貝塚に携わる人材を育成する大事な要素を担っているということを改めて認識し、研究機関や大学、市民団体等との一層の連携を図り、推進してまいります。

最後に、策定にあたりご協力いただきました千葉市史跡保存整備委員会の委員をはじめ、文化庁や千葉県教育庁の皆様にも深く感謝申し上げます。

平成31年2月

千葉市教育委員会教育長 磯野 和美

例 言

1. 本書は千葉県千葉市若葉区桜木2丁目及び8丁目に所在する特別史跡加曽利貝塚の将来像を示し、史跡とその周辺地域を一体的に保存活用していくための計画書です。
2. 本書は千葉市教育委員会が設置した「千葉市史跡保存整備委員会」（岡本東三委員長）における協議によりまとめられ、千葉市及び千葉市教育委員会が編集・発行するものです。
3. 本書の作成は、千葉市教育委員会事務局生涯学習部文化財課特別史跡推進班が担当しました。
4. 本書のうち「第2部 特別史跡加曽利貝塚史跡整備基本計画」は、2017（平成29年度）に文化庁から補助事業として国庫補助金の交付を受けて策定しました。
5. 本書の作成は、千葉市ふるさと応援寄附金のうち、「特別史跡加曽利貝塚の魅力向上」への寄附金を活用しています。
6. 本書の作成にあたり、一部の業務を下記のとおり委託し、調査結果は巻末資料2～7に掲載しました。
2017（平成29）年度
「加曽利貝塚ランドデザイン及び史跡整備基本計画策定業務委託」
文化財保存計画協会・オリエンタルコンサルタンツ共同企業体
7. 本書の作成にあたり、多くの方々及び機関・団体に、ご指導、ご協力をいただきました。ここに記して、深く感謝いたします。

目 次

第 1 部	特別史跡加曽利貝塚グランドデザイン整備構想	
第 1 章	特別史跡加曽利貝塚グランドデザインの役割	
第 1 節	策定の目的	2
第 2 節	グランドデザインの位置付け	3
第 2 章	加曽利貝塚の特性と整備対象エリアの設定	
第 1 節	加曽利貝塚の特性	4
第 2 節	対象エリアの設定	5
第 3 節	対象エリアの現況	6
第 3 章	整備・活用の基本方針	
第 1 節	特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像	11
第 2 節	整備・活用の目標設定	12
第 3 節	対象エリアの整備・活用基本方針	14
第 4 章	将来像の実現に向けた課題	
第 1 節	課題抽出のために実施した分析の結果	16
第 2 節	課題の整理	18
第 3 節	課題のまとめ	21
第 5 章	グランドデザインに基づく整備方針	
第 1 節	コアエリアにおける取組み	22
第 2 節	周辺エリアにおける取組み	36
第 6 章	グランドデザインに基づく取組みの進め方	
第 1 節	推進体制	42
第 2 節	事業方式	42
第 3 節	全体スケジュール	43
第 4 節	完成予想図	45

第2部 特別史跡加曽利貝塚史跡整備基本計画

第1章 史跡整備基本計画の位置付け…………… 48

第2章 史跡整備の基本方針

第1節 遺構の整備に関する基本方針…………… 48

第2節 修景に関する基本方針…………… 50

第3節 施設整備に関する基本方針…………… 52

第3章 短期的整備の目標と実施内容

第1節 目標…………… 54

第2節 実施内容…………… 54

第4章 短期的整備の個別計画

第1節 遺構の整備…………… 56

第2節 修景…………… 57

第3節 施設整備…………… 57

第4節 整備スケジュールと年次計画…………… 64

巻末資料

- 1 グランドデザイン策定の経過…………… (2)
- 2 加曽利貝塚博物館入館者数の目標設定にかかる分析…………… (3)
- 3 公園利用者数の目標設定にかかる分析…………… (8)
- 4 アンケート調査の結果…………… (10)
- 5 ワークショップの実施結果…………… (15)
- 6 類似施設の先行事例調査の結果…………… (19)
- 7 専門家ヒアリングの結果…………… (30)
- 8 千葉市まちづくり未来研究所による政策提言報告書の抜粋…………… (42)

第 1 部 特別史跡加曽利貝塚グランドデザイン整備構想

第1章 特別史跡加曽利貝塚グランドデザインの役割

第1節 策定の目的

加曽利貝塚は、全国に約2400か所ある縄文時代の貝塚の中で、日本最大級の規模を誇る集落型貝塚として知られています。縄文時代中期から晩期まで約2000年にわたる生活の跡が今も良好な状態で保存されていることや、貝層断面などの野外展示が埋蔵文化財の整備・活用に関して先駆的な存在であることなど、様々な観点から我が国の文化の象徴であるとして、2017（平成29）年10月13日に国の特別史跡に指定されました。

しかし、特別史跡の指定は決してゴールではありません。我が国を代表する遺跡として、これから50年先、100年先まで多くの人々に親しまれ、愛され続ける存在を目指す新たなスタートだといえます。これから未来へ向かって、市民や企業・団体、行政などが協力し、加曽利貝塚の価値を確実に守り伝えていくとともに、その魅力を向上し続ける取組みを主体的かつ持続的に進めていく必要があります。

特別史跡加曽利貝塚の目指すべき姿については、2017（平成29）年1月31日に策定した『史跡加曽利貝塚保存活用計画』で、以下の4つの言葉で表現しています。

特別史跡加曽利貝塚の目指すべき姿

- 縄文文化と貝塚の性格を究明し、調査研究の成果を世界に発信していく拠点
- 研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる史跡
- 多くの人が集い、地域交流の中核を担う拠点
- 人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る史跡

加曽利貝塚に関わる人々が同じ目標に向かい、この目指すべき姿を実現するための羅針盤として将来像を描いたものが、特別史跡加曽利貝塚グランドデザイン（以下「グランドデザイン」という。）です。

本書では、『史跡加曽利貝塚保存活用計画』で示した現在の加曽利貝塚博物館を史跡指定地外に移転する方針を前提として、史跡だけでなくその周辺地域を含めた土地利用の具体的なモデルとイメージ図を提示します。

第2節 グランドデザインの位置付け

グランドデザインは、千葉市基本構想・千葉市新基本計画を受けて作成した『史跡加曽利貝塚保存活用計画』に基づき、特別史跡加曽利貝塚の目指すべき姿の実現に向け、その他個別計画と整合を図りながら、整備と活用を進めていくための取組みの方向性を定めるものです(図1-1-1)。

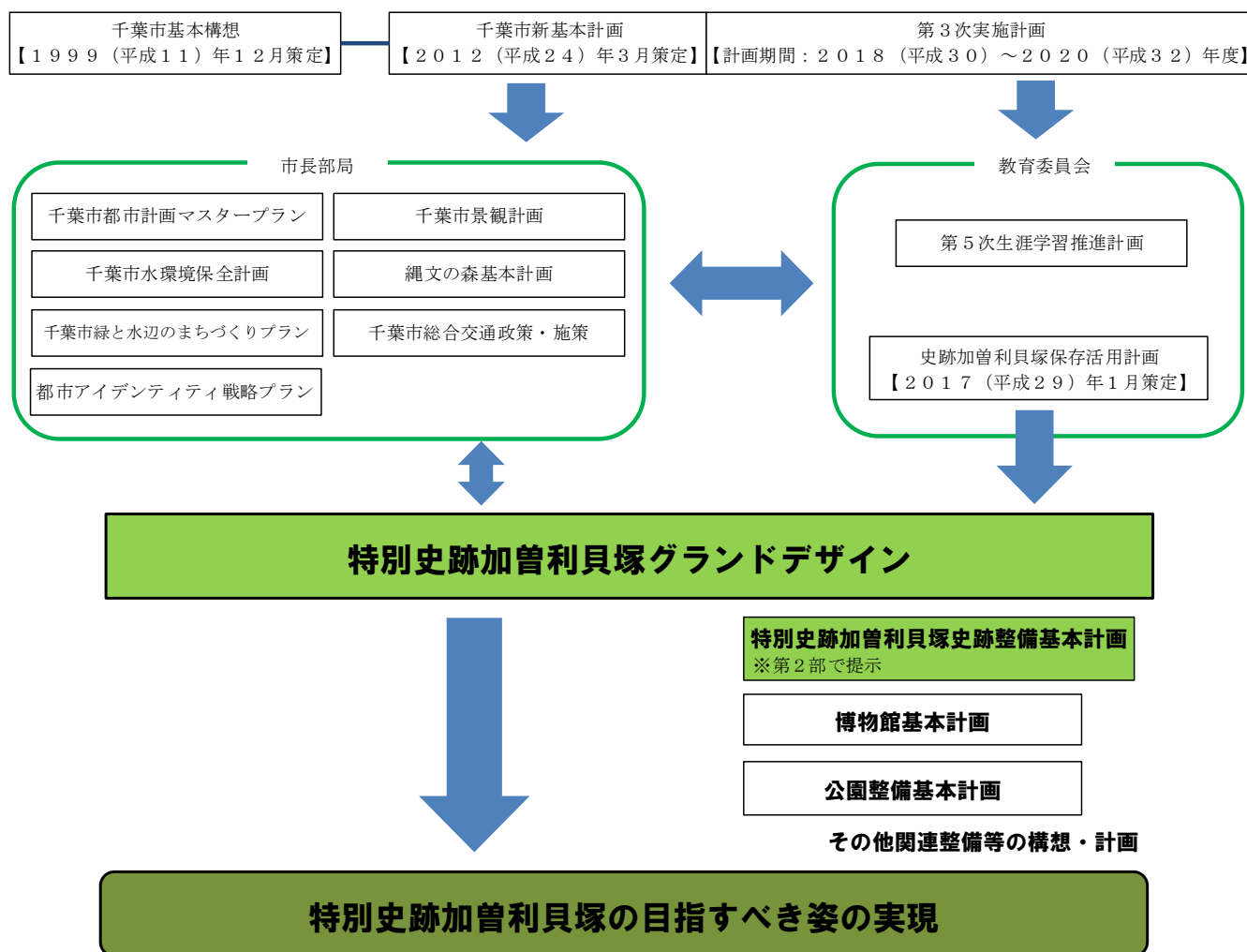


図1-1-1 本計画の位置付け

第2章 加曽利貝塚の特性と整備対象エリアの設定

第1節 加曽利貝塚の特性

史跡の整備方法や体験学習などの活用方法は、全国各地の事例を見ても実に様々ですが、大切なことは史跡の特性を活かした整備を行うことです。加曽利貝塚の価値については、『史跡加曽利貝塚総括報告書』で言葉にまとめ、『史跡加曽利貝塚保存活用計画』で整備・活用に関わる要素を整理しています。

ここでは、加曽利貝塚と周辺地域の整備・活用に関わる特性や現代的な意義について、特に重要な事項を挙げておきます。

①大きなブランド力を持つ

加曽利貝塚には、縄文人がつくった2000年の歴史の他に、遺跡の発見から今日まで実に多くの人々が関わってきた約130年間の歴史があります。遺跡が持つ学術的な価値が高いことに加え、こうした長い研究の蓄積があり、「我が国文化の象徴たるもの」と認められ、全国で初めて貝塚として特別史跡に指定されました。

②研究・活動のテーマや材料が豊富である

貝塚は、縄文時代の史跡の3割以上を占めており、日本考古学の形成・発展の過程で中心的な役割を果たしています。数千年の資源利用や食の内容を具体的に示す資料がこれだけ豊富な地域は世界的にも希少であり、特に加曽利貝塚を含めた東京湾東岸の貝塚は、発掘事例が多く、膨大な学術的成果が蓄積されています。

③市民活動の母体があり、地域づくりへの関心が高い

加曽利貝塚は、全国で初めて市民主導による遺跡保存が実現した場所であり、現在もボランティアガイドや土器づくり講座など、積極的な市民活動が行われています。また、加曽利貝塚周辺で自然保護に取り組む市民団体や、近隣学校が地域教育の素材として取り扱うなど、様々な分野で市民参加を促す役割を果たしています。

④首都圏に位置している

加曽利貝塚が位置する千葉市若葉区は、東京都心から東に約40km、千葉県中西部の東京湾東岸にあります。開発が進む首都圏にありながら、遺跡とその周辺の自然環境がこれだけ広域に保全されていることは稀であり、このことも加曽利貝塚の大きな価値の一つです。また、その好立地を活かして、研究者や学生等の受入れを積極的に行っています。

⑤縄文時代観の変化

全国の発掘成果によって縄文時代観や遺跡の持つ力に対する見方が大きく変わってきています。日本の伝統的な資源利用や食文化が世界的にも注目を集めており、数千年前の情報を豊富にもつ貝塚の存在意義がさらに増しています。加曽利貝塚では、2017（平成29）年から新たな発掘調査に着手しており、加曽利貝塚の構造や形成過程を通して、縄文時代の生産活動や社会を解明することを目指しています。

第2節 対象エリアの設定

加曽利貝塚の特性を活かした整備を行うには、加曽利貝塚だけでなく、周辺地域を含めた検討が必要です。ここでは、加曽利貝塚とその周辺の豊かな自然環境が縄文時代の人々の暮らしを想起させる貴重な景観になっていることや、自然環境を活かした様々な整備・活用の可能性があること、また、加曽利貝塚博物館の移転を考慮し、以下の2つを対象エリアと設定しました(図1-2-1)。

- コアエリア・・・特別史跡加曽利貝塚(約15.1ha)
縄文の森特別緑地保全地区(約16.5ha)
小倉浄化センター跡地及びその隣接地(約1.0ha)
- 周辺エリア・・・コアエリアの周辺地域(概ね図1-2-1全体)

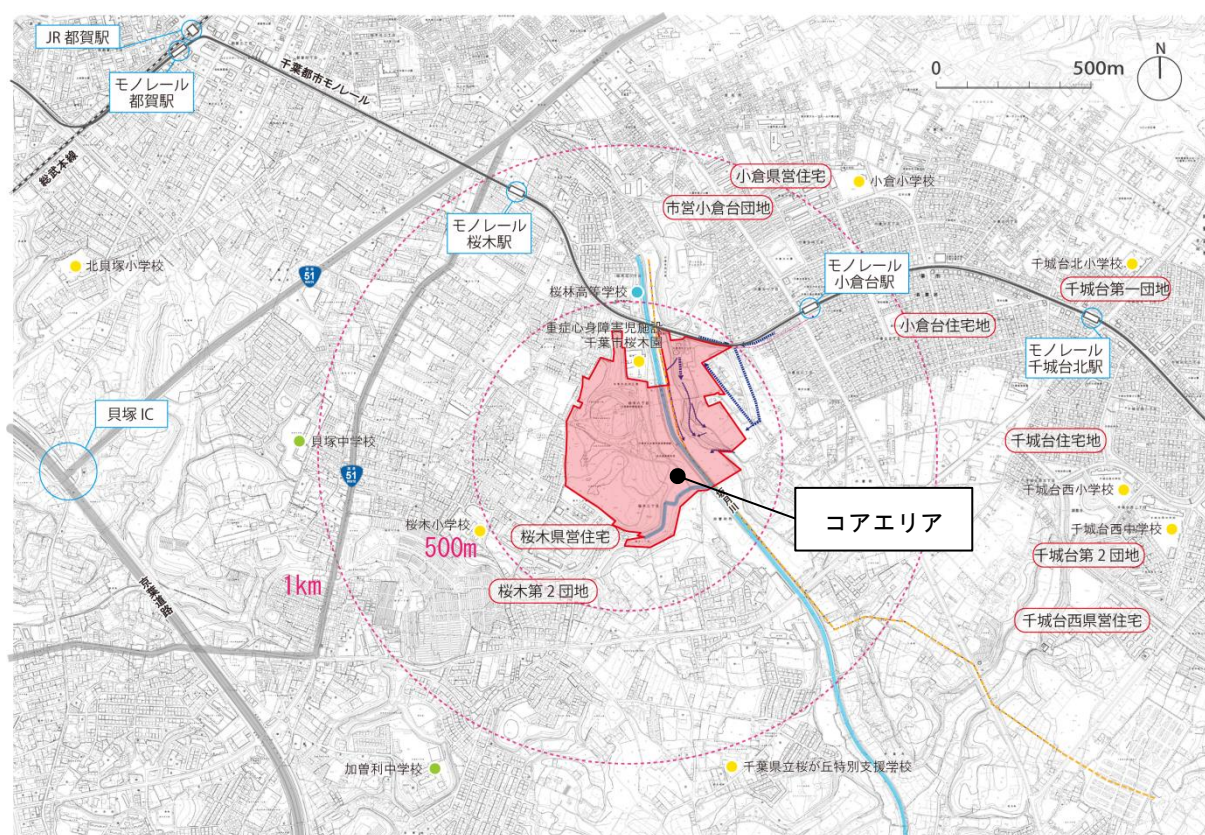


図1-2-1 対象エリアの範囲

第3節 対象エリアの現況

1 コアエリア

コアエリアは、加曽利貝塚の史跡指定地内とその東側の縄文の森特別緑地保全地区で構成されています。

(1) 特別史跡加曽利貝塚

1971（昭和46）年に北貝塚が史跡に指定され、1977（昭和52）年に南貝塚が追加指定されました。その後の発掘調査においても、遺構がさらに広がっていることが確認され、2017（平成29）年に北側及び南側隣接地が追加指定されたことで、現在の史跡指定範囲となっています。

史跡指定範囲はその全域が公開されており、博物館や野外観覧施設などのほか、解説板やベンチ、トイレなどの便益施設も設置されています。ただし、これらの施設は博物館が開館した約50年前からあるものが多く、現在は老朽化が見受けられます。その他、時代考証と関連のない送電鉄塔や旧大須賀家住宅などが設置されています。

車での来訪者のため、駐車スペースは臨時駐車場を含めて約80台分の用意がありますが史跡指定地内でのイベント開催時には、満車になることがあります。

また、一部には舗装された園路がありますが、ほとんどは樹林と草地に覆われており、住宅地に囲まれながらも広大な緑地として楽しめる憩いの場としても親しまれています。



空から見た特別史跡加曽利貝塚（1996（平成8）年）

（２）縄文の森特別緑地保全地区

千葉都市モノレール小倉台駅の南西約0.5km、二級河川である坂月川沿いの低湿地及び斜面林です。坂月川の両側の水田や里山の景観を残す樹林地等で構成されており、優れた自然的景観とともに、市民の環境保全活動や自然観察の場として親しまれています。

東側には住宅が広がっていますが、この宅地開発の波から守られたこのエリアは、坂月川が形成した谷津を中心に、多様な緑地で構成される里山景観として、ふるさとの原風景や縄文時代を想起させてくれる貴重な景観になっていることも、加曽利貝塚の大きな魅力のひとつです。

なお、縄文の森特別緑地保全地区の範囲ではありませんが、北側には、1993（平成5）年に利用が休止された小倉浄化センター跡地があり既存の建築物が残っています。ランドデザインではこの土地の活用も検討に含めることとします。



縄文の森特別緑地保全地区と坂月川（南西から）



坂月川両側の水田及び樹林地（南から）

2 周辺エリア

コアエリアが形成する広大な緑地は、都市化が進む首都圏にありながら、自然環境が良好に保存されており、縄文時代の里山・里海景観の面影を残す歴史的環境として貴重な自然となっています。坂月川もそのひとつで、縄文時代から現在に至るまで、加曽利貝塚と東京湾を繋ぐ河川として保存されています。加曽利貝塚が2000年間繁栄した大きな要因のひとつとして、この坂月川が資源確保のための水路として利用されていたと考えられており、加曽利貝塚と東京湾との繋がりを示す貴重な景観が残されています。

コアエリアへの主要な公共交通機関をみると、千葉モノレール桜木駅が最寄駅であり、加曽利貝塚博物館までは徒歩約15分です。バスでのアクセスでは、JR千葉駅から京成バスに乗り、桜木町バス停下車後、加曽利貝塚博物館までは徒歩約15分となっています。

周辺の道路環境をみると、京葉道路貝塚インターチェンジからは車で約10分の距離にあり、高速道路からのアクセスは比較的優れています。一般道についても、国道51号をはじめ、市道都賀駅千城台南線などの幹線道路が通っています。ただし、コアエリアに隣接する道路は、住宅の生活道路になっているところが多く、幅員の狭い箇所も見受けられます。

周辺エリアには史跡荒屋敷貝塚や史跡花輪貝塚など、縄文時代の遺跡が点在しているほか縄文小倉の森や坂月川ビオトープなど、緑豊かな自然が残されていることが大きな魅力です。



加曽利貝塚とその周辺のロケーション（東から）

地図データ：Google、ZENRIN

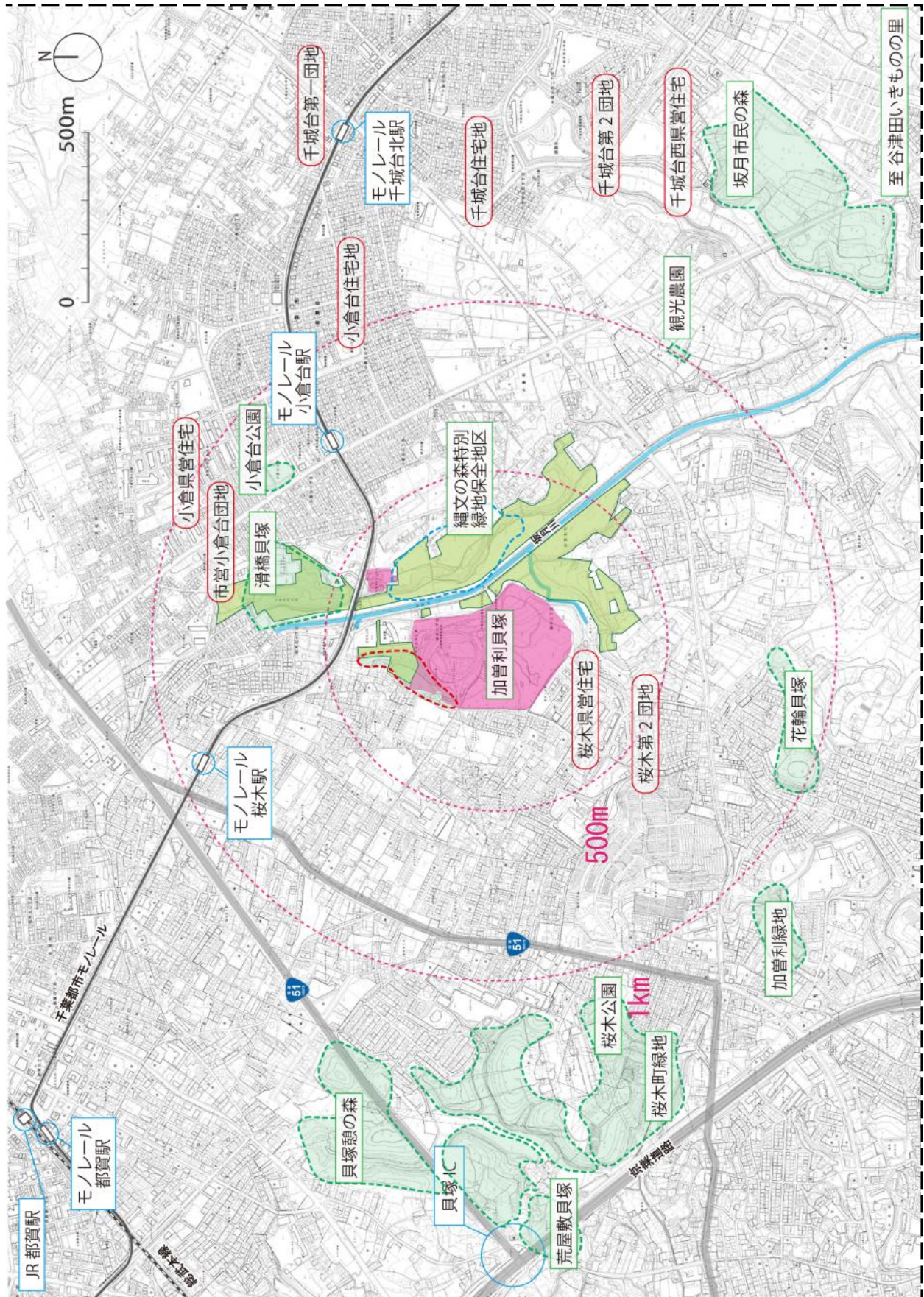


図 1-2-3 周辺エリアの現況

第3章 整備・活用の基本方針

加曽利貝塚の目指すべき姿については、『史跡加曽利貝塚保存活用計画』の冒頭に掲げた4つの項目で示し、本書においても冒頭に再掲しました。ここでは、この4つの項目を踏まえ、加曽利貝塚の目指すべき将来像を提示し、今後の整備計画策定に向けた対象エリアごとのコンセプトと、大まかな集客目標数を設定します。さらに目指すべき将来像を実現するための整備・活用について、基本的な方針を示します。

第1節 特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像

1 特別史跡としての役割

- ・我が国文化の象徴たる遺跡としての価値を守り育て、新たな価値を生み出す史跡
- ・研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる史跡
- ・貝塚の調査研究、整備方法を後世に伝えていく史跡
- ・人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る史跡

2 緑地、公園としての役割

- ・史跡と一体となった縄文時代の景観を演出する場所
- ・自然環境の保全と育成を通して自然に親しみ、くつろぎの空間を演出する場所
- ・学習や遊びなど多様な活動を行う場所

3 博物館としての役割

- ・幅広い調査研究を推進し、縄文文化と貝塚の性格を究明していく拠点
- ・縄文文化と貝塚に関する資料を収集保存し、後世へ守り伝えていく拠点
- ・調査研究の成果を積極的に公開活用し、世界に発信していく拠点
- ・学校教育や生涯学習など多様な学習を支援し、加曽利貝塚に携わる人材を育てていく拠点

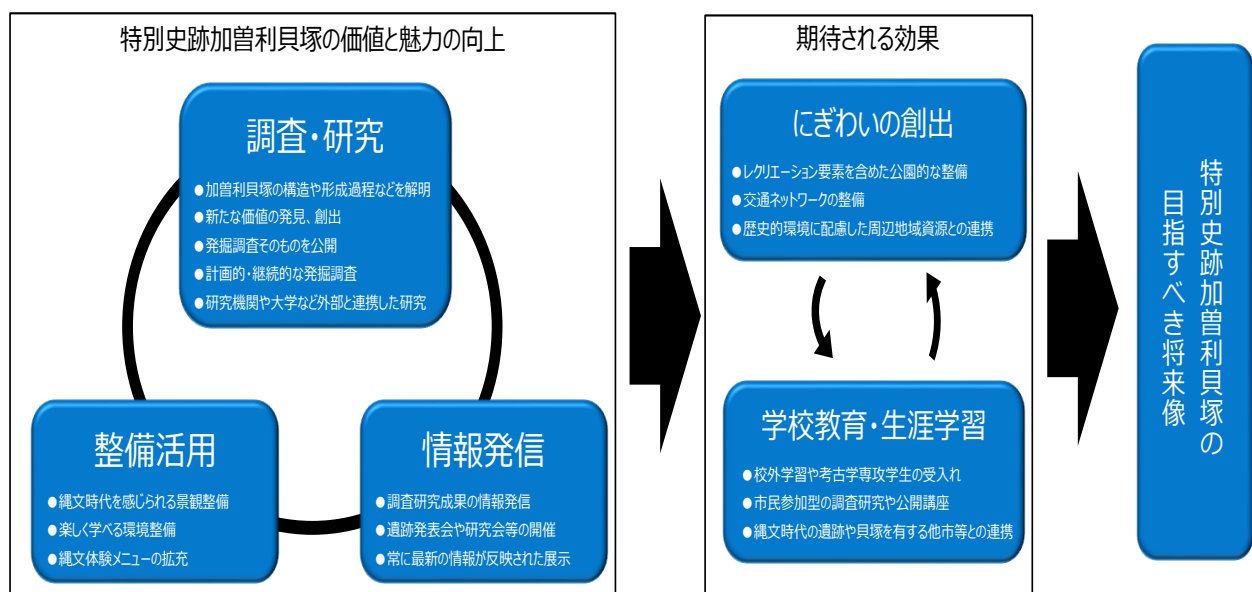


図 1-3-1 目指すべき将来像の実現に向けた方向性

第2節 整備・活用の目標設定

1 コアエリアのコンセプト

本物を感じる体験型学習観光施設 ～日本最大級の貝塚で唯一無二の縄文体験～

加曽利貝塚とその周辺の縄文の森特別緑地保全地区には縄文時代を感じることができる風景や自然環境が残っており、日本最大級の規模を誇る貝塚という特色ある遺跡で、本物志向の縄文を体験することができます。

縄文人が使った道具の再現や縄文人が食べた木の実の調理など、ここでしか味わうことのできない体験を通じ、縄文を感じることができます。

2 周辺エリアのコンセプト

遠くて近い縄文のまち、かそり

首都圏から近く、誰もがアクセスしやすい加曽利貝塚にしていくことで、意外と身近に縄文時代の人々の生活に触れることができます。

周辺エリアには縄文を体感できる要素がちりばめられ、来訪者はこれまで遠かった「縄文」の視点を意識することになります。

3 集客目標

(1) 主要なターゲットの設定

これまでの加曽利貝塚博物館の入館者数推移の現況や、圏域人口の分析から、主要な入館者層はピーク時から変わらず、小学校の団体であり、全体の入館者数の減少はこの層が減少していることが要因であることや、大人の入館者を捉えられていないことが分かりました。

これらの分析を踏まえ、加曽利貝塚の主要なターゲットを次のように設定します。

●小学校の団体

加曽利貝塚博物館の主要な入館者を担っている層と位置付けることができ、特に社会科見学での入館者がその中心であると想定されます。この層をピーク時以上まで増加させることが集客の上では重要です。

●小学生とその家族を対象としたファミリー

現在、大人の入館者数が少ないため、この層の入館者数を増加させることが集客の上では重要です。小学生とその家族が訪れる場所とすることにより、集客増が期待できます。

●シニア世代（60歳以上）

具体的な入館者数は把握していませんが、関連する講座等への参加者はシニア世代が中心であり、地域の歴史に興味を持っている方が多いことが想定されます。またこの層は個人だけでなく、歴史散歩など団体での入館者も想定されることから、さらなる集客の増加が期待できます。

(2) 博物館入館者の集客目標数（巻末資料2）

圏域人口の分析から、加曽利貝塚博物館入館者数の目標数値は、約15万人と設定します。先行事例調査などを参考に、集客数のある史跡公園の博物館入館者数は10万人以上であることから、この人数は実現可能であると考えられます。

また、主要なターゲット以外はこの人数に入れておりませんが、研究機能やその体制を確立することにより、研究機関の研究者や学生などの入館者も見込まれることから、さらなる入館者数増も想定されます。

(3) 公園利用者の集客目標数（巻末資料3）

全国の公園利用者の統計の分析から、公園利用者数の目標数値は、約55万人と設定します。

博物館入館者数は入れていないため、博物館見学とあわせ、さらなる集客も想定されます。

第3節 対象エリアの整備・活用基本方針

1 コアエリア

加曽利貝塚の特別史跡指定地内では、整備・活用の根幹となる遺跡の本質的価値の保存と、継続的な発掘調査を推進します。また、この調査研究の成果を基に、来訪者が「縄文時代に来た」と思えるような景観復元を目指して史跡整備を推進するとともに、自然と共存した環縄文時代の人々の生活が体験できる環境整備を推進します。

縄文の森特別緑地保全地区は、豊かな自然環境を活かし史跡と一体となった景観を整備していくとともに、レクリエーションなどを含めた多様な活用が可能な場所となるよう、整備を推進します。

表 1-3-1 コアエリアの整備・活用基本方針

基本方針	主な整備方針
遺跡の保存と発掘調査の継続	・貝塚をはじめとした遺構の保存整備 加曽利貝塚のもつ本質的価値を保存・継承するため適切な整備を実施する。 ・計画的な発掘調査の継続と情報発信 縄文文化と貝塚を究明するため発掘調査を計画的に実施する。また、調査自体を公開するとともに、その成果を効果的に発信する。
縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる整備	・史跡と周辺の自然環境の一体的な整備 加曽利貝塚と坂月川を含めた周辺の自然環境を一体的な景観として捉え、縄文時代から続く長い歴史が想起できるよう整備を行う。 ・大型貝塚を体感できる整備 遺構の保存を図りながら、貝塚の堆積と広がりの様子を体感できるよう、縄文人が 2000 年の時をかけてつくり上げた大型貝塚の景観を再現する。 ・本物に触れる遺構観覧施設の整備 縄文時代の遺構を露出展示している貝層断面観覧施設や住居跡群観覧施設は、現存施設の展示環境等の改修を含めた整備を行う。 ・水辺空間の整備 舟着場や坂月川周辺の水辺空間などを整備し、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる整備を行う。 ・自然環境の保全と体験学習プログラムの展開 加曽利貝塚と周辺の自然環境を一体的に保全していくとともに、縄文時代の持続可能な資源利用を体験しながら学ぶことができるプログラムを展開する。
学校教育や生涯学習の推進	・校外学習や考古学専攻学生の受入れ環境の整備 研究成果を活用した教育プログラムを実施するなど、小学生の団体から考古学を専攻する学生まで、幅広い学習段階に応じた受入れ環境を整備する。 ・様々な人が集う交流の場としての整備 世代を超えて様々な立場の人による継続的な活用を促すため、汎用性のある受入れ環境を整備する。

2 周辺エリア

縄文時代に暮らした人々の長い歴史を学ぶためには、コアエリアだけでなく、周辺エリアにも目を向ける必要があります。加曽利貝塚周辺の海や川や緑地などでは、縄文時代の人々の生活を今に伝える景観を垣間見ることができ、特別史跡としてさらなる価値付けを図るために、これらの場所との連携を推進します。

また、周辺エリアを循環することで発生する人の流れは、周辺商業地や中心市街地と繋げることで回遊性が向上し、千葉市内陸部の主要観光ルートになるよう推進するとともに、地域の活性化を図り、地元住民が郷土の宝としてより愛着が持てるよう市民参加による事業を推進します。

表 1-3-2 周辺エリアの整備・活用基本方針

基本方針	主な整備方針
加曽利貝塚との連携	・ サテライトの効果的な連携 加曽利貝塚で暮らした人々の生活の全体像を把握するために、関連の深い場所をサテライトと位置付け、効果的な連携を図り、積極的な活用を図る。 ・ サテライトを結ぶ緑地ネットワーク化の推進 加曽利貝塚周辺に点在する貝塚や緑地をネットワーク化し、周遊しやすくするだけでなく、環境教育や生物多様性の保全を推進する。
加曽利貝塚を中心とした賑わいの創出	・ 周辺の文化施設・商業施設等との広域連携の推進 加曽利貝塚やサテライトの周遊を活性化させ、周辺エリアのにぎわいを創出するため、他の文化施設や商業施設等との連携を図るとともに、新たなターゲット層を取込むため、グリーンツーリズムなど観光プロモーション施策等との連携を図る。 ・ 交通ネットワークの整備 増加が予想される来訪者の利便性を確保しつつ、地域住民が安全、快適に生活できる交通環境の整備を図る。 ・ 地域ブランディングの推進 縄文文化や加曽利貝塚の価値と魅力を広く理解してもらうためのイメージを具現化するとともに、地域の人々が郷土の宝としてより愛着が持てるよう市民参加による事業を推進する。

第4章 将来像の実現に向けた課題

第1節 課題抽出のために実施した分析の結果

第3章で示した目指すべき将来像を実現するために必要な整備・活用を行うにあたって、加曽利貝塚博物館で実施したアンケートや、市民参加のワークショップ、先行整備事例などの調査・分析を行い、課題を抽出しました。それぞれの分析の結果については、本書の巻末資料に掲載しました。また、『史跡加曽利貝塚保存活用計画』においても、周辺の自然環境・歴史的環境をまとめた他、巻末資料として社会的環境、史跡内の現況写真、来館者推移、ボーリングデータを掲載しています。

ここでは、それぞれの分析結果から、加曽利貝塚に求められているものを整理します。

1 アンケートの実施結果から（巻末資料4）

- ・年間を通し家族連れの来訪が多く、来訪目的も「家族で遊ぶため」との回答が多いことから、家族連れでの来訪者が楽しく過ごせる対応が求められています。
- ・満足度調査の項目で「不満」と回答した主な理由は、加曽利貝塚までの交通案内が少ないことや、トイレやベンチなどの便益施設が少ないといった意見であったことから、交通案内や便益施設の改善に対する対応が求められています。
- ・「満足した」と回答した方のうち、満足した項目に「自然」と回答した方が多いことから、広大な緑地環境を活かしたさらなる活用が求められています。
- ・火おこしや弓矢などの縄文体験が好評であったことや、土器づくりや石器などを使った調理体験をやってみたいとの回答があったことから、縄文体験プログラムのさらなる充実が求められています。

2 ワークショップの主な意見から（巻末資料5）

- ・縄文時代から続く景観が残っており、縄文を感じられる風景や自然環境が魅力との意見から、広大な緑地環境を活かした更なる活用が求められています。
- ・施設が老朽化しており、トイレや園路に不便を感じているとの意見から、バリアフリー化などによる利便性の向上が求められています。
- ・北貝塚と南貝塚が一体となった全体像を見ることができないとの意見から、加曽利貝塚の特徴の顕在化が求められています。
- ・加曽利貝塚周辺においても活動している団体がたくさんあるとの意見から、市民との協働による活用が求められています。

3 先行事例調査から（巻末資料6）

- ・千葉市動物公園と加曽利貝塚博物館の入館者数を比較すると、個人入館者数に大きな開きがあることから、団体入館者以外を呼び込むための方策が求められています。
- ・関東圏での類似施設をみると、史跡公園への来訪者数は地域の基礎人口に比例する傾向にあることから、首都圏にあって約97万人の人口を抱える千葉市に位置する加曽利貝塚がさらなる集客を図る上では、市内外への情報発信が求められています。
- ・全国での類似施設をみると、集客力の高い史跡公園では、交通利便性や施設面の充実、シ

ンボルなどを含む歴史的雰囲気が体感できる景観、レクリエーションや季節の花の観賞など、歴史的価値以外に楽しめる要素を備えていることから、加曽利貝塚がさらなる集客を図る上では、史跡活用の多様化が求められています。

4 専門家ヒアリングから（巻末資料7）

- ・史跡整備の実施において、当時の様子を体感できるよう、整備ストーリーの設定が効果をもたらしたとの意見があったことから、調査研究成果に基づき検証を行った上で、史跡整備を実施することが求められています。
- ・体験学習施設においては、事前申し込み不要で短時間で気軽にできるものから、時間をかけて行うものなど、様々な体験学習プログラムが用意されていたことから、来訪者の多様化にあわせた体験学習プログラムを展開していくことが求められています。
- ・史跡公園内をオープンスペースとして提供し、多様な催し物を開催して集客効果を高めているとの意見があったことから、加曽利貝塚のさらなる集客を図る上では、遺構の保存を前提にした土地の有効活用が求められています。
- ・歴史文化遺産を活かした地域づくりにおいては、地域全体の資産と捉え、その価値を市民や関係者が共有することが大切であるとの意見があったことから、加曽利貝塚を中心とした整備を行っていく上では、さらなる情報発信が求められています。
- ・整備事業を展開していく際には、地域住民も計画の段階から参加してもらうことが重要であるとの意見があったことから、今後の整備を行っていく上では、市民との協働が求められています。

5 千葉市まちづくり未来研究所による政策提言報告書から（巻末資料8）

- ・特別史跡の指定を受け、多くの人々が来訪することが予想されることから、手洗い所の整備や、野外観覧施設・散策通路のバリアフリー化が求められています。
- ・来訪者に対する休憩所が少ないことから、四阿等の設置が求められています。
- ・広域避難場所としての備えがないことから、防災無線等を整備することが求められています。
- ・千葉市内小学校6年生に行ったアンケートにおいて、加曽利貝塚でどのような遊びがしたいか調査を行ったところ、土器づくりや弓矢などが人気であったことから、体験を重視した整備が求められています。
- ・同アンケート調査において、縄文の森でどのような遊びがしたいか調査を行ったところ、ジップラインが人気であったことから、大型遊具の設置など公園整備が求められています。

第2節 課題の整理

ここでは、前節でとりまとめた加曽利貝塚に求められているものを、第2章第2節で設定した対象エリアごとに区分し、課題として整理するとともに、それぞれのエリアの管理運営上の課題について整理しました。

なお、『史跡加曽利貝塚保存活用計画』で示した課題についても、本章に含めて整理しています。

1 コアエリア（特別史跡加曽利貝塚）の課題

（1）本質的価値を構成する要素が抱える課題

表 1-4-1 本質的価値を構成する要素が抱える課題

課題	保存活用計画 での記載
倒壊により地中の遺構や遺物に悪影響を及ぼす樹木は処理する必要があります。	○
地上に露出している貝層や遺物は流出や劣化を防ぐ必要があります。	○
雨水で地表の土壌が流出しないよう整備する必要があります。	○
貝層を横断するアスファルト舗装の園路は再整備する必要があります。	○
駐車場は史跡地外へ移転する必要があります。	○
史跡内の眺望に配慮した上で、現状の植生を活かした植栽管理を行う必要があります。	○
外部からの植物混入を防ぐため、慎重な植生の管理を行う必要があります。	○
貴重な動植物は史跡と併せて保護する必要があります。	○
景観を大きく阻害する博物館・収蔵庫等は、史跡地外へ移転する必要があります。	○
鉄塔の建て替え等に合わせて移転を協議する必要があります。	○
北貝塚と南貝塚が一体となった全体像をみることができないことから、加曽利貝塚の特徴を顕在化する整備を行う必要があります。	
調査研究成果に基づく検証を行った上で、史跡整備を実施する必要があります。	

(2) 保存活用に関する要素が抱える課題

表 1-4-2 保存活用に関する要素が抱える課題

課題	保存活用計画 での記載
野外観覧施設の貝層や住居跡などを良好な状態で保存・展示する保存環境条件を整備する必要があります。	○
野外観覧施設内に解説する設備を設置するとともに、バリアフリー対応を図る必要があります。	○
野外観覧施設内のガラス柵の安全性を確保しつつ整備する必要があります。	○
貝層の広がり等を実感できる整備をする必要があります。	○
竪穴住居は常時公開する必要があります。	○
園路のルートを見直して整備する必要があります。	○
史跡全体の情報を伝える表示や史跡内の適所への解説情報を設置する必要があります。	○
外国語表記や想像復元図の提示など、ユニバーサルデザインに配慮する必要があります。	○
縄文の景観を想像できるような表示方法を工夫する必要があります。	○

(3) 現代の利用に必要な要素が抱える課題

表 1-4-3 現代の利用に必要な要素が抱える課題

課題	保存活用計画 での記載
便益施設の設置場所は適切に選定する必要があります。	○
便益施設はユニバーサルデザインに配慮した整備とする必要があります。	○
団体でも利用できる休憩施設を整備する必要があります。	○
インフラ設備を設置する際には景観に配慮する必要があります。	○

2 コアエリア（縄文の森特別緑地保全地区）の課題

表 1-4-4 コアエリア（縄文の森特別緑地保全地区）の課題

課題	保存活用計画 での記載
史跡内の自然景観との一体感に配慮した整備を図る必要があります。	○
史跡外の自然を取り込み、縄文人の生活が理解できるような環境を整備する必要があります。	○
家族連れでの来訪者が楽しく過ごせるための環境を整備する必要があります。	
団体以外の一般の来訪者を呼び込むための方策を実施する必要があります。	
レクリエーションや季節の花の観賞など、歴史的価値以外に楽しめる要素を取り入れる必要があります。	

3 周辺エリアの課題

表 1-4-5 周辺エリアの課題

課題	保存活用計画 での記載
加曽利貝塚までの交通案内を十分に行う必要があります。	
加曽利貝塚周辺で活動している団体と協働していく必要があります。	

4 管理運営上の課題

表 1-4-6 管理運営上の課題

課題	保存活用計画 での記載
先進的な研究を推進していくために、大学などの研究機関や関連分野の研究者とのより強固な連携、協力体制を築いていく必要があります。	○
文化財保護法や都市公園法などの法令を遵守し、適切な管理運営体制を整える必要があります。	○
統一的に保管管理するデータベースの構築と収蔵庫を整備する必要があります。	○
計画的な発掘調査などを行い、新たな調査研究を進める必要があります。	○
研究成果を後世に伝えるため学芸員の人材育成を行う必要があります。	○
史料のデジタル化によるアーカイブを構築する必要があります。	○
来訪者の多様化にあわせた縄文体験プログラムのさらなる充実を図る必要があります。	
遺構の保存を前提にした土地の有効活用を図る必要があります。	
さらなる集客を図るために、市内外への情報発信を強化していく必要があります。	
歴史を活かした地域づくりを行う上で、市民や関係者が加曽利貝塚の価値を共有する必要があります。	
加曽利貝塚を中心とした整備事業を展開する上で、計画段階から市民と協働していく必要があります。	

第3節 課題のまとめ

ここでは前節でとりまとめた課題を目指すべき将来像として示した3つの役割に分け、それぞれの課題に対応するためのエリアを以下のとおり整理しました。

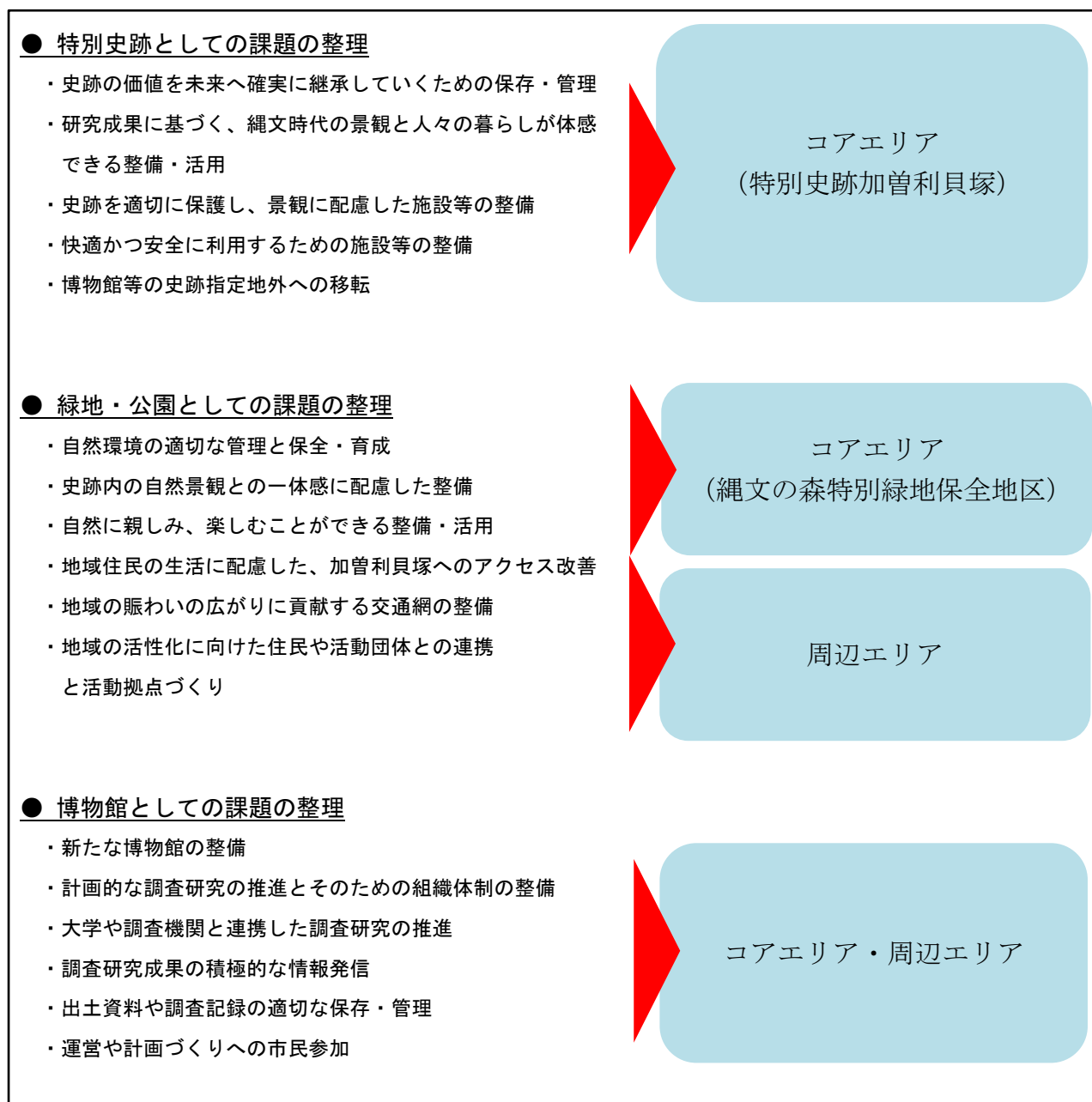


図 1-4-7 課題のまとめ

第5章 グランドデザインに基づく整備方針

グランドデザインでは、史跡と縄文の森特別緑地保全地区を含む「コアエリア」と、周辺の地域を含む「周辺エリア」について、それぞれの整備方針を示します。それぞれの整備方針について、具体的なイメージを共有できるように、例としてモデルやイメージ図を作成しました。

第1節 コアエリアにおける取組み

1 ゾーニング計画

コアエリアに関しては、『史跡加曽利貝塚保存活用計画』で示したゾーニングを基本に、それぞれの特徴を踏まえながら効果的に機能や施設配置を進めていくため、7つのゾーンに区分し、各ゾーンの空間構成・機能・導入施設等に関して設定を行いました。

●コアエリアの7つのゾーン

遺構保存ゾーン：遺構の保存を主体とするゾーン
 公開活用ゾーン：史跡を保護しつつ、公開展示を行うゾーン
 自然保護ゾーン：指定地内外の自然を保護し、縄文時代の景観を再現するゾーン
 縄文植生ゾーン：縄文時代に利用されていた植生を再現し、体験学習等に活用するゾーン
 新博物館ゾーン：新博物館を整備するゾーン
 水辺公園ゾーン：史跡外の水辺を中心に公園的整備を行い、新博物館と史跡を結ぶゾーン
 縄文の森ゾーン：史跡外の新縄文の森特別緑地保全地区を中心に公園的整備を行い、集客を図るゾーン

表 1-5-1 各ゾーンの整備内容

ゾーン		エリア	箇所
特別史跡指定地内	遺構保存ゾーン	共通	—
		貝層保存エリア	北貝塚及び南貝塚の貝層部分
		中央広場エリア	北貝塚及び南貝塚の中央広場部分
	公開活用ゾーン	共通	—
		体験学習エリア	移転予定の博物館跡地周辺
		復元集落エリア	東側の集落遺構が検出された部分
		大型建物エリア	舟着場から上がってくる斜面地
		舟着場エリア	東側にある岬状の突端部分
	自然保護ゾーン	共通	—
		現生植生保全エリア	市街地からの目隠しとして機能する樹林
		草地保全エリア	東傾斜面及び南貝塚内側の希少植物が多い草地
	縄文植生ゾーン	有用植物育成エリア	復元集落を取り囲む南側の樹林
指定地外	新博物館ゾーン	博物館エリア	小倉浄化センター跡地及びその周辺
	水辺公園ゾーン	湧水エリア	河岸段丘沿いの湧水
		水辺エリア	坂月川及び坂月川沿いの低湿地
	縄文の森ゾーン	自然観察エリア	坂月川の対岸（縄文の森特別緑地保全地区内）
		集客活用エリア	坂月川の対岸（縄文の森特別緑地保全地区内）

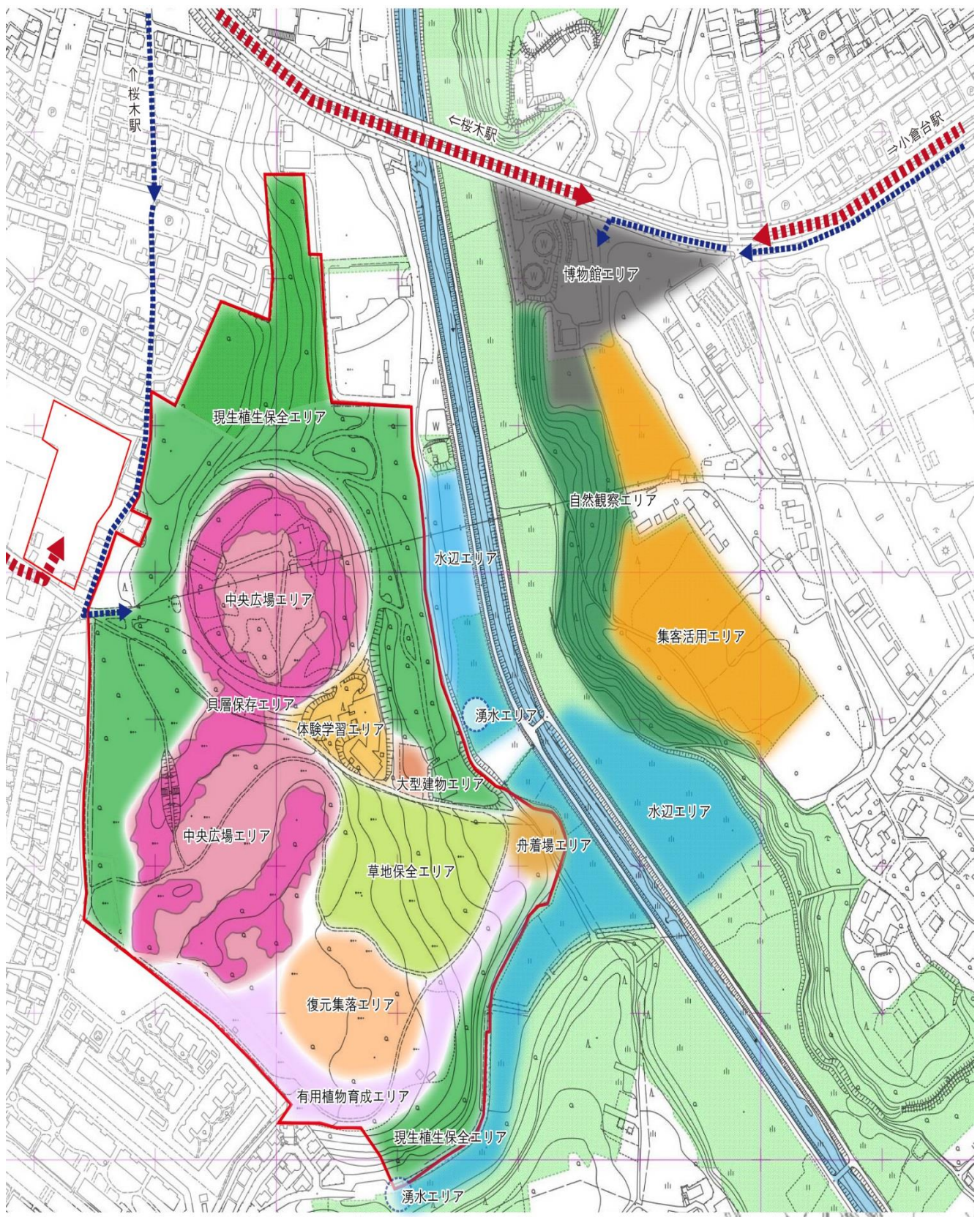


図 1-5-1 コアエリアのゾーニング

2 各ゾーンの整備活用計画

(1) 特別史跡指定地内

① 遺構保存ゾーン

テーマ：「ほんものの縄文にふれる史跡」

加曽利貝塚の本質的な価値を保存継承しながら、解説・体験により学習、活用を主体とするゾーンとして整備します。

遺跡の保存活用上、必要性が高くかつ早期に実施が可能なものを短期整備と位置付けます。詳しくは、「第2部 特別史跡加曽利貝塚史跡整備基本計画」にて記述します。

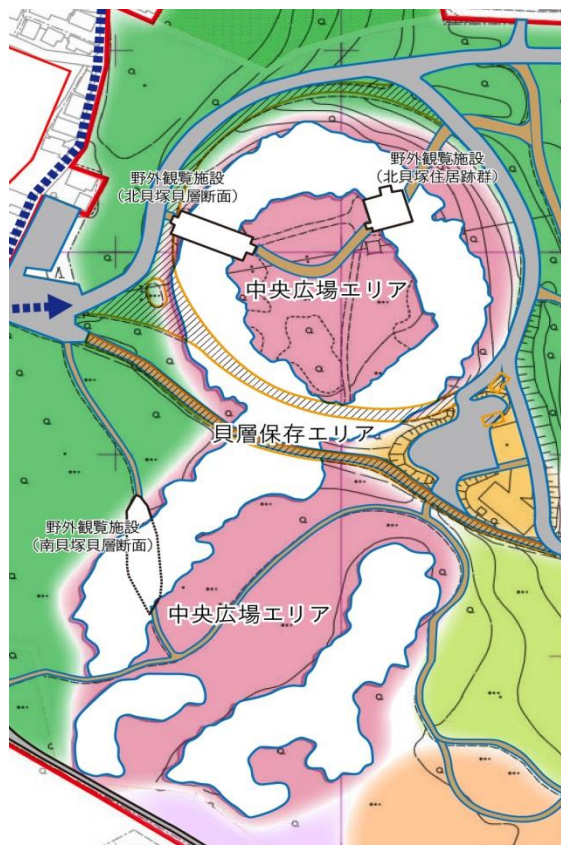
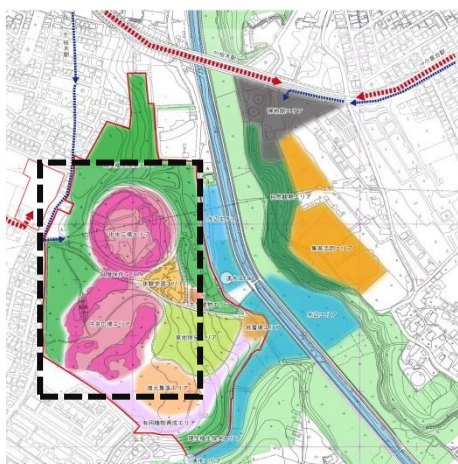


図 1-5-2 遺構保存ゾーン

表 1-5-2 遺構保存ゾーンの主な整備内容

ゾーン	エリア	箇所	方針	整備内容 (概要)
遺構保存ゾーン	共通	—	解説機能向上	◎解説用映像及びアプリケーションの制作
			利便性・環境改善	○便益施設等の新設 ○既存施設の改修・撤去 ○サインの再整備・多言語化
	貝層保存エリア	北貝塚及び南貝塚の貝層部分	貝層保存及び大型貝塚の形状とスケール感の顕在化	○貝層保護のための盛土、樹木の計画的な伐採 ○貝層の表示 ◎貝塚の高まりや規模を体感できる活用
			利便性・環境改善	○貝層の保護措置、貝層に影響を及ぼさない園路 ○野外観覧施設のリニューアル
	中央広場エリア	北貝塚及び南貝塚の中央広場部分	利便性・環境改善のための整備	○中央広場に影響を及ぼさない園路 ○中央広場の役割を示す展示 ○電柱・送電鉄塔の撤去
			地形の特徴を活かしたイベント等の実施	◎貝塚の高まりや規模を利用したイベントや、貝層を表現した活用

※ ○：ハード（整備改修等）、◎：ソフト（管理運営等）

整備活用のイメージ図



貝塚の高まりを表現する整備



貝塚の大きさが体感できる活用



貝塚コンサート



貝塚マルシェ



②公開活用ゾーン

テーマ：「縄文の生活を体験するムラ」

史跡を保護しつつ、公開展示を行うゾーンとして整備します。

縄文の生活を再現した展示に加え、新たに設置する便益施設や復元集落を活用した体験学習などを実施します。

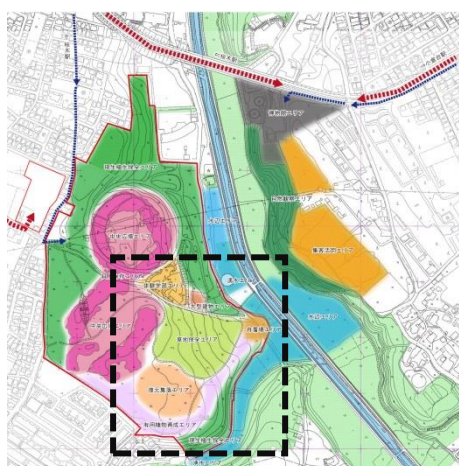


図 1-5-3 公開活用ゾーン

表 1-5-3 公開活用ゾーンの主な整備内容

ゾーン	エリア	箇所	方針	整備内容（概要）
公開活用ゾーン	共通	—	解説機能向上	◎解説用映像及びアプリケーションの制作
			利便性・環境改善	○便益施設や園路等の整備 ○既存施設の改修・撤去 ○サインの再整備・多言語化
	体験学習エリア	移転予定の博物館跡地周辺	体験学習の促進や、利便性向上に向けた整備	○体験学習スペースの確保 ◎体験学習メニューの作成 ◎体験学習運営体制の整備
	復元集落エリア	東側の集落遺構が検出された部分	竪穴住居の新規復元整備	○竪穴住居の新規復元整備 ○竪穴住居型の倉庫と待機所の整備 ○体験学習のための屋外水道の新設
	大型建物エリア	舟着場から上がってくる斜面地	大型建物の復元整備	○大型建物跡の復元整備 ◎史跡見学のシンボリックな活用
	舟着場エリア	東側にある岬状の突端部分	水辺エリアと一体的な活用	○説明板の改善 ◎水辺エリアと一体的な利用

※ ○：ハード（整備改修等）、◎：ソフト（管理運営等）

整備活用のイメージ図



体験学習スペース（吉野ヶ里遺跡）



復元集落の整備



VRによるガイダンス



発掘調査の公開

③自然保護ゾーン・縄文植生ゾーン

テーマ：「暮らしを支える森」

植栽整備は『史跡加曽利貝塚保存活用計画』に基づき下表のとおり、計画区域を設定します。

南貝塚の復元集落エリアの周りには有用植物育成エリアとして、スダジイやドングリなどの木の実や、衣食住に利用された植物採取や、体験学習等に活用できるようにします。

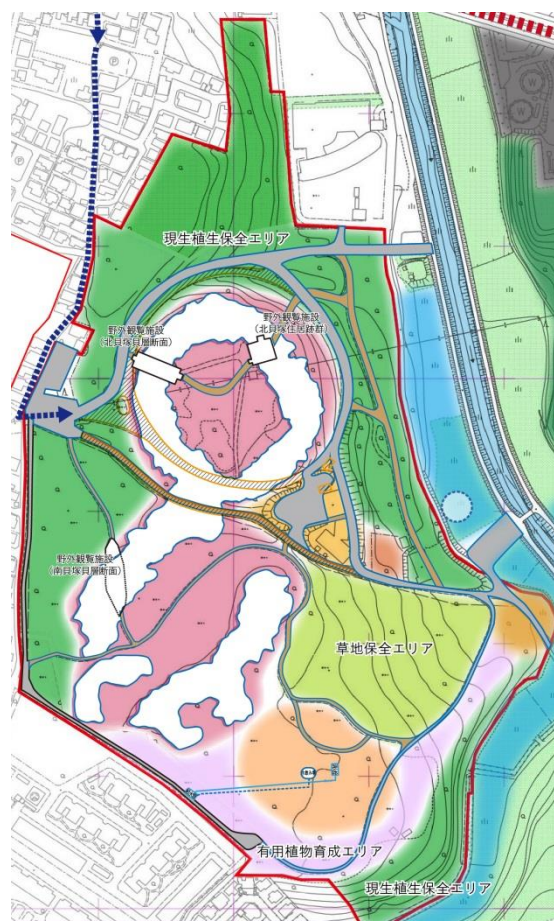


図 1-5-4 自然保護・縄文植生ゾーン

表 1-5-4 自然保護・縄文植生ゾーンの主な整備内容

ゾーン	エリア	箇所	方針	整備内容（概要）
自然保護ゾーン	共通	—	解説機能向上	◎解説用映像及びアプリケーションの制作
	現生植生保全エリア	市街地からの目隠しとして機能する樹林	樹林や草地の保存と史跡の景観維持	◎適切な維持管理
	草地保全エリア	東傾斜面及び南貝塚内側の希少植物が多い草地	希少植物が群生するエリアを保護及び活用	○植栽整備 ○樹木解説版等の設置 ◎希少植物等の適切な維持管理
縄文植生ゾーン	有用植物育成エリア	復元集落を取り囲む南側の樹林	縄文時代の生活に利用された植物の育成及び活用	○有用植物を含む植栽の整備 ○有用植物の説明板の設置 ◎有用植物を利用した体験プログラムの実施

※ ○：ハード（整備改修等）、◎：ソフト（管理運営等）

整備活用のイメージ図



有用植物育成エリアでの活動



有用植物の採集



有用植物を利用した体験プログラム

(2) 指定地外

①新博物館ゾーン

テーマ：「縄文文化や貝塚の研究と、その成果を発信する拠点」

小倉浄化センター跡地を中心に新博物館ゾーンを整備します。

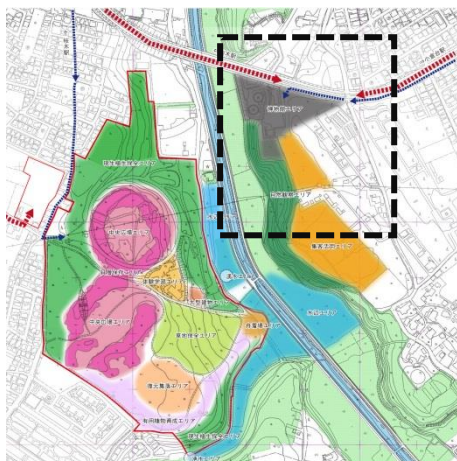


図 1-5-5 新博物館ゾーン

表 1-5-5 新博物館ゾーンの主な整備内容

ゾーン	エリア	箇所	方針	整備内容（概要）
新博物館ゾーン	博物館エリア	小倉浄化センター跡地及びその周辺	縄文文化と貝塚の研究拠点の整備	○加曽利貝塚や縄文文化が学べる施設の整備 ○最新の調査研究とその成果が発信できる環境や体制の整備 ○対岸の加曽利貝塚が俯瞰できる展望施設の整備 ○ミュージアムショップや飲食施設の整備 ○地域住民が利用できる協働スペースの整備 ○周辺のアクセス道路の改善 ○観光バスツアーなどの誘致と団体客に対応できる受入れ環境と運営体制の整備

※ ○：ハード（整備改修等）、◎：ソフト（管理運営等）

整備活用のイメージ図



展示室内



体験工房内



館内



レストラン等の飲食施設



展望施設（右下）や観光バスツアー受入れ（左下）

●博物館移転場所の検討

- ・加曽利貝塚博物館の移転場所は、モノレールや幹線道路から視界が開け、運営や集客の観点で効果的な活用方法が見込める小倉浄化センター跡地を利用します。

●博物館機能の検討

- ・『史跡加曽利貝塚保存活用計画』で示した目指すべき姿の実現に向け、新たな博物館では、「収集・保存」「調査・研究」、「展示」、「教育・普及」に「集客・交流」の機能を備えることを検討します。

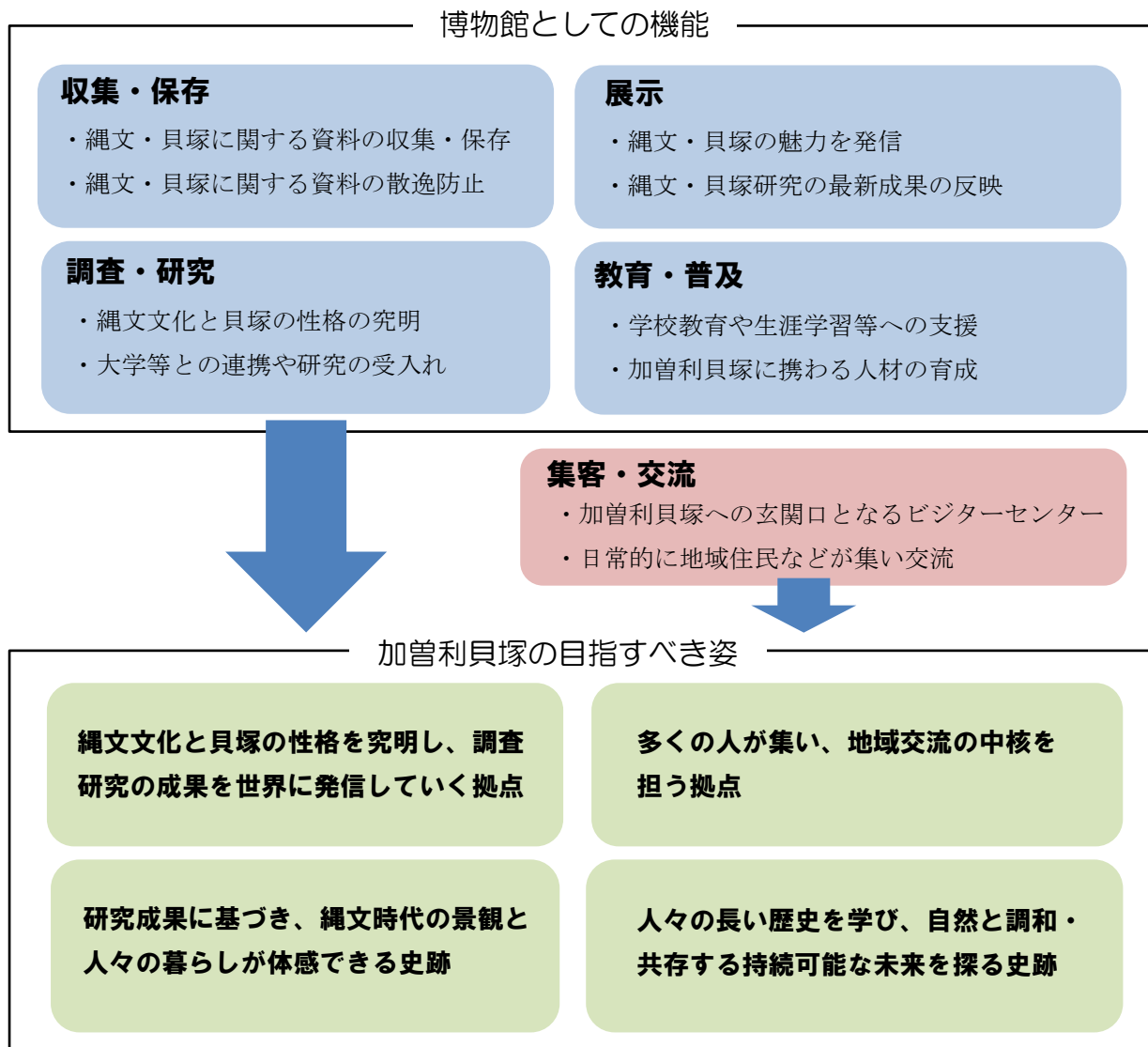


図 1-5-6 博物館機能の検討

●機能の分担・集約の検討

- ・加曽利貝塚博物館と関連する機能を持つ施設として、千葉市埋蔵文化財調査センターと千葉市立郷土博物館があります。
- ・新博物館の整備にあたっては、現在、千葉市埋蔵文化財調査センターが担当している加曽利貝塚の発掘調査や千葉市立郷土博物館での通史展示など、各施設と調査研究や展示などの機能の分担や連携ができないか、あるいは集約できないか検討します。

②水辺公園ゾーン・縄文の森ゾーン

テーマ：「楽しみ、集う公園」

史跡外の縄文の森特別緑地保全地区及び水辺を中心としたゾーンで、新博物館と史跡を結ぶ役割を担うゾーンです。

縄文の森を体感できる緑の保全地区として整備を図りつつ、より娯楽性のある体験（緑地や水辺を活用したアクティビティ等）や自然観察を豊かな自然の中で楽しめるよう整備します。

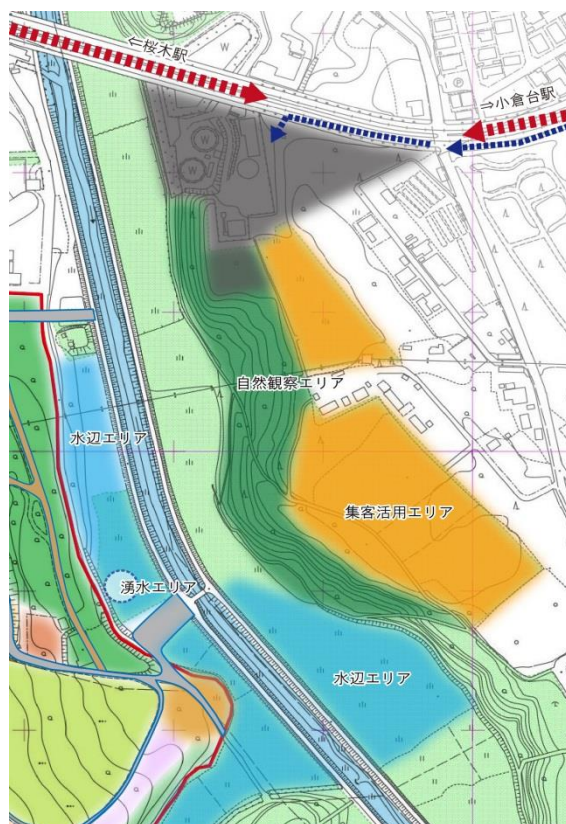
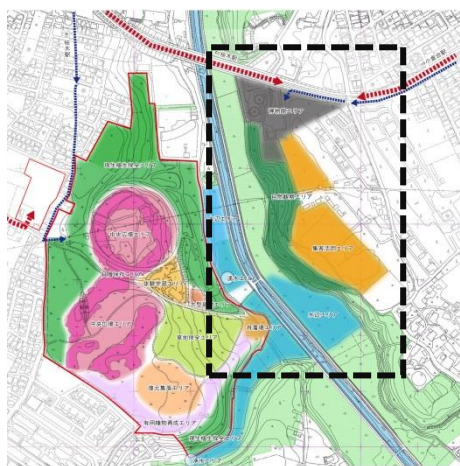


図 1-5-7 縄文の森・水辺公園ゾーン

表 1-5-6 縄文の森・水辺公園ゾーンの主な整備内容

ゾーン	エリア	箇所	方針	整備内容（概要）
水辺公園ゾーン	水辺エリア	坂月川及び坂月川沿いの水田跡地	縄文時代の水辺を想起させる整備	○ため池等の親水空間の整備 ◎縄文時代の釣り針づくりや、釣り体験等、水辺を活用した体験プログラムの実施
	湧水エリア	河岸段丘沿いの湧水	水辺と一体となった整備	○湿地系の自然植生を復元 ○湧水の活用
縄文の森ゾーン	共通	—	解説機能向上 利便性・環境改善	◎解説用映像及びアプリケーションの制作 ○遊歩道、ベンチ等
	自然観察エリア	坂月川の対岸（縄文の森特別緑地保全地区内）	新博物館から史跡に至るまでの期待感の創出とバリアフリーの園路整備	○新博物館と加曽利貝塚を直接つなぐ吊り橋等の整備 ○小型モビリティ等による移動手段の確保 ○樹木の間を通り抜けるツリーロードの整備 ◎園路を歩きながら行う自然観察 ◎森林を活用した健康ウォーキング等の実施
	集客活用エリア	坂月川の対岸（縄文の森特別緑地保全地区内）	野外アクティビティを取り入れた公園の整備	○民間事業者によるパークマネジメント 例：アスレチック、デイキャンプ、バーベキュー、宿泊など ○ジップライン等大型遊具の設置 ○旧大須賀家住宅の移転 ◎野外イベント等の誘致、開催

※ ○：ハード（整備改修等）、◎：ソフト（管理運営等）

整備活用のイメージ図



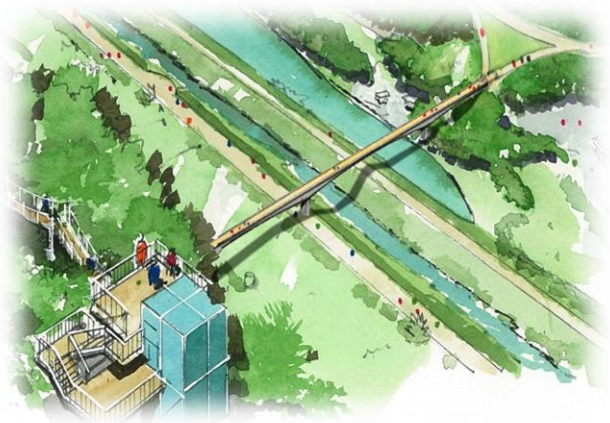
民間事業者によるパークマネジメント



舟着場へ的人道橋



ツリーロードでの自然散策



新博物館と加曽利貝塚をつなぐ吊り橋

●水辺公園ゾーン・縄文の森ゾーンでの事業展開

(1) 基本的な考え方

公共施設や公園の運営に知見を持つ民間事業者と連携して、水辺公園ゾーン・縄文の森ゾーンの魅力を活用した企画運営・イベントを実施し、集客力や運営効率向上に向けた取組みを推進します。

(2) 想定事業の内容

①民間活力導入の検討

- ・指定管理者制度やパークマネジメントなど、施設整備・運営における資金やノウハウの活用等、民間事業者の活力の導入について検討します。

②社会実験

- ・キャンプイベントや宿泊体験などのイベントの他、広大な自然環境を活かした企業研修を誘致するなど社会実験を実施し、集客の可能性等についての検証を行います。

③民間事業者サウンディング調査

- ・土地を有効活用するため、民間事業者との直接対話や意向調査を実施し、整備・運営方針を検討します。

④事業者選定

- ・事業者の選定にあたっては、幅広く提案を受けることに配慮した募集要件等を検討します。



土地の有効利用を検討する社会実験の例



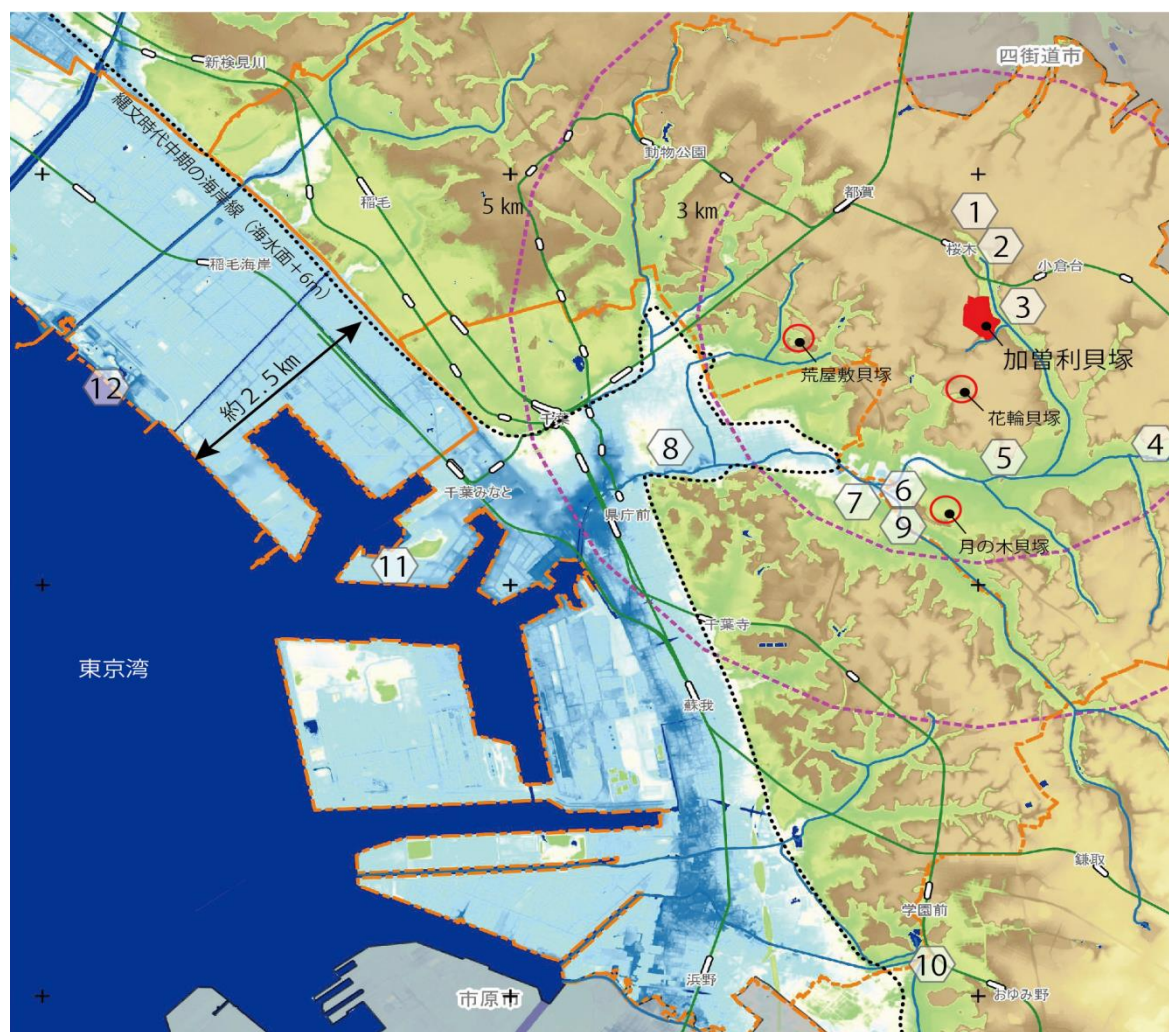
宿泊体験の例

第2節 周辺エリアにおける取組み

周辺エリアには、加曽利貝塚以外にも縄文時代の貝塚や集落跡がありますが、それ以外にも海や川や緑地など、加曽利貝塚や縄文時代と関係の深い様々な場所があります。ここでは、その場所をサテライトと位置付け、加曽利貝塚に暮らした人々の生活の全体像を把握するための構成要素として、コアエリアと連携した活用を推進します。

加曽利貝塚とサテライトを効果的に循環することが千葉市内陸部における観光資源となり、周辺商業地域の活性化や中心市街地からの回遊性向上など、地域振興の一助となるよう周辺エリアにおける取組みを示します。

1 『史跡加曽利貝塚保存活用計画』で示したサテライトイメージ



No	名称	エリアイメージ	生活イメージ
1	縄文小倉の森	森	狩猟(獣)、食物採集(山菜)、木材調達
2	坂月川ビオトープ	谷津・草地・湖沼	狩猟(獣・鳥)、食物採集(山菜)、植物資源(繊維・燃料・屋根材)、漁労(魚)
3	坂月川対岸の地層断面	台地	狩猟(獣)、粘土採掘、食物採集(山菜)、木材調達
4	大草谷津田いきもの里	森・台地・谷津・草地・低湿地	狩猟(獣・鳥)、粘土採掘、食物採集(山菜)、植物資源(繊維・燃料・屋根材)
5	都川	谷津・草地・低湿地	狩猟(獣・鳥)、食物採集(山菜)、植物資源(繊維・燃料・屋根材)
6	都川水の里公園	谷津・草地・低湿地	狩猟(獣・鳥)、食物採集(山菜)、植物資源(繊維・燃料・屋根材)
7	丹後堰公園	湖沼	狩猟(鳥)、食物採集(山菜)、漁労(魚)
8	本町公園	汽水	狩猟(鳥)、食物採集(山菜)、漁労(魚)
9	都市緑化植物園	森・台地・谷津・草地・湖沼・汽水	狩猟(獣・鳥)、粘土採掘、食物採集(山菜)、木材調達、植物資源(繊維・燃料・屋根材)、漁労(魚)
10	大百池公園	湖沼	狩猟(鳥)、食物採集(山菜)、漁労(魚)
11	ポートパーク	浜・干潟・浅瀬	狩猟(鳥)、食物採集(山菜)、漁労(貝・海草・塩)、漁労(魚)
12	稲毛海浜公園	浜・干潟・浅瀬・海	狩猟(鳥)、食物採集(山菜)、漁労(貝・海草・塩)、漁労(魚)

図 1-5-8 加曽利貝塚サテライトイメージ

2 サテライトを結ぶ緑地ネットワーク化の推進

(1) 基本的な考え方

- ・加曽利貝塚及び周辺のサテライトを周遊するための生態回廊（コリドー）を整備し、観光・環境教育・生物多様性の保全に向けた取組みを推進します。
- ・関連団体等と協働して、自然環境の把握と保全に向けた取組みを推進します。

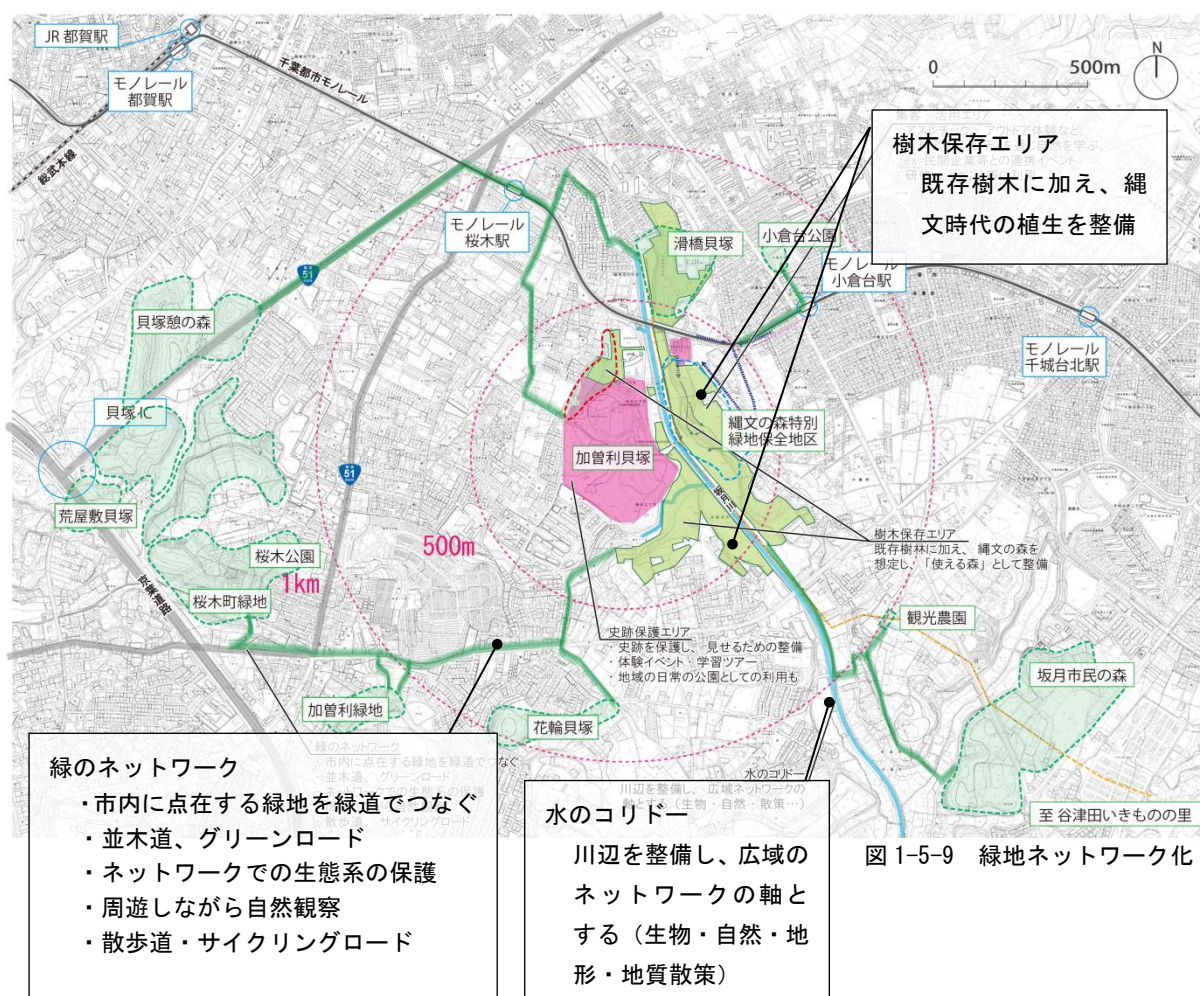
(2) 主な方針

①自然環境資源の現状の把握

- ・加曽利貝塚及び周辺の緑地などで、動植物調査、植生調査を実施して、自然環境資源の現況を調査したうえで、緑地整備を実施します。
- ・調査にあたっては、日頃から加曽利貝塚及びその周辺で自然保護などに取り組む関連団体と連携し、協働による調査を実施します。

②縄文の森の案内人（環境インタプリター）を担う人材の育成

- ・加曽利貝塚周辺で活動する関連団体やノウハウのある民間事業者と協力して、地元の小学校への出前授業、野外学習、中学校・高校の生物クラブなどの活動に対して支援を行い、縄文の森の案内人（環境インタプリター）を担う人材を育成します。



3 周辺の文化施設・商業施設等との広域連携の推進

(1) 基本的な考え方

- ・加曽利貝塚やサテライトの周遊を活性化させ、周辺エリアの賑わいを創出するため、周辺の文化施設や商業施設との連携に向けた取組みを推進します。
- ・加曽利貝塚の魅力をより多くの人に知ってもらうことを目的に新たなターゲット層を取込むため、グリーンツーリズム等の観光プロモーション施策や観光施設・宿泊施設等との連携に向けた取組みを推進します。

(2) 主な方針

①文化施設等での巡回展や企画展の開催

- ・それぞれの文化施設の特性を活かし、その地域と加曽利貝塚や縄文時代に関連する情報を発信し、新たな魅力の発見に繋がる取組みを実施します。
- ・博物館・美術館との巡回展や企画展での連携のほか、他の文化財や遺跡を取り込んだ歴史散策などの企画を実施します。
- ・これらの取組みを定期的に実施し、文化施設等との継続的な相互協力関係の構築を図ります。

②商業施設等における土産品等の開発や販売

- ・周辺の商工振興会や商店街などと連携し、加曽利貝塚や縄文時代ならではの土産品等を開発し、販売する取組みを推進します。
- ・サテライトの周遊中もしくは来訪者が帰路に着く際に商業施設に立ち寄るなど、観光地としての賑わいを創出します。

③グリーンツーリズムと連携した季節ごとに特色のあるイベント等の開催

- ・公園・自然型観光の特徴である四季折々の楽しみは、加曽利貝塚においても有効な手段であることから、旬の縄文グルメの提供や自然体験など、縄文時代の季節に応じたイベント等を開催します。
- ・縄文時代の時間帯（早朝や夜など）を意識したイベントなど、加曽利貝塚に滞在することでは得られない体験を新たな魅力として発信します。
- ・これらを首都圏に位置する加曽利貝塚で行うことにより、グリーンツーリズムのターゲットである首都圏在住の若年層グループやファミリー層にアプローチするとともにリピーターを取込むなど、集客力の向上を図ります。

④観光施設や宿泊施設等と連携した広域な周遊プランの開発

- ・加曽利貝塚の魅力をより多くの人に知ってもらうため、観光施設や宿泊施設等と連携し、滞在型の広域な周遊プランの開発に関する取組みを推進します。
- ・この取組みの実現によって、全国の修学旅行生や観光客等のこれまで加曽利貝塚を訪れることの少なかった新たなターゲットを取込むなど、さらなる集客力の向上を図ります。

4 交通ネットワークの整備

(1) 基本的な考え方

- ・コアエリアの整備にあわせて増加が予想される来訪者の利便性を確保しつつ、地域住民が安全、快適に生活できる交通環境を整備します。
- ・周辺エリア全体を周遊し、賑わいの広がり貢献するネットワークを形成します。

(2) 主な方針

①生活環境を守り、来訪者増に対応する道路ネットワーク

- ・メインアクセス道路を設定し、生活道路への流入を抑える交通網を計画します。アクセス道路の設定に当たっては、現況交通量調査、交通量予測などを実施した上で、交通量に対応するルート・道路仕様を検討します。
- ・公共交通機関から史跡に至る歩道について、サイン等を設置し、分かりやすい歩行空間となるよう検討します。

②来訪者・地域住民が快適に利用できる公共交通機関の整備

- ・路線バス、モノレールなど現況の公共交通機関の利用状況を調査し、遠方から訪れる来訪者や近隣の住民の日常的な利用を想定し、利便性を向上させる運行計画・ルートを作成します。
- ・計画にあたっては、シャトルバスやシェアサイクルなどの社会実験等を実施します。

③賑わいを地域に広げる散歩道、サイクリングロード

- ・地域を周遊できる散歩道やサイクリングロードなど、来訪者が周辺エリア全体を楽しみ、近隣住民が日常的に利用できるルートを検討します。

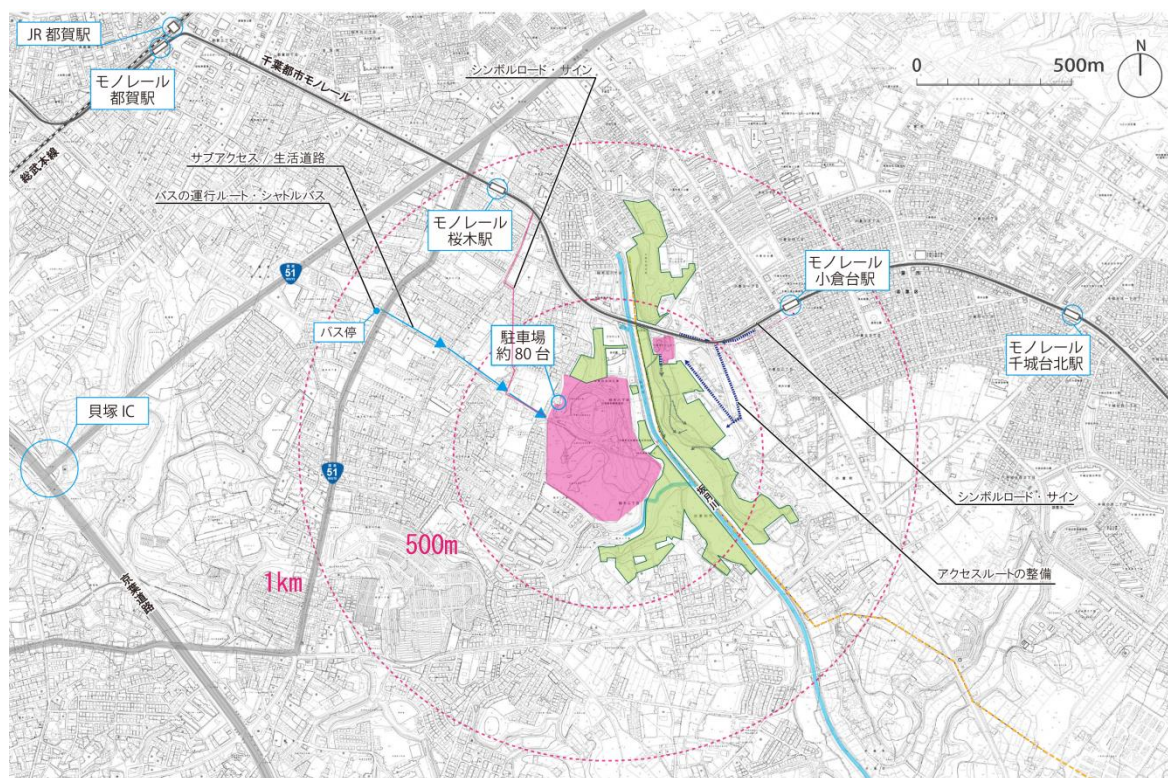


図 1-5-10 交通ネットワークの整備イメージ

(3) コアエリアと繋がる交通の整備

史跡とともに水辺や自然環境を楽しむことができる周遊路を整備します。併せて休憩施設などを設置し、自然に親しむ憩いの空間になるよう整備します。

また、新博物館から史跡にスムーズに移動できるよう、吊り橋を設置するほか、小型モビリティなどを利用した移動手段について検討します。

①史跡内園路の整備にあたっては、次の点に配慮します。

- ・効率的な見学ルート
- ・適切な休憩施設の配置
- ・バリアフリーへの対応

②新博物館から史跡までの移動手段の導入にあたっては、次の点に配慮します。

- ・環境に配慮するとともに、静かな環境を確保する移動方法の選定
- ・縄文時代への導入部として、期待感を高める演出
- ・周遊ルートの設定
- ・人道橋の設置にかかる関係機関との十分な調整

5 地域ブランディングの推進

(1) 基本的な考え方

- ・縄文文化や加曽利貝塚の価値と魅力を一般に広く理解してもらうため、多くの人が抱くイメージを可視化するなど、共有できる魅力の明確化を図るため、地域ブランディングを推進します。
- ・来訪者が周辺エリアに訪れた際、まち全体にブランドイメージが定着していると感じ取れるよう、それぞれの地域にブランドイメージの浸透化を図るための取組みを推進します。
- ・地域の人々が自らブランドイメージを検討することで、加曽利貝塚や縄文時代が身近に感じられ、郷土の宝としてより愛着が持てるよう、市民参加による事業推進を図ります。

(2) 主な方針

①定期的な意見交換の実施

- ・加曽利貝塚の特性を活かしたブランドイメージを確立するためには、市民・関連団体・企業等の多様な主体が共有できるテーマが重要であることから、ワークショップ等を開催し、定期的な意見交換を行います。

②それぞれの立場における情報発信

- ・市民参加により設定したテーマをもとに、それぞれの立場においてブランドイメージが来訪者に伝わるような取組み方法を検討します。

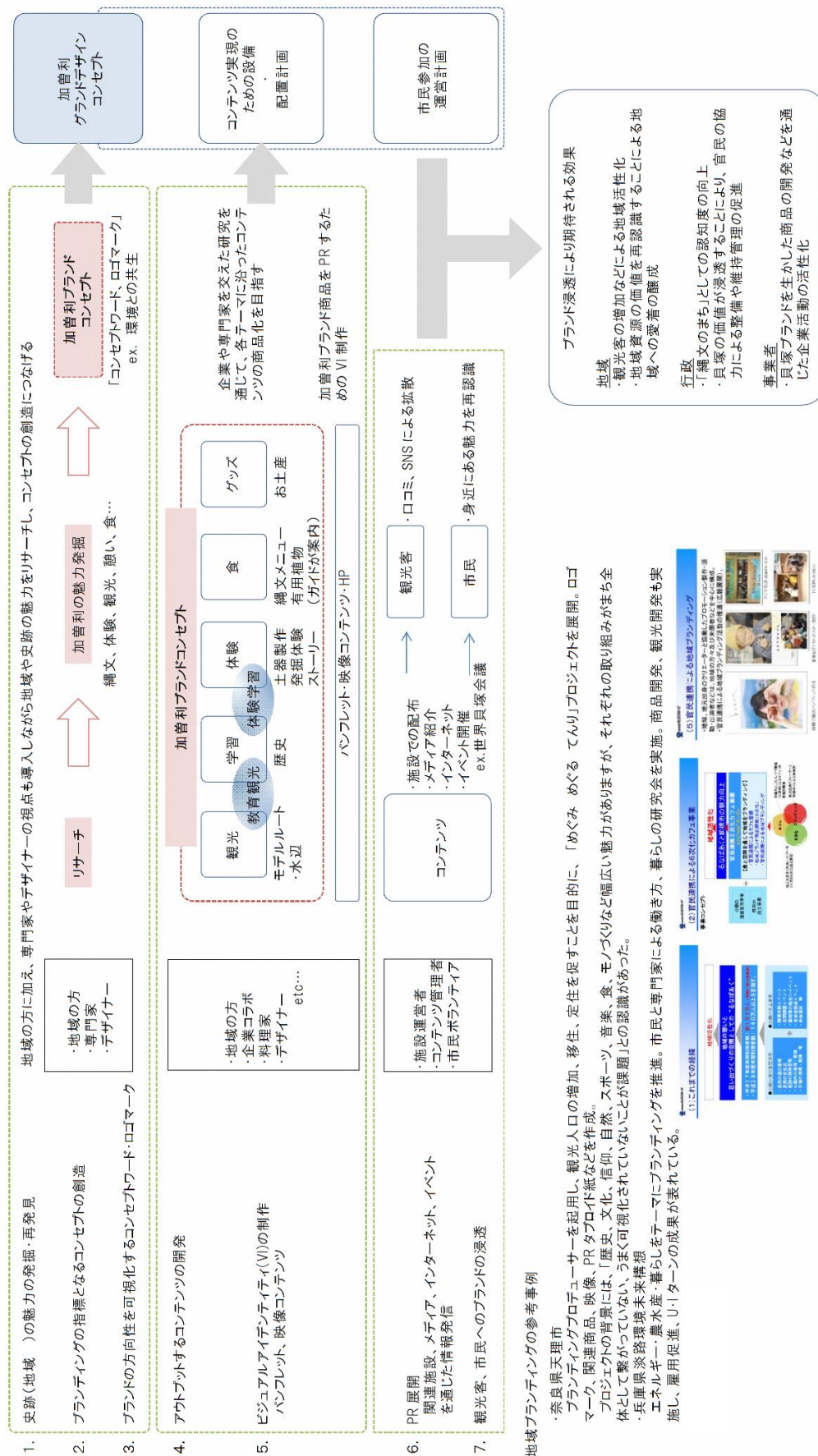


図 1-5-11 地域ブランディングのイメージ

第6章 グランドデザインに基づく取組みの進め方

第1節 推進体制

1 庁内の推進体制の整備

前章で将来像の実現に向けた取組みを示しましたが、その内容は極めて多岐に渡ります。史跡の整備と活用の他、公園緑地の保全と活用、周辺の道路や施設の整備、河川や環境保全に関する調整など、事業化に向け様々な調整・協議を進めていく必要があります。

それぞれの取組みを担当する庁内関係各課、関係機関が連携して事業を推進していく必要があります。関係者会議を定期的開催して情報共有を図るなど、連携体制を構築していきます。

さらには事業推進室の設置など中核となる組織体制の整備についても検討します。

2 市民との協働態勢の構築

施設等を整備した後、柔軟かつ活発に運営・活用していくため、市民との協働態勢の構築が重要です。円滑に構築するためには、計画の策定や設計等の事業検討の段階から、市民参加を図っていく必要があります。

グランドデザインの策定にあたり、ワークショップや意見交換会を開催し、市民参加を図ってきましたが、今後も事業の各段階でこうした取組みを行っていく必要があります。

3 加曽利貝塚の魅力を伝える担い手との連携体制

施設等の整備によって映像等の技術を導入したとしても、それだけでは加曽利貝塚の魅力を十分に伝えることは難しく、人的なガイドと合わさることで来訪者の満足度はより向上するものと考えます。

地域で愛され続ける史跡を目指すには、今までと同様に加曽利貝塚博物館の運営に協力していただいている団体等との連携を図っていくとともに、グランドデザインで示した取組みが実現できるよう、加曽利貝塚の魅力を伝える担い手の人材を育成していく必要があります。

4 事業の周知と発信

グランドデザインを広く市民に周知し、多くの人々に関心を持ってもらうため、定期的にシンポジウムやフォーラム等、周知・発信していくための取組みを行う必要があります。

第2節 事業方式

前章で示した取組みの中で、新たな施設の整備や既存施設の改修、さらに施設の効率的な運営を行うため、適切な方式を検討し、採用します。

【想定している事業方式】

- ①公設公営
- ②公設公営・一部民間へ業務委託
- ③公設民営（指定管理者制度）
- ④PFI方式

第3節 全体スケジュール

1 短期的整備

期 間 2020年度までの概ね2年

目 標 史跡指定地内の利便性の向上

2020年度までを目途とし、史跡指定地内の利便性の向上を図ることを第一の目標として、便益施設の整備や南貝塚の園路の改修、サインの再整備等を行います。

※詳細は「第2部 特別史跡加曽利貝塚史跡整備基本計画」に示しました。

2 中・長期的整備

期 間 2026年度までの概ね8年

目 標 新博物館の建設と新博物館と史跡指定地を結ぶルート、各エリアの整備

2026年度までを目途とし、主に以下の事業を実施します。

- a. 新博物館の整備
- b. 現博物館及び第2収蔵庫の解体・撤去
- c. 新博物館と史跡を結ぶルート、各エリアの整備
 - ・新博物館と史跡を直接つなぐ吊り橋等の整備
 - ・ツリーロード等、自然散策をしながら史跡へ向かう園路の整備
 - ・水辺活用エリアの景観・環境整備
- d. 新ルートで史跡指定地への入り口となる舟着場エリアの整備
- e. 大型建物の復元整備
- f. 旧大須賀家住宅の移設
- g. 北貝塚・南貝塚の貝層の表現
- h. 北貝塚周囲の園路の再整備
- i. 北貝塚貝層断面野外観覧施設の改修
- j. 縄文の森特別緑地保全地区内の整備

3 全体スケジュール

次の表において、計画全体のスケジュールを整理しました。

表 1-6-1 全体スケジュール

区分	整備項目	年度								
		2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026
特別史跡指定地内 短期的整備	復元集落整備	基本計画	実施設計	工事						
	北貝塚住居跡群観覧施設改修	基本計画	実施設計	工事						
	環境整備（第1期） ・貝層保護のための計画的な樹木伐採 ・園路（南貝塚）の再整備 ・解説板等のサインの再整備 ・四阿やベンチ等の休憩施設の設置	基本計画	実施設計	工事						
	便益施設の整備	基本計画	基本設計	実施設計	工事					
	第1収蔵庫及び第3収蔵庫の撤去	解体工事								
特別史跡指定地内 中・長期的整備	現博物館及び第2収蔵庫の撤去							解体計画	解体工事	
	環境整備（第2期） ・園路（北貝塚）の再整備 ・貝層表示の整備 ・大型建物跡復元整備 ・有用植物の新規植栽					基本計画	基本設計	実施設計	工事	工事
	旧大須賀家住宅の移設								移設計画	移設工事
	新博物館ゾーンの整備		基本計画	基本設計	実施設計	建設工事	建設工事	開館		
	水辺公園ゾーンの整備				基本計画	基本設計	予備設計	詳細設計	建設工事	建設工事 供用開始
指定地外	縄文の森ゾーンの整備				基本計画	基本設計	予備設計	詳細設計	建設工事	建設工事 供用開始
	周辺エリアの整備					基本構想	基本計画	社会実験等	社会実験等	運用開始

第4節 完成予想図



図 1-6-1 完成予想図（北東側から見た全体図）

第2部 特別史跡加曾利貝塚史跡整備基本計画

第1章 史跡整備基本計画の位置付け

ランドデザインとして第1部第6章までに示した将来像を実現するためには、長期的視点に立ちつつ、中核を担う史跡指定地内の整備と活用に優先的に取組み、早急に対応すべきものから段階的に進めて行く必要があります。史跡指定地内の整備と活用に関する取組みについては、第1部第5章に示しましたが、便益施設や園路の整備など、早急に対応すべきものがある一方、博物館の移転など長期にわたるものもあります。

そこで、史跡整備基本計画では全体的な史跡整備の基本方針を示した上で、その中でも早期に着手すべき整備事業をランドデザインの先行整備と位置付け、短期的整備として抽出します。その中でそれぞれ短期的整備の目標と実施内容を設定し、具体的な整備の個別計画とそのスケジュールを示します。

第2章 史跡整備の基本方針

第1節 遺構の整備に関する基本方針

加曽利貝塚の本質的価値を構成する要素の中核を担う遺構・包含層と埋蔵されている遺物を適切に保存するとともに、加曽利貝塚の特色を顕在化するための整備を図ります。

1 貝層の保護

- ・加曽利貝塚に自生する樹木は、縄文時代の景観を演出する要素の一つとなっていますが、大木化した樹木は、貝層に悪影響を及ぼす要因となっている可能性があります。
これらの樹木は貝層保護のため、伐採などで整理する必要がありますが、自然環境に配慮し、時間をかけて次第に減らしていきます。
- ・加曽利貝塚では、貝や土器などの遺物が地表面に露出している箇所がありますが、これは盛土が薄いことが要因であると考えられるため、適切な厚さの盛土を行います。

2 貝層の表現

- ・加曽利貝塚の特色である貝塚の大きさと広がり顕在化するため、盛土を行った上に貝が堆積している状況を表示することを検討します。
- ・ただし、貝層の分布と形成過程の全体像が明らかになっていないため、今後の調査研究成果を参考に段階的に整備するとともに、VR（仮想現実）・AR（拡張現実）などの映像技術の活用を視野に入れて検討します。

3 大型建物の復元整備

- ・大型貝塚の貝層の高まりは加曽利貝塚を象徴するものですが、来訪者がそれだけを見ても貝塚が大きなムラの一部であり、多くの人々が暮らしていたことを想像することは難しく、別のモニュメントとなる遺構の整備が必要です。
- ・北貝塚の東側斜面から発見された大型建物跡を加曽利貝塚の象徴するモニュメントとして復元し、内部は公開するとともに、体験学習や休憩スペースなどの機能も付加することを

検討します。

- ・ただし、復元整備にあたっては、建物構造等が明らかになっていないため、今後の調査研究成果を参考に整備していく必要があります。

4 縄文集落の復元整備

- ・来訪者が縄文時代の暮らしを想像し、理解できるよう、南貝塚の復元集落エリアにおいてさらなる竪穴住居の復元整備を進めます。
- ・なお、復元する竪穴住居の棟数については、具体的な活用方法や運営体制にあわせ、適切に維持管理できる数を整備していきます。

第2節 修景に関する基本方針

来訪者が縄文時代の景観と人々の暮らしを体感できるよう、修景を進めるとともに見学時の安全・安心に配慮した整備を図ります。

1 植栽管理

- ・自然環境の現状把握を定期的に行いながら、適切な植栽管理を実施していきます。管理は保存活用計画で示した下表の方針に基づき、計画区域を設定して行い、各区域の目標植生への遷移を目指します。
- ・大木化した樹木は、地下の遺構等に悪影響を与えるだけでなく、防犯上、問題となる場合があります。これらの樹木は公園利用者の理解を得ながら、計画的に減らし、来訪者の安全・安心な利用環境を維持していきます。

表 2-2-1 保存活用計画における目標植生区分案

計画区域	区域説明	現況	目標植生
①保全植生域	現存植生の保全を主としながら、必要に応じて間伐や補植を行い、目標植生への遷移を促す地域。	斜面緑地林	シイ・カシ・ケヤキ等斜面林
		草地	草地保全、シラカシ・コナラ等点在
		クヌギ・コナラ二次林	クヌギ・コナラ二次林として保全し、ゆくゆくはシイ・カシ林に遷移
②復元植生	現況土地利用に関わらず潜在的な土地条件により目標植生の達成を図る地域。	クヌギ・コナラ等落葉樹林	シイ・カシ林に遷移させて保全
		畑地その他	シイ・カシ林及び二次林
		谷地・水田	ハンノキ・ヤナギ類等の水辺林など
③人為植生	施設等に伴う特殊な植栽部分。樹種は郷土樹種に限らず、目的に応じて選択する。	—	施設周りの修景植栽
		—	周辺目隠しや、フェンスとしての遮断植栽



図 2-2-1 目標植生区分

2 景観阻害物の撤去

- ・体験学習エリアへ電気を供給している電柱などは、体験学習エリアの整備の進捗にあわせ、不要なものを撤去します。史跡指定地内に残す必要があるものは、地中埋設化や引込ルートの変更を図るなど、景観復元に向けて設置者と協議していきます。
- ・北貝塚の貝層部分の送電線鉄塔は、史跡指定地外への将来的な移転を目指し、設置者と協議していきます。

3 縄文時代の生活風景の演出

- ・来訪者がより縄文時代の人々の暮らしを体感できる仕組みとして、当時の生活風景を演出するプログラムの検討を行います。
- ・縄文時代の編み布（アンギン）体験や、土器づくりの実演など当時の生活風景を再現したガイダンスを取り入れていきます。

第3節 施設整備に関する基本方針

遺構等の保存と史跡の景観に配慮しながら、縄文時代の人々の暮らしや文化を体験できる機能を持った施設や、来訪者の利便性向上に向けた施設の整備を図ります。

1 便益施設の新設

- ・来訪者が史跡を快適に見学できるよう、団体見学者でも昼食や休憩に利用できる便益施設を整備します。
- ・新博物館ゾーンと史跡の間に距離があるため、来訪者へ史跡見学に関する情報提供や体験学習を提供できる機能、案内ガイドや巡回警備する警備員が待機できる管理・運営機能の追加を検討します。

2 野外観覧施設の改修

- ・露出展示している遺構の状況を継続的に観察し、遺構保存上問題が無い場合は、当面、現在の利用を継続していきます。
- ・北貝塚の貝層断面観覧施設と住居跡群観覧施設は、展示環境の改善に加え、バリアフリー化や耐震改修を行います。

3 園路の再整備

- ・新たな博物館ゾーンからアクセスしやすい、史跡の見学や活用に適した動線を確保できるルートを検討します。
- ・直接史跡を訪れる来訪者のため、現在の史跡への出入口からのアクセスにも配慮します。
- ・北貝塚の周囲の舗装された既設園路は、北貝塚と南貝塚をつなぐ貝層を遮断しているため撤去し、貝層に影響を与えない位置に園路を再設置します。
- ・南貝塚の園路は現状のルートを基本に、車いすやベビーカーを利用した来訪者でも通行しやすい舗装に改修します。
- ・維持管理のための作業車両や緊急車両が通行できる管理用道路を設置します。

4 サイン（解説板・案内板）の再整備

- ・遺跡や遺構の解説板は、現在の設置場所を基本とし、史跡全体に設置します。
- ・写真やパース図を用いたビジュアルで分かりやすい内容とし、多言語による解説や専用アプリケーション等との連動による映像表示などの機能を付加することも検討します。
- ・史跡見学に際しての施設案内等の情報提供を行う総合案内板は、多言語化へ対応したものを現在の史跡出入口付近に設置します。
- ・デザインは、全体を通じて統一感のあるものとします。

5 その他の管理・便益施設（囲柵や休憩施設など）の再整備

- ・休憩のためのベンチや四阿は、史跡景観に配慮しながら適宜設置していきます。また、必要な場所に対して危険防止柵や管理柵を設置します。

6 景観を阻害している既存施設の撤去、移設

- ・博物館や収蔵庫、旧大須賀家住宅などの既存施設は、グランドデザインに基づく整備の進捗にあわせ、史跡指定地内からの撤去を進めます。

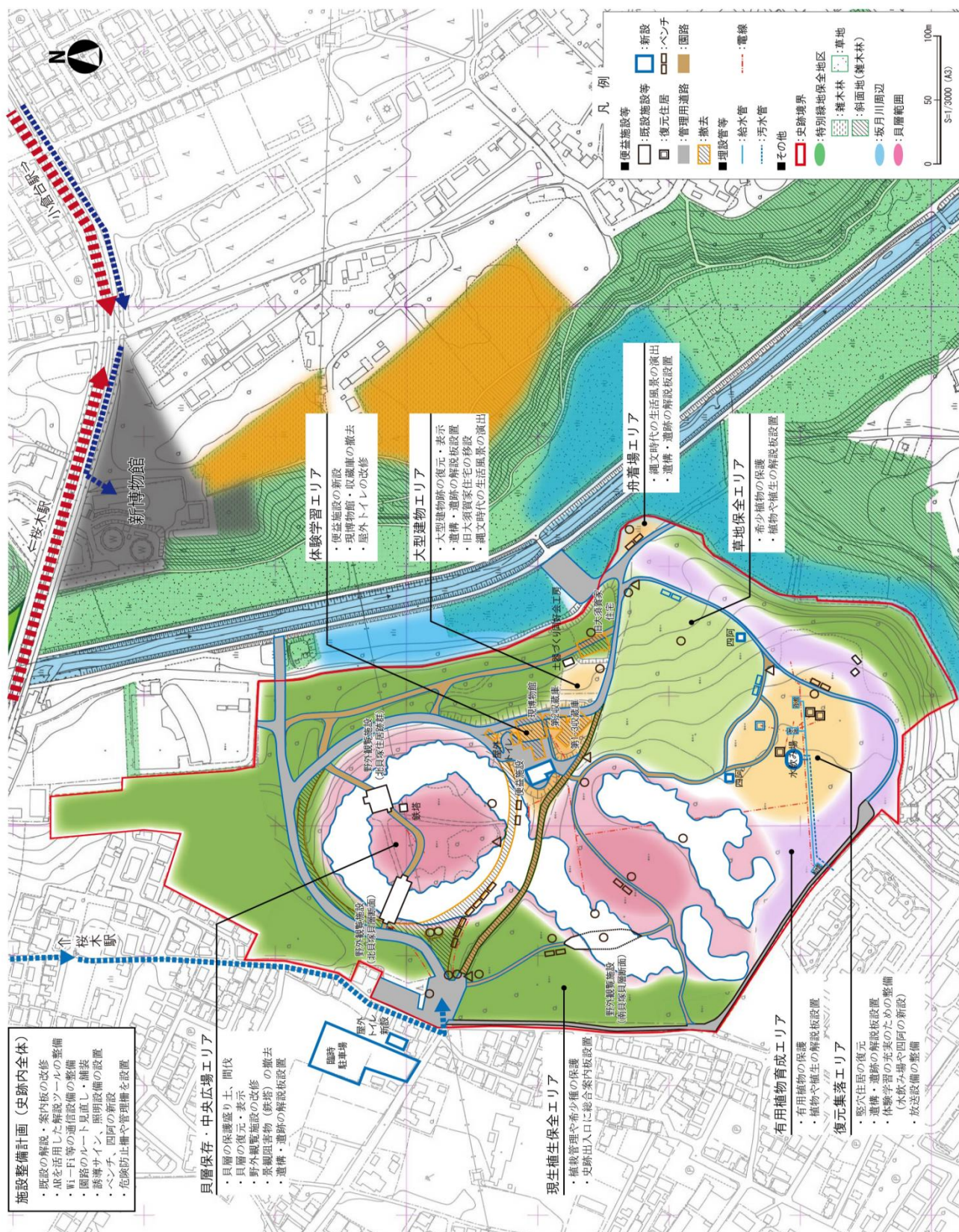


図 2-2-2 中・長期的史跡整備方針図

第3章 短期的整備の目標と実施内容

第1節 目標

前章で示した史跡整備の基本方針に基づき、加曽利貝塚の本質的価値を保護する上で必要性が高いものや、増加する来訪者が快適に史跡を見学できるよう早期に環境改善を図る必要があるものについて、2020年までの整備を目指します。

第2節 実施内容

保存活用計画で示した課題や、来訪者アンケート、市民ワークショップなどでの意見を踏まえ、本質的価値の保護と、来訪者の利便性向上に向けた整備を図ります。

1 遺構の整備

- ・加曽利貝塚の本質的価値を構成する要素の中核である遺構・包含層を適切に保護していくため、次の整備を行います。
 - ①貝層上の樹木の計画的な伐採
 - ②貝層保護のための盛土
 - ③復元集落エリアの再整備

2 修景

- ・縄文時代の景観と当時の人々の暮らしが体感できるよう、安全・安心な利用環境に配慮しながら、次の整備を行います。
 - ①現況の自然環境を把握するための樹木調査の実施
 - ②来訪者の安全・安心を脅かす樹木の計画的な伐採

3 施設整備

- ・来訪者の利便性向上や、史跡見学の際の解説機能向上を図るため、次の整備を行います。
 - ①便益施設等の設置
 - ②既存施設（野外観覧施設や園路等）の再整備
 - ③サインの再整備
 - ④解説機能向上のための映像等の制作
 - ⑤インフラ等の整備
 - ⑥各整備の実施にあたって必要な発掘調査の実施

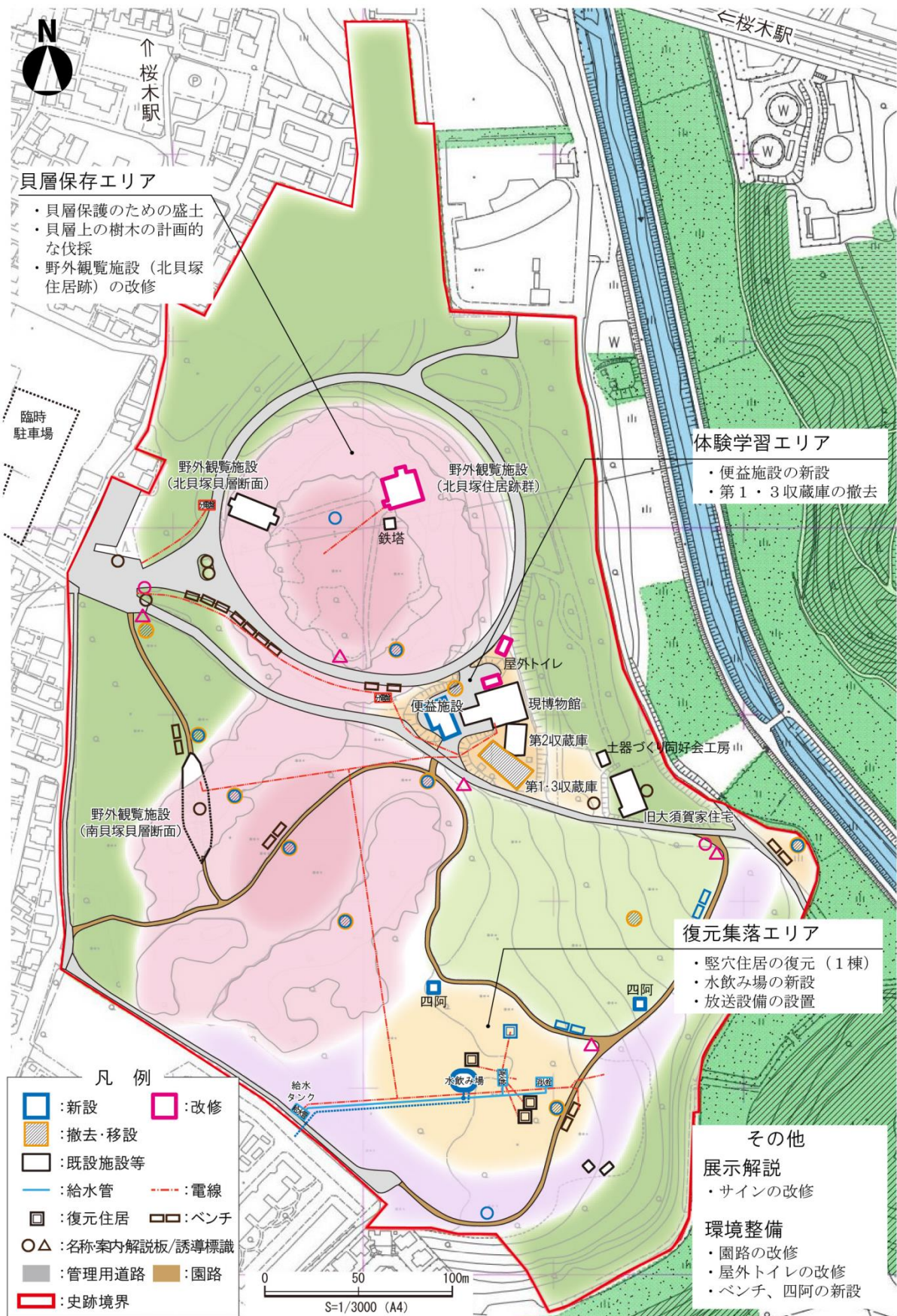


図 2-3-1 各ゾーニングにおける短期的整備の実施内容

第4章 短期的整備の個別計画

第1節 遺構の整備

1 貝層上の樹木の計画的な伐採

- ・貝層に悪影響を及ぼしている樹木は、公園利用者の理解を得ながら計画的に伐採します。

2 貝層保護のための盛土

- ・北貝塚の貝などが露出している箇所には盛土を行い、貝層を保護します。

3 復元集落エリアの再整備

- ・現在、復元した竪穴住居が3棟（内部を公開しているのは2棟）あります。
- ・来訪者が縄文時代の暮らしを体感できるよう、さらに積極的に活用していくため、新たに1棟の竪穴住居を復元整備します。
- ・建設場所は、このエリアの活用方法を考慮して選定します。

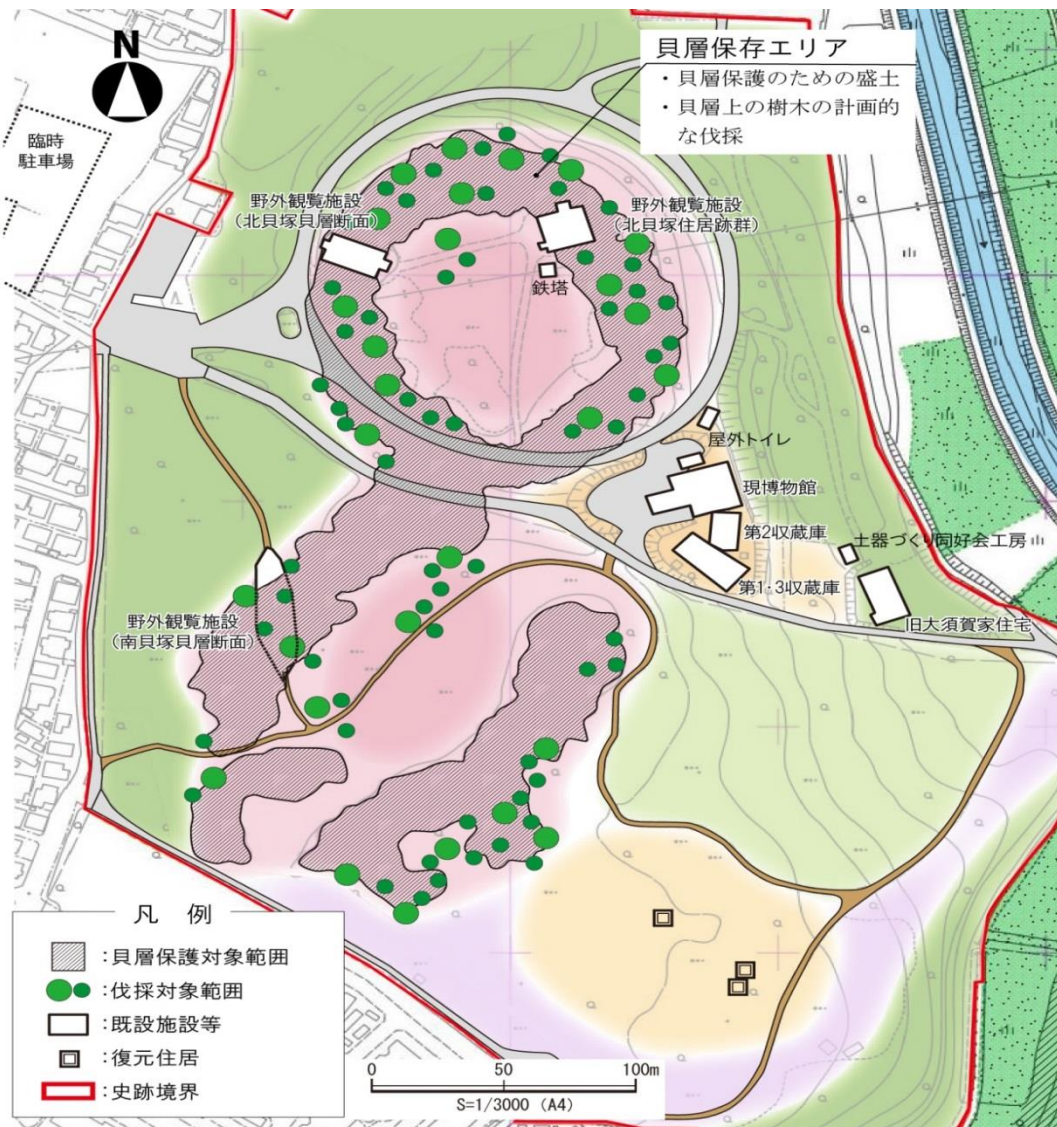


図 2-4-1 貝層保存のための整備方針図

第2節 修景

1 現況の自然環境を把握するための樹木調査の実施

- ・適切な植栽管理をおこなうため、樹木調査を実施し、管理台帳を整備します。

2 見学者の安心・安全を脅かす樹木の計画的な伐採

- ・上記の樹木調査と併せ、日常的な史跡内の巡回により、対象樹木を選定します。
- ・公園利用者の理解を得ながら、計画的に伐採を進めます。

第3節 施設整備

1 便益施設等の設置

(1) 団体を収容できる便益施設の設置

- ・史跡見学の際、突然の雨天時には休憩できる場所がなく、特に社会科見学等の団体利用者に不便が生じています。この問題を解消するため、トイレと休憩も可能な多目的スペースを備えた便益施設を新設します。
- ・建設場所は遺構への影響が少ない現博物館に隣接した空地部分とします。
- ・設計に当たっては、園路の再整備を考慮して入口等を設置します。

表 2-4-1 便益施設の機能と必要諸室の概要

部屋名	面積	概要
便益施設	220 m ² 程度	・景観への配慮と機能性を重視し、建設場所は現博物館隣接地とする。 ・団体利用者（80名規模を想定）が収容できる休憩室やトイレの他、体験学習スペースとしての機能も付加する。
エントランス	20 m ² 程度	・休憩室との間に間仕切り等を設けず、一体の空間として利用できるようにする。 ・エントランスには受付を設置し、管理機能を持たせる。
休憩室	160 m ² 程度	・団体が収容できるよう、休憩室の机や椅子は可動式とし、収納スペースも設置する。 ・映像でのガイダンスも行えるよう、映像機器を設置する。
トイレ	40 m ² 程度	・80名程度の団体利用に対応できるよう、男女でそれぞれ必要となる個数を設置する。 ・車椅子利用者などに配慮し、多目的トイレを設置する。

※トイレのデータについては『建築設計資料 53 道の駅』建築思潮研究所・編を参照



図 2-4-2 便益施設配置図

(2) 休憩施設

- ・南貝塚の東側には、急な降雨や雷雨などの際に、屋根のある施設が近くにないことから、避雷針付きの四阿を新設する他、休憩所としてベンチの新設も行います。



四阿（イメージ図）



ベンチ（イメージ図）

2 既存施設（野外観覧施設や園路等）の再整備

(1) 野外観覧施設

- ・北貝塚住居跡群観覧施設は、耐震補強のための屋根改修及び展示環境の改善を行います。
- ・北貝塚貝層断面施設の改修は、ランドデザインに基づく園路の再整備を考慮して検討します。

(2) 園路・管理用道路

- ・南貝塚の園路について、歩行しやすく、車椅子などでも安全に通行できる舗装を行います。舗装は史跡内であることに配慮して、土系舗装を基本に検討します。また、現在の園路幅は約2mであり、車椅子ですれ違えることが可能であるため、拡幅は原則行いません。
- ・最も東側に位置する外周の園路は、将来的に管理用道路とすることを想定しているため、現在の幅員2mから3mに拡幅し、管理用車両等が通行可能な舗装に改修します。
- ・なお、南貝塚の中央を通る園路については、発掘調査を行うことを考慮して舗装は行わず、現状のままとします。
- ・北貝塚の園路は新博物館の建設にあわせ、整備します。



園路（イメージ図）



管理用道路（イメージ図）

(3) 屋外トイレ

- ・既存の屋外トイレは今後も維持管理や改修しながら使用していきます。

(4) 収蔵庫

- ・史跡内の景観を阻害している施設のうち、博物館に併設する第1・3収蔵庫を撤去し、その跡地は、体験学習などで有効活用します。

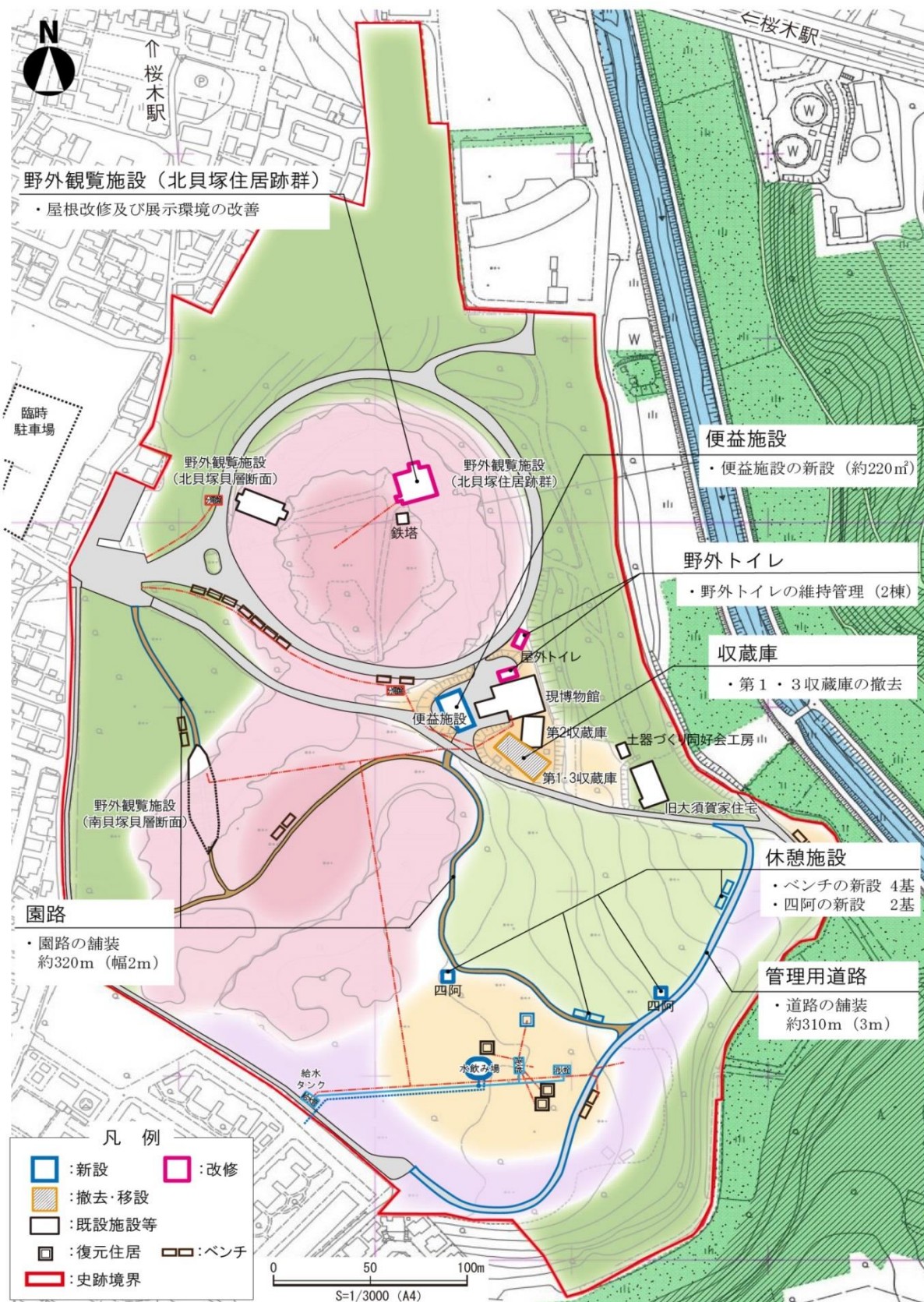


図 2-4-3 便益施設及び既存施設改修方針図

3 サインの再整備

(1) 既存サインの概要と整備内容

- ・既存サインは、大きく名称板・案内板・解説板、誘導標識の4種類に分けられ、それぞれに対応した整備を実施していきます。
- ・既存サインの概要と整備内容について、次のとおり整理しました。

表 2-4-2 既存サインの概要と整備内容

種類	概要	番号とタイトル	整備内容
名称板	・加曽利貝塚の名称を記したものの。 ・現在の入り口付近に、史跡名称板、特別史跡名称板、公園名称板が存在する。	①史跡名称板	中・長期的整備にあわせ撤去
		②特別史跡名称板	中・長期的整備にあわせ移設
		③公園名称板	中・長期的整備にあわせ撤去
案内板	・利用案内や見学の際の注意点を記したものの。 ・史跡見学のための案内板や、周辺の貝塚や文化財をまわる千葉市の散歩道などが存在する。	④駐車場利用案内板	内容を修正しながら継続して使用
		⑤史跡案内板	内容を修正しながら継続して使用
		⑬史跡案内板	内容を修正しながら継続して使用
		⑳加曽利貝塚コース案内板	短期的整備において撤去
解説板	・加曽利貝塚の遺構や出土遺物、植生等についての解説を記したものの。 ・南貝塚を中心に解説板が設置されており、南貝塚野外観覧施設の上には、野外模型が存在する。	⑥縄文時代の植生	撤去を行い、㉔に統合
		⑦南貝塚の貝層	改修時点の調査研究成果を反映した内容に修正
		⑨B地点発見の土器	改修時点の調査研究成果を反映した内容に修正
		⑩（南）貝塚の中心	改修時点の調査研究成果を反映した内容に修正
		⑪共同墓地か	改修時点の調査研究成果を反映した内容に修正
		⑫縄文中期の集落	改修時点の調査研究成果を反映した内容に修正
		⑬南貝塚の野生植物	撤去を行い、㉔に統合
		⑭縄文時代の船着場か	改修時点の調査研究成果を反映した内容に修正
		⑯旧大須賀家住宅	中・長期的整備にあわせ移設
		⑰巨大な建物跡の発見	改修時点の調査研究成果を反映した内容に修正
		⑱加曽利貝塚の位置/ 南貝塚の調査/ 大型貝塚と住居址群	改修時点の調査研究成果を反映した内容に修正
		⑲E地点と加曽利E式土器/ 加曽利E式土器の特徴	改修時点の調査研究成果を反映した内容に修正
		㉔新設 加曽利貝塚の植生	有用植物育成エリア内に新設
		㉕新設 北貝塚全体	北貝塚全体についての解説板を新設
誘導標識	・史跡内の主要施設への方向を示したものの。	㉖～㉗	中・長期的整備にあわせ移設

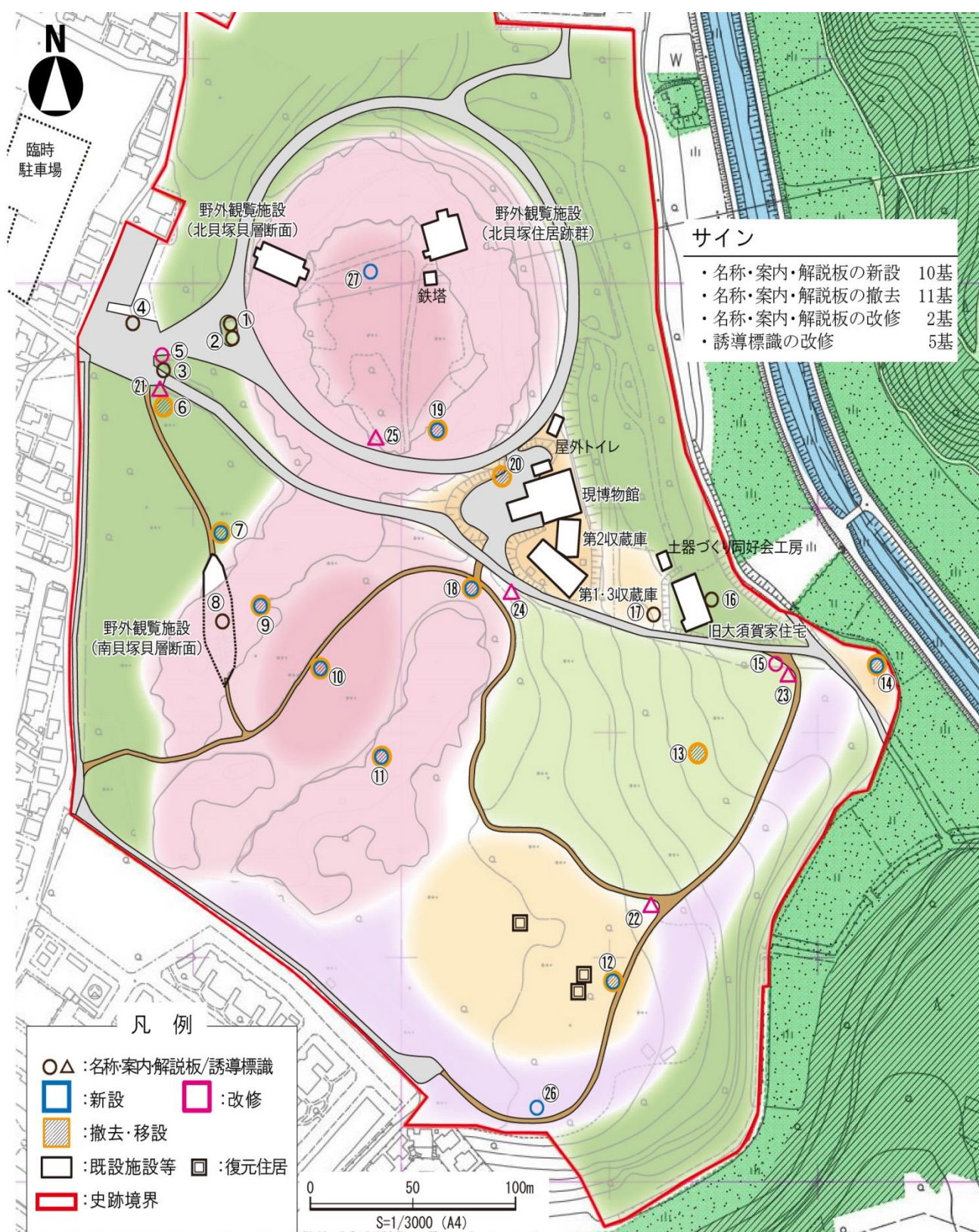


図 2-4-4 サインの再整備方針図

(2) 解説板の改修

- ・現在の解説板は陶器製で、内容に変更があった場合、破損による改修が容易にできないため、解説板本体を撤去し、板面の修正が容易なものを設置して、維持管理と情報発信をスムーズに行います。
- ・解説板に記載する内容は来訪者に伝わりやすく簡潔に表現し、写真やパース図などを用いて、ビジュアルで分かりやすいものとします。

(3) 多言語化への対応

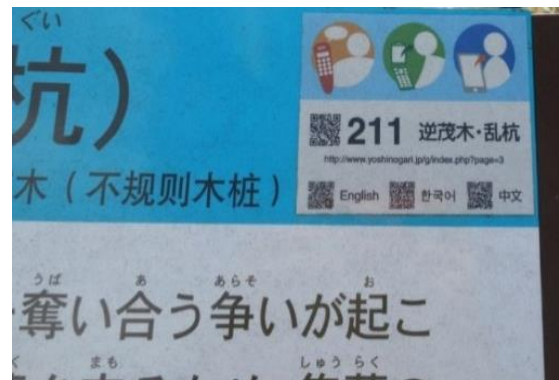
- ・多言語化や解説用アプリケーションと連動するよう整備を行います。
- ・多言語の表記については、日本語・英語を基本とし、加曽利貝塚や千葉市へ来訪する外国人を把握し、必要な言語への翻訳を行います。

(4) サインのデザイン

- ・デザインは統一感のあるものとします。



シート状の解説板（史跡武蔵国分寺跡）



QRコードにより多言語化対応している解説板
（吉野ヶ里歴史公園）

4 解説機能向上のための映像等の制作

(1) 解説用映像の制作

- ・加曽利貝塚の概要をビジュアルでわかりやすく解説するための映像を制作します。
- ・加曽利貝塚や縄文時代に関する一般的な知識がわかるものから、より専門性の高いものなど、視聴者のニーズに合わせ、調査・研究成果を反映させ制作します。

(2) 解説用アプリケーションの制作

- ・史跡を見学しながら、モバイル端末で加曽利貝塚の解説や、映像を視聴できるアプリケーションソフトの制作を行います。
- ・多言語化や音声のあるアプリケーションとし、外国人や障害者などに配慮したソフトとします。

5 インフラ等の整備

(1) 復元集落エリアの屋外水道の新設

- ・復元集落エリアで体験学習など活用の幅を広げるために、屋外水道を新設します。
- ・史跡南端の給水タンクから復元集落エリアの消火栓まで延びている給水管を延長します。
- ・污水管を設置して史跡外の污水桝に接続させます。



屋外水道（イメージ図）



消火栓の設置（加曽利貝塚）



図 2-4-5 復元集落エリア整備図

(2) 放送設備

- ・イベント時や災害時に現博物館から史跡内に放送での呼びかけを行えるように、復元集落エリアや現在の正面入り口付近に放送設備を設置します。

6 各整備の実施にあたって必要な発掘調査の実施

(1) 拡幅を行う南貝塚の管理用道路部分の発掘調査

- ・拡幅を行う復元集落エリアの東側の園路については、整備着手前に発掘調査を実施した上で整備を行っていきます。

(2) 新設する屋外水道のための発掘調査

- ・復元集落エリアに屋外水道を設置するため、給水管の延長を行いますが、この整備着手前に発掘調査を実施した上で、整備を行っていきます。

第4節 整備スケジュールと年次計画

史跡整備のスケジュールと年次計画については、第1部第6章第3節の全体スケジュールの中で示しました。短期的整備は2020年までを目途に、中・長期的な整備は概ね2026年までを目途に実施します。

巻末資料

1	グランドデザイン策定の経過	(2)
2	加曽利貝塚博物館入館者数の目標設定にかかる分析	(3)
3	公園利用者数の目標設定にかかる分析	(8)
4	アンケート調査の結果	(10)
5	ワークショップの実施結果	(15)
6	類似施設の先行事例調査の結果	(19)
7	専門家ヒアリングの結果	(30)
8	千葉県まちづくり未来研究所による政策提言報告書の抜粋	(42)

1 グランドデザイン策定の経過

グランドデザイン策定にあたっては、加曽利貝塚の調査・研究及び公開・活用に関する有識者からの意見を取り入れるため、千葉市史跡保存整備委員会と、その下部組織の史跡加曽利貝塚調査研究部会における協議によりまとめられました。

また、文化庁文化資源活用課及び千葉県教育庁教育振興部文化財課においては、計画策定に伴い、整備・活用に関する専門的な意見をいただきました。

表 巻末 1-1 千葉市史跡保存整備委員会構成委員

No	氏名	所属	専門分野	役職
1	岡本 東三	千葉大学名誉教授	考古学	委員長
2	青木 繁夫	東京芸術大学客員教授	保存科学	副委員長
3	赤坂 信	千葉大学名誉教授	造園学	委員
4	高橋 龍三郎	早稲田大学教授	考古学	委員
5	竹内 恵智郎	千葉市中心市街地まちづくり協議会会長	集客観光	委員
6	谷口 康浩	國學院大學教授	考古学	委員
7	中村 俊彦	放送大学客員教授	自然環境	委員

表 巻末 1-2 加曽利貝塚調査研究部会構成委員

No	氏名	所属	専門分野	役職
1	高橋 龍三郎	早稲田大学教授	考古学	部会長
2	谷口 康浩	國學院大學教授	考古学	副部会長
3	岡本 東三	千葉大学名誉教授	考古学	委員
4	設楽 博己	東京大学教授	考古学	委員

表 巻末 1-3 指導・助言機関

No	氏名	所属	役職
1	中井 將胤	文化庁文化資源活用課	文化財調査官
2	吉野 健一	千葉県教育庁教育振興部文化財課	主任上席文化財主事

表 巻末 1-4 千葉市史跡保存整備委員会開催概要

回数	開催日	内容
第1回	2017（平成29）年 5月31日	計画の検討方法及び策定までのスケジュール
第2回	2017（平成29）年11月15日	グランドデザインの方向性の検討①
第3回	2018（平成30）年 3月14日	グランドデザインの方向性の検討②
第4回	2018（平成30）年 4月23日	グランドデザイン（案）の諮問
第5回	2018（平成30）年12月 4日	グランドデザイン（案）の答申

2 加曽利貝塚博物館入館者数の目標設定にかかる分析

加曽利貝塚博物館の入館者の推移や内訳から、現況について整理しました。さらに、首都圏にある強みを活かし、加曽利貝塚博物館へのアクセス時間を踏まえた圏域の人口について分析を行い、博物館入館者の集客目標数を設定しました。

(1) 入館者の推移と内訳

①加曽利貝塚博物館入館者数の推移

次ページ（図 巻末 2-2～2-4）のグラフは入館者の推移を表したものです。

加曽利貝塚博物館の入館者のピークは1982（昭和57）年度の73,225人です。この年をピークに入館者数は減少し、1998（平成10）年度に2万人を下回りました。

2015（平成27）年度には、発掘体験等の新しい体験学習プログラムを導入したことにより、26,230人に増加しました。

2017（平成29）年度は特別史跡の指定をはじめ、新たな発掘調査を実施したことなどが報道等で取り上げられたとともに、加曽利貝塚で開催したイベントの効果もあり、7万人を超えました。

②年齢別の団体入館者数の推移

大人（15歳以上65歳未満）・小人（6歳以上15歳未満）別の団体入館者数の推移から、1982（昭和57）年度以降、小人の団体入館者数が減少していることがわかります。これは単に人口減少だけでなく、1981（昭和56）年の国立歴史民俗博物館、1986（昭和61）年の房総のむらの開館等により千葉県内の歴史学習の場が多様化し、加曽利貝塚が小・中学校の社会科見学等の対象先として選ばれなくなってきたことが推定されます。

③入館者の内訳

入館者の内訳について、入館料を徴収していた2015（平成27）年度末の入館者数は、入館料免除者（0歳以上6歳未満及び65歳以上）を除き、大人10,465人であり、小人10,982人となっています。

この数値と同時期の千葉市の人口（住民基本台帳記載の人口）を比較（入館者数は千葉市内・市外での統計がないため、単に人数の比較となる）すると、大人の入館者数は1.73%であり、団体より個人の割合が大きくなっています。小人の入館者数は14.03%で、大人とは逆に個人より団体の割合が大きくなっています（図 巻末 2-1）。

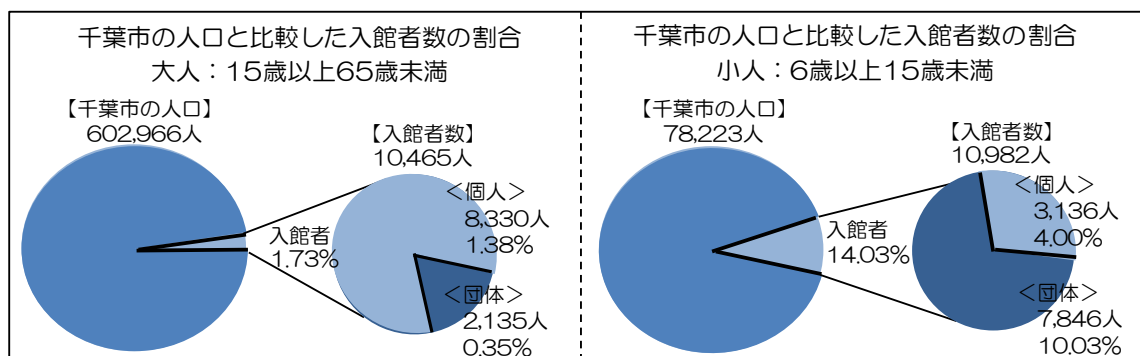


図 巻末 2-1 千葉市の人口と対比した入館者数の割合（2015（平成27）年度末）



図 巻末 2-2 加曽利貝塚博物館の総入館者数

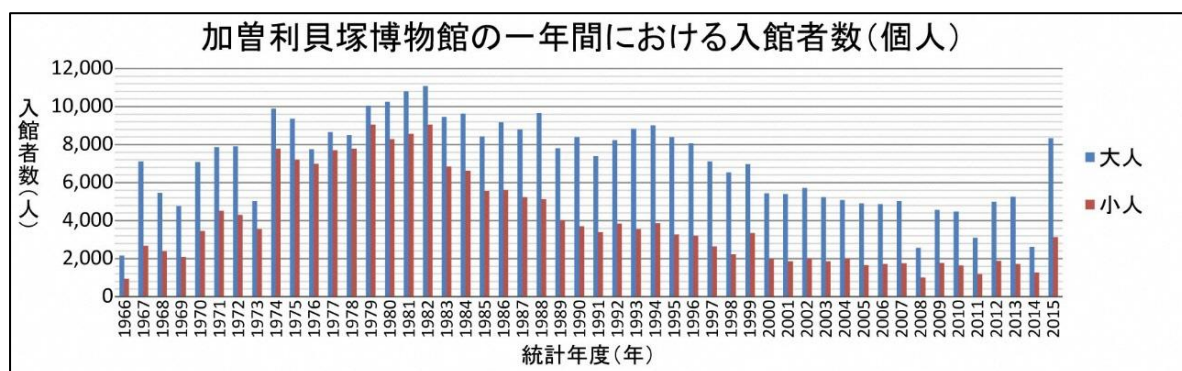


図 巻末 2-3 加曽利貝塚博物館の年間入館者数(個人)



図 巻末 2-4 加曽利貝塚博物館の年間入館者数(団体)

(2) 圏域人口の分析

主要となるターゲットの人口が圏域にどれほど存在しているか次のとおり整理しました。

●圏域区分の設定

加曽利貝塚の来訪者として推定される圏域を次ページ(図 巻末2-5)のように設定しました。

<千葉県内 アクセスが概ね1時間以内>

千葉市、市川市、船橋市、茂原市、佐倉市、東金市、習志野市、市原市、八千代市、
浦安市、四街道市、八街市

<千葉県外 アクセスが概ね2時間以内(総武線沿線エリア)>

東京都千代田区、港区、新宿区、文京区、台東区、墨田区、江東区、渋谷区、中野区、
杉並区、豊島区、荒川区、足立区、葛飾区、江戸川区、武蔵野市、三鷹市

圏域の6歳から100歳代までの総人口は約850万人です。このうち、主要ターゲットの総数を次のとおり推計しました。

●小学生(6歳以上13歳未満) 約490,000人

※社会科見学は5、6年生が中心であるが、遠足等で低学年も訪れることから、全学年を対象とした。

●小学生とその家族を対象としたファミリー 約1,470,000人

※ひとり親世帯などもあるが、ここではすべて両親がいて、兄弟姉妹がいない3人世帯とした。

●シニア世代(60歳以上90歳未満) 約2,337,500人

※主要なターゲットは60歳以上であるが、ここでは上限を90歳未満とした。

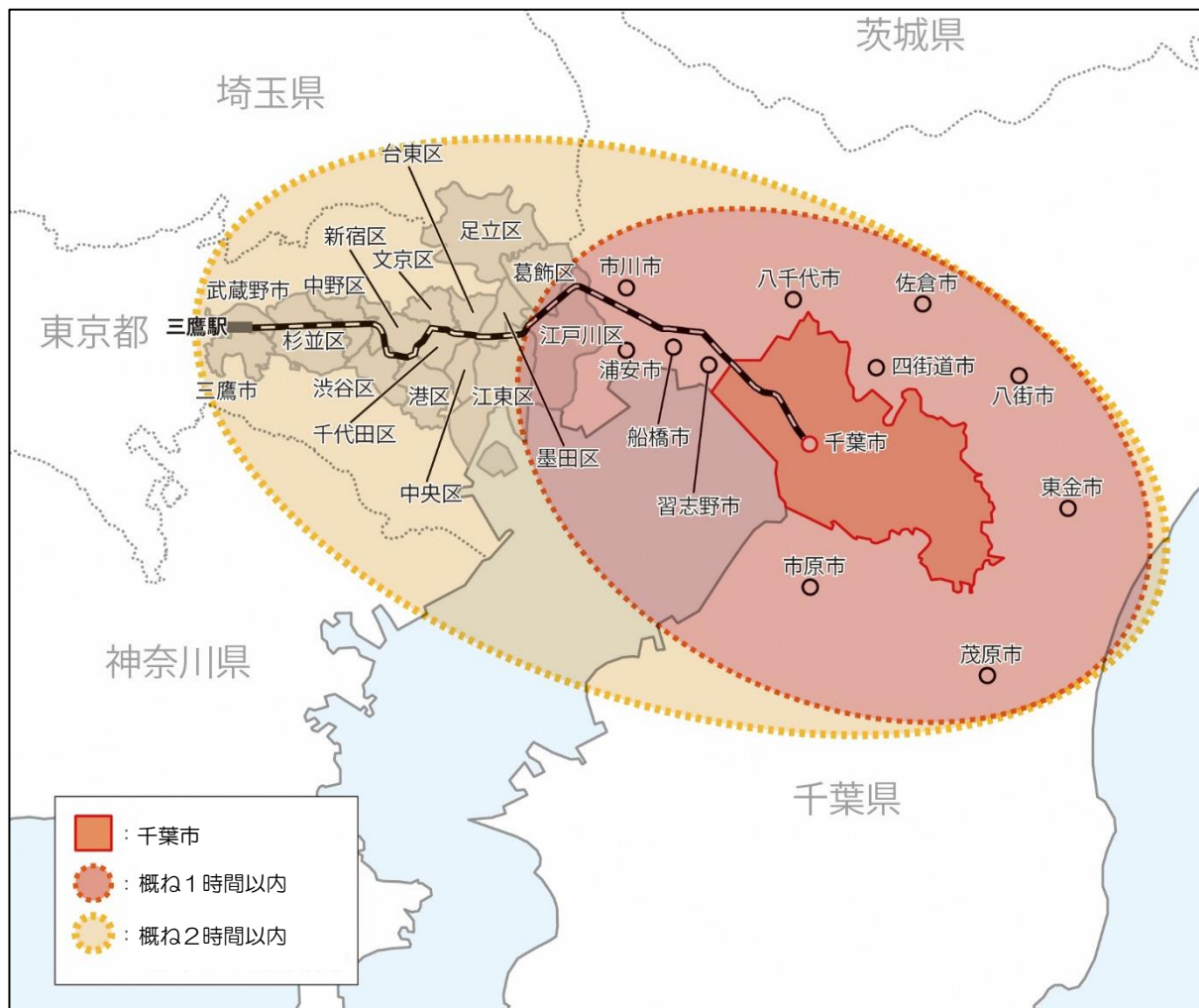


図 巻末 2-5 加曽利貝塚の来訪者の圏域区分図

表 巻末 2-1 加曽利貝塚の来訪者の各圏域人口（2017（平成 29）. 4. 1 現在）

（単位：人）

区分	千葉市内	千葉県内 約1時間以内	千葉県外 約2時間以内	合計
6歳～12歳（小学生）	59,053	146,094	283,762	488,909
13歳～19歳（中学生）	64,803	156,677	280,918	502,398
20歳代	99,500	270,914	730,421	1,100,835
30歳代	118,331	319,043	897,586	1,334,960
40歳代	164,641	401,853	955,651	1,522,145
50歳代	118,973	292,220	681,048	1,092,241
60歳代	124,270	312,738	558,846	995,854
70歳代	109,840	258,672	504,123	872,635
80歳代	51,837	121,068	296,129	469,034
90歳代	9,173	22,172	61,475	92,820
100歳代	335	771	2,368	2,368

(3) 加曽利貝塚博物館入館者の集客目標数

千葉市の人口に対する加曽利貝塚博物館入館者数の割合を、主要なターゲットの圏域人口に当てはめ、入館者数の集客目標数を推計しました。

●小学生（6歳以上13歳未満）の団体

$$\text{小学生（小人団体）} \quad \text{約} 490,000 \text{人} \times 10.03\% = \underline{\text{約} 50,000 \text{人}}$$

●小学生とその家族を対象としたファミリー

$$\text{小学生（小人個人）} \quad \text{約} 490,000 \text{人} \times 4.00\% = \text{約} 19,600 \text{人}$$

$$\text{両親（大人個人）} \quad \text{約} 19,600 \text{人} \times 2 \text{（両親）} = \text{約} 39,200 \text{人}$$

$$\text{計} \quad \underline{\text{約} 60,000 \text{人}}$$

●シニア世代（60歳以上90歳未満）

$$\text{シニア（大人個人）} \quad \text{約} 2,337,500 \text{人} \times 1.38\% = \text{約} 32,000 \text{人}$$

$$\text{シニア（大人団体）} \quad \text{約} 2,337,500 \text{人} \times 0.35\% = \text{約} 8,000 \text{人}$$

$$\text{計} \quad \underline{\text{約} 40,000 \text{人}}$$

以上のことから、加曽利貝塚博物館入館者数の目標数値は約150,000人と設定します。先行事例調査などを参考に、集客数のある史跡公園の博物館入館者数は10万人以上であることから、この人数は実現可能であると考えられます。

また、主要なターゲット以外はこの人数に入れておりませんが、研究機能やその体制を確立することにより、研究機関の研究者や学生などの入館者も見込まれることから、さらなる入館者数増も想定されます。

3 公園利用者数の目標設定にかかる分析

加曽利貝塚は史跡見学が中心であります、同時に公園的な利用もされています。ここでは、その公園利用者について分析を行い、公園利用者の集客目標数を設定しました。

(1) 公園利用者の分析

現在でも加曽利貝塚博物館には入館しないが、様々な目的で公園内を散策している住民が多くいます。この人数を2014（平成26）年度に実施された「公園利用実態調査報告書」（平成27年3月国土交通省都市・地域整備局公園緑地課／財団法人公園緑地管理財団）の調査結果から想定してみました。

この調査は、2014（平成26）年10月4日から10月26日の間に、104 地方公共団体（42都道府県・60市・2特別区）256公園、17ヶ所の国営公園、計273公園で実施されました。

利用者数調査は公園の出入口において、7時から19時までの間、1時間ごとの公園の入園者数及び退園者数をカウントして利用者数を把握しています。

その結果、調査を行った公園1ヶ所あたりの休日及び平日の平均利用者数は、次のとおりでした。

表 巻末 3-1 公園種別ごとの平均利用者数（人）

種類	種別	休 日		平 日	
		入園者数	退園者数	入園者数	退園者数
住区基幹公園	街区公園	222	206	226	216
	近隣公園	811	745	686	644
	地区公園	1,418	1,324	1,119	1,049
都市基幹公園	運動公園	4,798	4,756	3,064	2,931
	総合公園	4,090	3,845	2,424	2,353
広域公園		4,746	4,557	1,927	1,809
国営公園		12,016	10,889	5,132	5,046

※ 平成26年度都市公園利用実態調査報告書（平成27年3月国土交通省都市・地域整備局公園緑地課／財団法人公園緑地管理財団より作成

表 巻末 3-2 都市公園の種類（国土交通省 HP より抜粋）

種類	種別	標準面積	内 容
住区基幹公園	街区公園	0.25ha	もっぱら街区に居住する者の利用に供することを目的とする
	近隣公園	2ha	主として近隣に居住する者の利用に供することを目的とする
	地区公園	4ha	主として徒歩圏内に居住する者の利用に供することを目的とする
都市基幹公園	運動公園	15～75ha	都市住民全般の主として運動の用に供することを目的とする
	総合公園	10～50ha	都市住民全般の休息、観賞、散歩、遊戯、運動等総合的な利用に供することを目的とする
広域公園		50ha 以上	主として一の市町村の区域を超える広域のレクリエーション需要を充足することを目的とする
国営公園		300ha 以上	主として一の都府県の区域を超えるような広域的な利用に供することを目的とする

ただし、この調査における利用者数は10月初旬から下旬で公園利用者が多い季節を調査期間としており、梅雨（6月中旬～7月中旬頃）や冬季（12月～2月）は10月より利用者数が少ないことが想定されます。

そこで、公園等野外施設で月別の利用者数が把握できるデータに基づいて、年間利用者数と10月の利用者数が12ヶ月とした場合の差がどの程度であるかを比較してみました。選択に当たっては、季節による利用者数の変動が大きいと想定される施設（冬季の利用が制限される施設、特定時期のイベント等の集客が他と比べて著しく多い施設）は除きました。

表 巻末 3-3 野外施設における年間利用者数と10月利用者数×12ヶ月の比較

名 称	①年間利用者数	②10月利用者数×12	①÷②
千葉市 動物公園	540,686 (H27 年度)	81,938×12=983,256	0.55
千葉市 三陽メディアフラワーミュージアム	90,962 (H27 年度)	12,675×12=152,100	0.59
佐賀県 国営吉野ヶ里歴史公園	692,218 (H24 年度)	118,781×12=1,425,372	0.48
愛知県 愛・地球博記念公園	1,993,700 (H27 年度)	383,400×12=4,600,800	0.43

この比較により、実際の年間利用者数は10月の利用者数を12ヶ月とした場合の利用者数の平均は約50%でした。そこで、「公園利用実態調査報告書」の公園利用者数の50%を加曽利貝塚の公園利用者の集客目標数にすることとしました。

(2) 公園利用者の集客目標数

加曽利貝塚の史跡面積は斜面地等で公園的な利用が出来ない部分も含め、約15haとなっており、この面積は総合公園に相当します。現在の公園利用の実態は周辺住民による利用が多くみられ近隣公園または地区公園と同様の性格であると考えられますが、今後、ランドデザインに基づく整備が進み、総合公園としての機能が付加された場合を想定して数値を当てはめ、公園利用者の集客目標数を設定します。

$$\begin{array}{lcl}
 \bullet \text{総合公園の利用者数} & \text{休日：4,090人} \times 121 \text{日} = & 494,890 \text{人} \\
 & \text{平日：2,424人} \times 244 \text{日} = & 591,456 \text{人} \\
 & \text{合計} & 1,086,346 \text{人} \\
 & & \\
 & 1,086,346 \text{人} \times 50\% = & \underline{\underline{\text{約}550,000 \text{人}}}
 \end{array}$$

4 アンケート調査の結果

(1) 通年アンケート

①調査の概要

●調査期間 2016（平成28）年7月16日から2017（平成29）年5月26日
※縄文春まつり（5月3～5日）を除く。

●有効回答数 1,000件
※回答が得られたサンプル数を示すもので、複数人の団体・グループから得られた回答は、得られた回答数だけサンプル数としている。

●調査期間中の長期休暇期間の設定

調査期間中、夏休みや冬休み等の長期期間については、下記のとおり設定し、季節による動向変化を把握しました。

※グラフ中の割合はサンプル数の傾向を示すものである。

※団体利用者は、9人以上で来訪した回答サンプルを団体とした。

	2016(平成28)年						2017(平成29)年				
	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
年間トータル	● 7/16										● 5/26
2016夏休み	● 7/16	→ 8/31									
2017冬休み						● 12/17	→ 1/15				
2017春休み									● 3/18	→ 4/9	

図 巻末 4-1 長期休暇期間の設定

②来訪者の構成と来訪目的

年間を通して家族連れの来訪者が最も多く、その目的は家族と遊ぶためとの理由でした。季節ごとの動向をみると、家族連れや夫婦での来訪者は夏より、冬、春のほうが増加傾向にあります。また同時期に展示や歴史に興味を持った来訪者も増加傾向にあります。その他、夏休み期間中には、学校関係者による研修での利用も多くみられました。

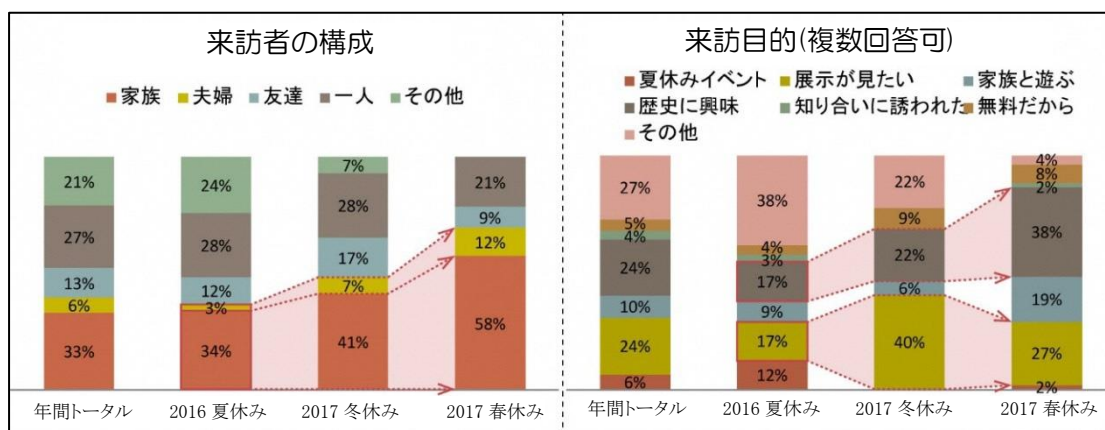


図 巻末 4-2 来訪者の構成と来訪目的

③利用交通機関と来訪のきっかけ

車で来訪者は全体の約半数を占め、季節ごとの違いはほとんど見られません。一方、鉄道・モノレール・バスの公共交通機関の利用者は、年間を通して全体の約3割となっていました。

来訪のきっかけについて、市の広報紙である市政だよりやホームページなど行政からの広報が通年で3割程度を占めています。また、その他の主な理由を見ると、学校の社会科見学や研修の他に、近所であることや以前から知っていたという理由も多く、加曽利貝塚近隣の方々の関心が高いことがわかります。

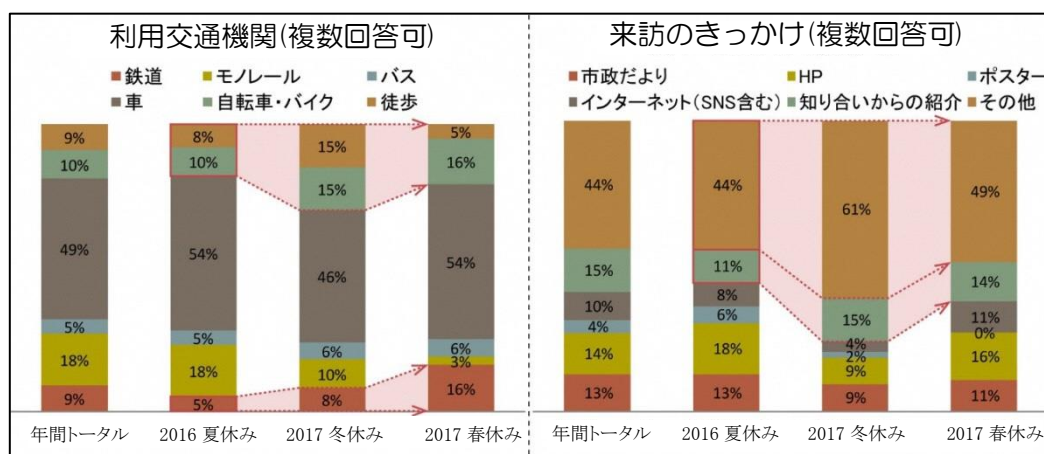


図 巻末 4-3 利用交通機関と来訪のきっかけ

④来訪者の満足度とリピート

来訪者のうち、約8割が満足(大変満足・満足)と回答しているものの、やや不満との回答が増加しています。その主な理由は、展示物の説明が分かりづらく、子どもには難しい内容であることがあげられています。また、加曽利貝塚内の案内が少ないことや、加曽利貝塚までの交通案内が分かりづらいといった意見がありました。

リピートに関する項目では、再度見学を希望(ぜひしたい・ついではあれば)する方が約8割を占めており、リピートに対する意識が高いことがわかります。また、何かが変わったら見学したいという方の割合は約1割であり、展示の更新等が新たなリピーター獲得に繋がると考えられます。

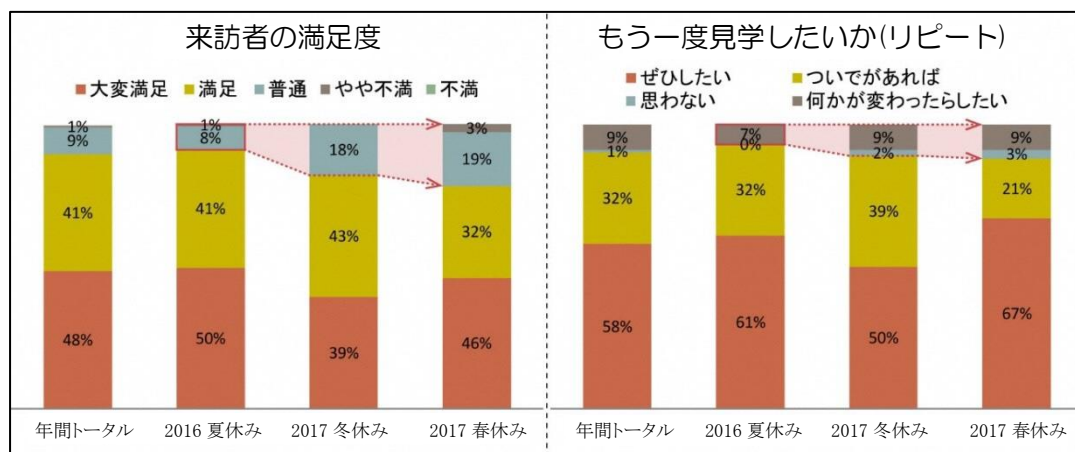


図 巻末 4-4 来訪者の満足度とリピート

⑤個人利用者・団体利用者の利用交通機関

個人利用者の約6割は車で来訪しており、鉄道・モノレール・バスの公共交通機関は2割程度となっています。団体利用者では車での来訪が少なく、公共交通機関の利用が多くを占めています。

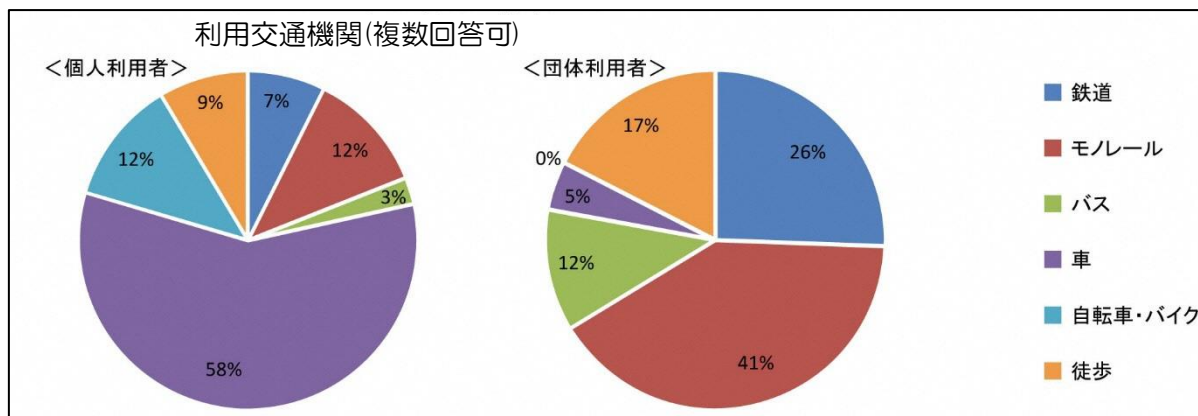


図 巻末 4-5 個人・団体別の利用交通機関

⑥個人利用者・団体利用者の満足度

個人利用者と団体利用者では、大きな違いはなく、どちらも約8割以上が満足（大変満足・満足）したと回答しておりますが、団体利用者の大変満足の割合がやや多くなっています。この要因として団体利用者の場合は、ボランティアガイドによる説明があらかじめ組み込まれていることなどが考えられます。

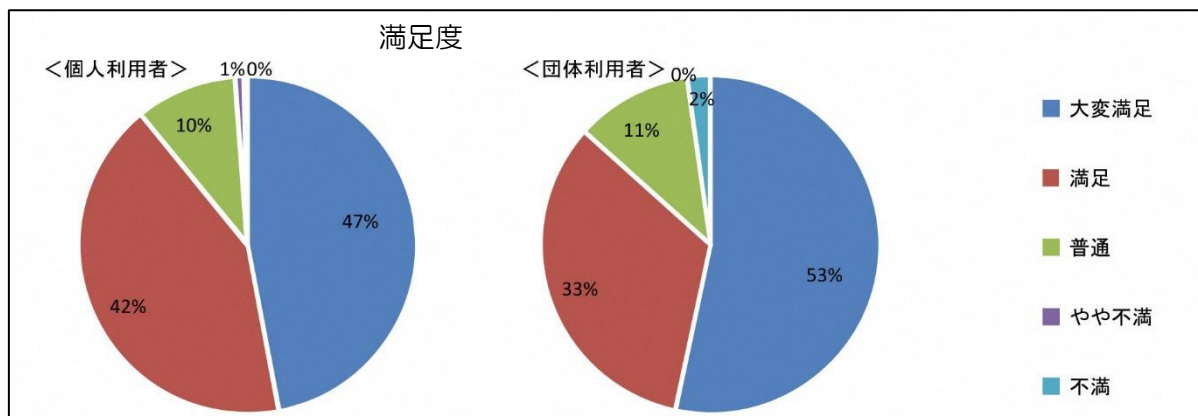


図 巻末 4-6 個人・団体別の満足度

⑦来訪歴と居住地

来訪歴については、どの季節でも約半数の方がはじめての来訪であることがわかります。居住地について、冬・春休みは市内からの来訪者が多いことに対して、夏休み期間中は、約半数の来訪者が市外からであることがわかります。

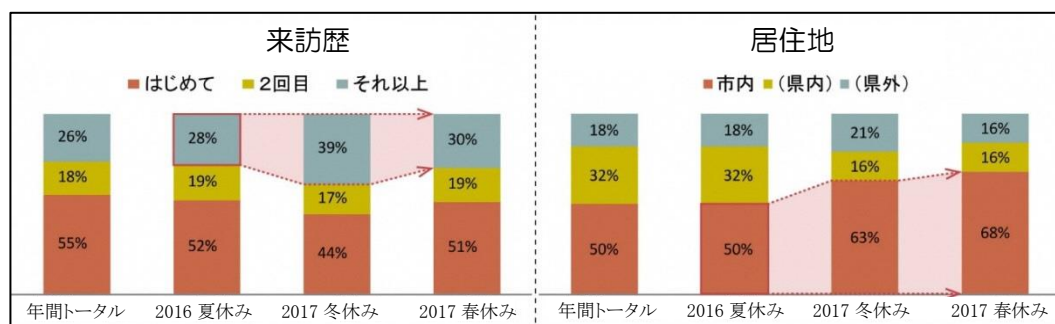


図 巻末 4-7 来訪歴と居住地

(2) イベント開催時のアンケート

①調査の概要

- 調査期間 縄文春まつり 2016（平成28）年5月3日～5日
- 有効回答数 383件

※各回答で得られた数をカウントした。また、回答が得られたサンプル数を示し、複数人の団体・グループからは、得られた回答数だけサンプル数としてカウントした。

②来訪者の構成と居住地

縄文春まつり開催時では、通年アンケートと同様に家族連れの割合が最も多く、特に30～40代と、5歳未満～小学生の組み合わせによる来訪者が多くなっています。来訪者の居住地については、市内からの来訪者が最も多く、中でも加曽利貝塚のある若葉区からの来訪者が多くを占めています。

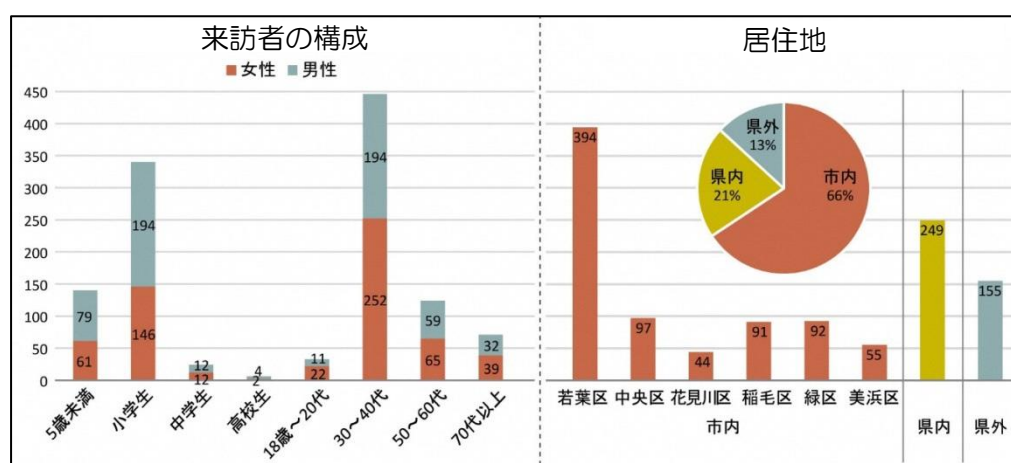


図 巻末 4-8 来訪者の構成と居住地（イベント開催時）

③利用交通機関と満足度

縄文春まつりでは、家族連れの来訪者が多かったためか、車を利用する方の割合が非常に多くなっています。鉄道・モノレール・バスの公共交通機関の利用は通年アンケートに比べると利用が少なくなっており、イベント時は車での利用が目立ちます。

博物館や野外観覧施設など、イベント時の拠点となる施設での催しの感想では、満足（満足・やや満足）が9割以上を占めました。満足と回答した方の割合が最も高かった項目は、「自然」であり、加曽利貝塚の豊かな自然環境が大きな魅力の一つであることがうかがえます。また、博物館や、旧大須賀家住宅において、やや不満であった方の主な意見として、トイレやベンチが少ないなど、利便性の不足があげられています。

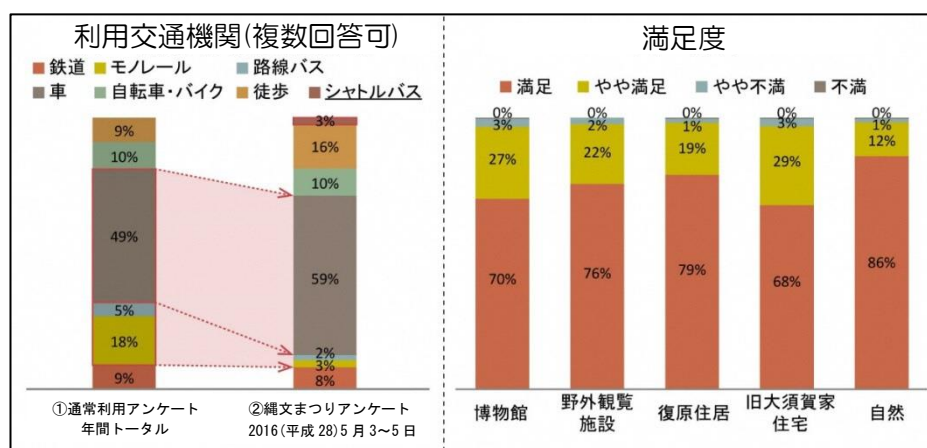


図 巻末 4-9 利用交通機関と満足度（イベント開催時）

⑤良かったプログラム・今後やってほしい体験メニュー

本アンケート項目は、自由記述であったため、意見の多かった項目についてまとめました。

縄文体験はいずれも好評で、火おこし・弓矢・土偶マグネットづくり・アクセサリ作り・アンギン編み体験の人気の高いことがわかりました。その他、イボキサゴスープの試食、スタンプラリー、加曽利貝塚PR大使かそりーぬのイベント（ステージ・撮影会）といった催し物も好評でした。

今後やってほしい体験メニューで意見の多かったものは土器づくりで、土偶マグネットづくりの人気を踏まえると、持ち帰りのできる工作にニーズがあることがうかがえます。

また、縄文時代や貝塚に関連する食材（貝やどんぐりなど）を使った料理や、土器や石器を使った調理等、生活体験系のイベントを求める意見も多くみられました。

その他、かそりーぬのグッズ販売や、かそりーぬのイベント（一緒に体験・史跡散策等）を求める意見もみられました。

5 ワークショップの実施結果

(1) 開催概要

- 参加者 NPO 法人加曽利貝塚博物館友の会、加曽利貝塚土器づくり同好会
加曽利貝塚ガイドの会、桜木・加曽利地区商工振興会、近隣自治会
若葉区役所、加曽利貝塚博物館、文化財課
- 開催回数 全2回（時間はいずれも13時30分～15時30分の2時間）
- 実施方法 3グループに分かれて、グループワークと成果発表を行い、意見交換を実施

表 巻末5-1 ワークショップの概要

開催	第1回（2017（平成29）年8月24日）	第2回（2018（平成30）年2月8日）
実施概要	①加曽利貝塚の魅力の再確認と共有 ②加曽利貝塚の整備や使い勝手における課題の共有	①全体方針・ランドデザイン・史跡整備計画への意見・要望 ②加曽利貝塚と地域との関わり方
成果	加曽利貝塚の魅力について、改めて認識するとともに、将来の整備にあたっての課題を探る。	素案に対する意見を伺うとともに、それぞれの立場における加曽利貝塚とのこれからの関わり方を考える。
開催の様子	 	 
グループワークの結果		

(2) 各グループの検討結果

表 巻末 5-2 各グループの主な意見

主な意見			
第1回	グループ	加曽利貝塚の魅力の再確認と共有	加曽利貝塚の整備や使い勝手に おける課題の共有
	A	・縄文時代を感じられる風景、自然 ・ボランティアガイドによる案内	・園路、植栽、安全性の整備 ・史跡のPR、アクセスの改善
	B	・加曽利貝塚の大きさ ・遺構の露出展示	・トイレや休憩スペースが不足 ・使い勝手の良い屋内活動場の整備
	C	・博物館の見学が無料 ・坂月川とその対岸にも動植物が豊富	・園内の放送設備の設置 ・史跡の分かりやすいコースの設定
第2回	グループ	全体方針・ランドデザイン・史跡 整備計画への意見・要望	加曽利貝塚と地域との関わり方
	A	・縄文人の生活風景を視覚的に体験 ・開発と自然保全のバランス	・公園管理として周辺住民の参加を検討 ・地元商店による土産物の開発
	B	・坂月川対岸と史跡とのアクセス改善 ・対岸地域でのアクティビティの整備	・地元小学校との積極的な交流 ・地元と連携した新規事業の開発
	C	・コンセプト・魅力の明確化 ・貝塚の見せ方など、遺構の展示方法	・地域との継続的な対話 ・関連団体との密な連携

■ワークショップにおける主な意見（第1回）

- ・縄文時代から続く景観が今も残っており、縄文を感じられる風景や自然環境が魅力。
- ・7%しか発掘されておらず、これからの発掘調査で新しい発見に期待できる。
- ・野外観覧施設での遺構露出展示は、周辺に同様の施設が無く、生の遺跡を見られるインパクトがある。
- ・施設が老朽化しており、特にトイレや園路をバリアフリー化する必要がある。
- ・北貝塚と南貝塚が一体となった全体像を感じられる展示と、それを保存活用するための植栽を管理する必要がある。
- ・史跡へのアクセスの不便や案内が少ないため、改善する必要がある。

■ワークショップにおける主な意見（第2回）

- ・自然環境を活かしたアスレチックと、自然観察や野鳥観察などは相反する事業であるため幅広い活動に対応できるようにしてもらいたい。
- ・利便性と縄文らしさとのバランスを保ってもらいたい。
- ・史跡と対岸地域からの動線として、ゴンドラやロープウェーなどがあるとよい。
- ・視覚で縄文の体験ができる復元整備があるといい。
- ・周辺で活動している団体はたくさんあるため、行政と協力していくためにも対話を大事にってもらいたい。
- ・加曽利貝塚をアピールする土産物など、地元で開発して販売していけると良い。

(3) 加曽利かわらばん

ワークショップ実施後に意見を取りまとめた会議録を「加曽利かわらばん」として作成し、参加者に配布しました。

加曽利がわらばん

2017.8号

第1回加曽利貝塚グラントデザイン及び史跡整備基本計画に関するワークショップを、平成29年8月24日(木)13時30分〜15時30分@加曽利貝塚博物館にて実施しました。参加者20名による活発な意見交換がなされました。

01 当日のプログラム

開会の挨拶を文化財課の桑本さんから頂きました。今回のWSの目的、グループにわかれ条件を事務局からPPTで説明しました。グループの意見を最後に各自の意見を簡単にまとめました。

02 グループに分かれた話し合いの内容

①魅力の再確認 ②整備や課題の共有

A 班

①魅力の再確認
 ・日本最大級の縄文遺跡
 ・施設も充実している
 ・発掘7%で今後が楽しみ
 ・5千年前の遺跡や雑居が残っている
 ②整備や課題の共有
 ・安全性・回遊性の向上
 ・園路の凹凸や園内外の案内不足を改善し、誰もが見学しやすい空間に
 ・縄文や3つくりなど、若年層のニーズに合った見学路を提案しては
 ・施設
 ・トイレ数が不足している
 ・弁当を上げられる休憩所や食事処がほしい
 ・地元との関わり
 ・増加する観光客によって静かな生活が保てない不安
 ・近隣住民との交流が早急に必要
 ・園路により通達しにくいのは困る
 ・地域の顔の場である豊饒な緑は残してほしい

B 班

①魅力の再確認
 ・縄文時代の風景が地形や自然と調和し、見学しやすい
 ・縄文7%で埋められた部分が多い
 ②整備や課題の共有
 ・安全性・回遊性の向上
 ・歩きにくい砂利道や、駅から園内までの案内不足などを改善すべき
 ・バリアフリー化した見学ルート整備
 ・施設
 ・現在、臨時駐車場なので、車を乗り入れられないなど不便を感じていて、園内施設や博物館が老朽化して、魅力に欠ける
 ・トイレの数が少ない
 ・休憩スペースや食事処、飲み物の販売が欲しい
 ・光景の思い出となるグッズを扱うミュージアムショップを作りたい
 ・北貝塚と南貝塚の全体が、木の繁茂によって見えない

C 班

①魅力の再確認
 ・日本最大級の縄文遺跡で、あまり人が入って来ず、自然は残っている
 ・時間と空間の体験が楽しめる
 ・当時の生活や文化を感じることができ
 ②整備や課題の共有
 ・安全性・回遊性の向上
 ・駅から遠いので、シャトルバスや駐車場などアクセスの改善が必要
 ・分かりやすい見学コースが必要
 ・エリアに名前を付け、目玉をピックアップして設定してはどうか
 ・施設
 ・地元の品や縄文グッズを扱うミュージアムショップがあると良い
 ・2つの貝塚を立体的に見られる工夫を施してはほしい
 ・見せ方を改善し、貝塚の大きさを抑え、地に接する展示方法にしたい
 ・地元との関わり
 ・森を保護しながら遺跡を活かすメリハリある方向へ

03 話し合いのまとめ

魅力の再確認、整備や課題を共有することで、共通の意見が見えてきました。

①加曽利の魅力

- ・日本最大級の貝塚
- ・発掘が7%で今後が楽しみ
- ・縄文の風景が地形や自然、活動から感じられる
- ・展示方法がユニークで分かりやすい
- ・ガイドの案内が分かりやすい

②加曽利の課題

- ・園路の歩きやすさやユニバーサルデザインへの対応
- ・トイレや案内サイン等のサービス施設の少なさ
- ・食品やお土産の販売がない
- ・日本最大級の貝塚を感じる事ができない↓整備では自然保護と貝塚遺構の見せ方にメリハリを付ける
- ・効果的な観光PRの方法
- ・交通アクセスの改善
- ・老朽化施設の改善

これらの意見を踏まえて、グラントデザイン及び史跡整備基本計画を立案します。

04 次回のご案内

加曽利貝塚グラントデザイン及び史跡整備基本計画の第2回ワークショップを開催します！
 日程の詳細は別途お知らせ予定です。

加曽利貝塚ランドデザイン及び史跡整備基本計画

図 巻末 5-1 第 1 回ワークショップのかわらばん

本日のワークショップの内容を踏まえつつ、今後も継続的に意見を頂きながら、進めます。

(18)

6 類似施設の先行事例調査の結果

(1) 千葉市内

千葉市における加曽利貝塚の文化財及び文化観光施設としての現状を把握するために、加曽利貝塚の類似関連施設として、①史跡、②博物館及び博物館類似施設（動物園、植物園等の博物館法上の生態園を含む）の状況について情報収集を行い、比較検討を行いました。

①史跡

千葉市内には、国指定史跡の貝塚が5件（加曽利貝塚を含む）、県指定史跡の貝塚が2件、市指定史跡の貝塚が1件存在します。これらの中で史跡整備を実施し、公開を行っているのは加曽利貝塚のみです。他は地域の公開されているものの、貝層表示や住居跡の復元等、史跡としての整備は行っていません。観光情報を提供するサイト（トリップアドバイザー等）の口コミ投稿等では、加曽利貝塚よりも外観を天守建築に模した千葉市立郷土博物館のある千葉城跡（猪鼻城跡）の方が、認知度が高くなっています。このため、一般的には歴史的な価値評価よりも分かりやすいモニュメントの有無が、認知度に与える影響が左右する状況がうかがえます。

表 巻末 6-1 史跡に指定されている市内の貝塚

区分	名称/所在地	所有者・管理者	指定年度	現況及び／公開状況
国史跡	加曽利貝塚/若葉区桜木町	千葉市ほか	1970 年	史跡公園／公開
	月ノ木貝塚/中央区仁戸名町	千葉市ほか	1977 年	緑地広場／公開
	荒屋敷貝塚/若葉区貝塚町	千葉市ほか	1978 年	緑地広場／公開
	犢橋貝塚/花見川区さつきが丘	千葉市	1981 年	緑地広場／公開
	花輪貝塚/若葉区加曽利町	法人	2006 年	非公開
県史跡	長谷部貝塚/緑区平山町	袖ヶ浦カンツリー倶楽部	1960 年	非公開
	東寺山貝塚/若葉区みつわ台	千葉市	1979 年	公園／公開
市史跡	滑橋貝塚/若葉区小倉町	個人所有	1981 年	山林／公開

②博物館等

2016（平成28）年度の千葉市の統計データから、2015（平成27）年度の千葉市の博物館及び博物館類似施設の入場者数を次の表にまとめました。市内で最も多くの人を集めているのは千葉市動物公園で、年間約55万人の入場者を集めています。園内で動物と触れ合える他、交通利便性が高いこと、広い駐車場を備えていること、水遊びやバーベキューができることもあり、家族で1日楽しめる場所となっていることが人気の理由であると考えられます。

次に人気の高いのが千葉市科学館です。科学を楽しく学ぶための体感・体験メニューが充実しており、特に小学生からの人気が高く、社会科見学等の他、家族で訪れる人が多くみられます。

これらの博物館及び博物館類似施設の中で、加曽利貝塚博物館は総数に比して団体入館者の比率が約38%と高くなっています。また、1団体の人数は約82人であり、千葉市動物公園団体入場者の1団体人数とほぼ等しく、国の学級編成基準は小・中学校で40人であることから、両施設の団体入場者は小・中学校の社会科見学等が主流であることが推測されます。

千葉市動物公園入場者の総数は、加曽利貝塚博物館の約21倍ですが、団体入場者数は1.5倍であることから、現在の加曽利貝塚博物館が学校単位の社会科見学場として一定の需要は満たしているものの、千葉市動物公園のように家族で訪れる層の需要を満たしていないと考えられます。

表 巻末 6-2 千葉市内の博物館及び博物館類似施設の入場者数

名 称	床延面積	利用者数					無料 入館者数
		総数	一般	団体			
				団体数	人員	割合	
加曽利貝塚博物館	約 1,700 m ² ※埋文センター含まず	26,230	11,466	121	9,981	38%	4,783
郷土博物館	2,416 m ²	45,051	36,390	163	3,958	9%	4,703
市立美術館	17,499 m ² ※中央区役所との複合施設	162,742	162,742	－	－	－	－
埋蔵文化財調査センター	1,833 m ²	3,478	－	－	－	－	入館無料
市民ギャラリー・いなげ	－	51,658	－	－	－	－	入館無料
稲毛記念館	1,855 m ² ※日本庭園 4,400 m ²	113,159	－	－	－	－	入館無料
稲毛民間航空記念館	443 m ²	66,522	－	－	－	－	入館無料
三陽メディアフラワー ミュージアム	3,939 m ²	90,962	－	－	－	－	49,376
科学館 常設展	約 13,000 m ² ※複合ビルの 7～10 階他	213,563	－	－	－	－	－
プラネタリウム		134,119	－	－	－	－	－
企画展		55,910	－	－	－	－	－
県立中央博物館(本館)	15,334 m ²	128,705	120,652	188	8,053	6%	107,681
県立美術館	10,663 m ²	122,573	120,969	－	1,604	1%	－
動物公園	339,722 m ²	555,359	268,359	177	14,673	3%	257,654

※入場者数は H28 千葉市統計書を参考に記載（H27. 4. 1-H28. 3. 31）

-：不明

※県立中央博物館の入場者数は年報 28(平成 27 年度)より記載（H27. 4. 1-H28. 3. 31）

※面積は延床面積（動物公園は公園面積、駐車場面積は約 47000 m²）小数点以下は切り捨て

(2) 千葉県内

①史跡公園

千葉県内の類似関連施設として、加曽利貝塚と同じく隣接地または敷地内に博物館やこれに相当する展示施設（ガイダンス施設も含む）が存在する史跡、または歴史的遺産のある公園及び緑地広場を備えた施設の状況について調査を行いました。

利用者数では、房総のむらの25万人が最も多いことがわかりました。房総のむらは、古代～近現代までの人々の生活の移り変わりを体験することができる野外博物館で江戸時代の町並みや農家が復元された「ふるさとの技体験エリア」での体験プログラムなどが人気となっています。また、風土記の丘エリアでは当日受付の火おこしや勾玉づくりなど気軽に楽しめるものから、事前予約制の縄文料理等の体験など、様々な生活体験プログラムが用意されています。

加曽利貝塚の敷地面積は、房総のむらのような複合施設を除く単体の史跡公園としては県内最大級です。公園利用者は把握できていませんが、博物館入館者数で比較すると、公園面積0.23haの船橋市飛ノ台史跡公園とほぼ同数となります。加曽利貝塚が恵まれた緑地環境を活用していくことで、利用者のさらなる増加に繋がる可能性があります。

表 巻末 6-3 千葉県内の展示施設を備えた史跡公園等の利用者数

名称/所在地	概 要		利用者数	備考
	史跡公園	博物館等		
加曽利貝塚縄文遺跡公園 博物館 /千葉県市	<史跡公園>約15ha ドーナツ形の縄文時代中期の北貝塚と、馬蹄形の後期の南貝塚が連結した日本最大級の貝塚。野外観覧施設（竪穴住居跡群、貝層断面）、復元集落が整備されている。	<博物館> 約1,700㎡ 加曽利貝塚からみつかった縄文土器・石器・動物・魚や人骨等を展示、東京湾周辺に住んでいた縄文時代の人々の生活を解説。	<博物館> 26,230人	H28 千葉市統計書 (H27.4.1-H28.3.31)
堀之内貝塚公園 市立市川考古博物館 /市川市	<史跡公園>約3.2ha 縄文時代晩期の馬蹄形貝塚で、一般市民に広く啓発する事を目的に公園として環境整備された。	<博物館> 1,513㎡ 市内の遺跡(先土器～古墳時代)の考古資料や下総国府・国分寺関連の史料・情報を収集、保管、展示。	<博物館> 44,000人	H23 年度見込み ※歴史博物館も含む
飛ノ台史跡公園 博物館 /船橋市	<史跡公園>約0.23ha 飛ノ台貝塚から出土した住居跡、貝塚、炉穴等をレプリカで復元展示。	<博物館>1,570㎡ 飛ノ台貝塚の土器や石器、貝塚や竪穴住居、縄文人の生活をパネルや模型、船橋市内の遺跡の遺物等の展示。	<博物館> 25,796人	H28 年版船橋市統計書 (H27.4.1-H28.3.31)
上総国分尼寺跡 展示館 /市原市	<史跡>約3.7ha 全国有数の規模を誇る国分尼寺で、中門と回廊が復元公開。	<展示館>325㎡ 映像や模型、出土品の展示。	<展示館> 12,605人	H28 市原市統計書 (H27.4.1-H28.3.31)
千葉県立房総のむら /印旛郡栄町	<風土記の丘エリア> 約32ha ※総面積約51ha 房総地方の文化理解を深めるために、武家・商家・農家の復元展示、伝統的な生活様式や技術の体験、四季折々のまつりや演武、民俗芸能の上演、企画展を実施。	<資料館>2,582㎡ 県内各地から出土した考古資料を収蔵・展示。房総の古墳と古代寺院の資料、縄文時代～歴史時代の集落からの出土品を中心に生活の変遷を展示。	250,000人	H27 千葉県観光入込調査報告 (H27.1.1-12.31)

※史跡公園は敷地面積、博物館等は延床面積

②博物館

千葉県内で年間10万人以上の利用者がいる歴史民俗系博物館について調査を行い、その集客要因を調べてみました。なお、県立中央博物館については千葉市内の博物館及び博物館相当施設においてリストに挙げているため、この一覧からは除外しています。

利用者が最も多かったのは国立歴史民俗博物館です。延床面積が35,000㎡以上あり、施設面の充実が集客の要因の一つであると考えられますが、博物館を学習の場として利用してもらうためのプログラムに力を入れており、教員の研修受入れなども行っています。

県立中央博物館大多喜城分館では、ローカル線として人気が高いいすみ鉄道の大多喜駅から近いことや、天守閣を模した博物館屋上からの眺望の良さ、桜や梅等の季節の花等が、観光資源として一定の評価を得ており、圏央道、いすみ鉄道とセットにした旅行会社の観光企画コースに組み込まれています。

県立関宿城博物館は江戸川・サイクリングロードの休憩地に隣接しており、観光スポットとしても利用されています。

市立博物館では浦安郷土博物館と館山市立博物館分館（渚の博物館）が約11万人の利用者を集めています。

浦安郷土博物館は1952（昭和27）年ごろの浦安を再現した野外展示「浦安のまち」や、べか舟製造の実演等、体感・体験を重視した展示が人気となっています。

館山市立博物館分館（渚の博物館）は「渚の駅たてやま」内にあることも集客の一因になっていると考えられます。

表 巻末 6-4 千葉県内で利用者数の多い博物館

名称/所在地	延床面積	概 要	利用者数	備考
国立歴史民俗博物館 /佐倉市	35,548 ㎡	日本の歴史と文化について総合的に研究・展示する歴史民俗博物館。原始・古代から現代に至るまでの歴史と日本人の民俗世界をテーマに、実物資料に加えて精密な複製品や学問的に裏付けられた復元模型などを積極的に取り入れ、日本の歴史と文化について、だれもが容易に理解を深められるよう展示。	190,000 人	H27 千葉県観光入込調査報告書 (H27.1.1-H27.3.31)
県立中央博物館 (大多喜城分館) /夷隅郡大多喜町	10,971 ㎡	城郭様式の建物で、房総を中心とした中世・近世の城郭、武器・武具・調度品・古文書及び城下町の生活資料等を展示。総南地方の地域博物館として教育機関と連携をとりながら、地域文化センターとしての役割も兼ね備え、当時の全般的な調査研究を行っている。圏央道いすみ鉄道とセットにした旅行会社企画に用いられる等、観光資源としての役割が高い。	104,577 人	年報28(H27年度) (H27.4.1-H28.3.31)
県立関宿城博物館 /野田市	2,172 ㎡	「河川とそれに関わる産業」をテーマに、利根川流域に生きた人々の生活の歴史を紹介。利根川流域における洪水・治水の歴史や、河川によって育まれた産業や文化、近世の関宿藩に関する展示物を展示。城郭の外観で江戸川・サイクリングロードの休憩地に隣接するため観光スポットとして知られている。	108,572 人	H27 年度千葉県立関宿城博物館の概要と活動実績 (H27.4.1-H28.3.31)

浦安郷土博物館 /浦安市	4,917 m ²	漁師町時代から築き上げられてきた浦安特有の文化を再発見できる。「母なる海」が育てた浦安の自然・歴史・文化を展示。海苔すきや貝むき、べか舟の乗船体験、舟大工の作業所で浦安市舟大工技術保存会による製造作業が見学できる。幻の魚、「アオギス」をはじめ東京湾の魚もいる。	110,000 人	H27 千葉県観光入込調査報告書 (H27. 1. 1-12. 31)
館山市立博物館 分館 (渚の博物館) /館山市	3,557 m ²	本館は戦国大名里見氏の居城跡である城山公園内にあり、史実の里見氏をメインに安房地方の歴史や民俗資料を収集・展示。天守閣形式の館山城（八犬伝博物館）では、『南総里見八犬伝』の各種資料の展示・紹介。 渚の博物館（渚の駅たてやま内館山市立博物館分館）は房総半島各地の海と生活に関わる資料を展示。館山港交流拠点「渚の駅 たてやま」内にある。	110,000 人	H27 千葉県観光入込調査報告書 (H27. 1. 1-12. 31)

(3) 関東圏

関東圏で加曽利貝塚と同じく博物館等の展示施設を備えた原始・古代の史跡公園の状況を調査しました。文化庁の支援事業で史跡整備を行い、ガイダンス施設等の展示施設を建設した例が多くみられました。

これらのうち、10万人を超える集客があったのは、大塚・歳勝土遺跡公園、さきたま古墳公園、常陸風土記の丘でした。

大塚・歳勝土遺跡公園は横浜市歴史博物館が隣接しており、この博物館は横浜市の総合歴史博物館で原始・古代から近現代までの横浜の歴史を出土遺物、模型、映像等でビジュアルに学べることから、市内の小・中学校の利用が多くなっているようです。横浜市営地下鉄線センター北駅より徒歩5分というアクセスの良さも集客数に現れていると考えられます。

さきたま古墳公園、常陸風土記の丘は共に面積が大きく、広い駐車場を備えています。古墳や古代住居といった歴史的要素とは別に、桜、菜の花、ハス等の季節の花やキャンプ場（常陸風土記の丘）等のレクリエーション的要素を備えていることも共通しています。

さきたま古墳群は丸墓山古墳が忍城水攻めの際に本陣として利用されたが、これを描いた小説『のぼうの城』が人気を博し映画化（2012（平成24）年公開）されたことから、訪れる観光客も増加しているようです。

その他の史跡公園は多くが5万人以下の集客に留まっていますが、この中でも下野国分寺・国分尼寺跡で開催される「天平の花まつり」が毎年20万人近くの集客を生んでいます。「天平の花まつり」は毎年3月下旬から5月初旬にかけて開催され、下野市の一大イベントとなっています。

他の史跡公園でも利用者数にカウントされてはいませんが、史跡を利用した定期的なイベントが行われているところが多く、史跡の認知度向上に貢献しているようです。

また、上毛はにわの里公園はヒマワリやコスモス、根古谷台遺跡はニッコウキスゲ、岩宿の里公園は石器が出土した地層に連なる丘陵（稲荷山）のカタクリ等の花の時期には、多くの人が訪れる場所になっています。

これらの人数を含めれば、史跡公園の利用者数は現在の博物館等の入館者ベースに比べて少なくとも2倍以上になることが予想され、言い換えれば、一般的な史跡公園では博物館等のみの集客数は、2万人～5万人程度に留まるものが多いと推定できます。

これには、博物館等の施設面の違いはあまり反映されていないと考えられます。延床面積約2000㎡のかみつけの里博物館の年間入館者数は約3万人ですが、延床面積420㎡の水子貝塚資料館の入館者数は4万2000人となっています。これはかみつけの里博物館が有料であるのに対し、水子貝塚資料館は無料であることや、水子貝塚公園の周囲は住宅地であり人口密度が高いこと等が反映されていると考えられます。

博物館等で相当数の集客を行うためには、横浜市歴史博物館のように約10000㎡規模の延床面積と企画展の充実が必要であると考えられます。

ただし、加曽利貝塚縄文遺跡公園の現在の面積は約15haで周辺エリアまで含めれば、関東圏の中でも有数の規模となることが想定でき、千葉市の人口が約97万人であることや、人口密度の高い東京都に隣接していることなどから、関東圏の他の史跡公園に比較して、条件的には恵まれた位置にあると言えます。

表 巻末 6-5 関東地方の博物館等の展示施設を備えた原始・古代の史跡公園

名称/所在地	概 要		利用者数	備考
	史跡公園	博物館等		
大塚・歳勝土遺跡公園 横浜市歴史博物館 /神奈川県横浜市	＜遺跡公園＞約 5.5ha 横浜市歴史博物館の野外施設として国指定史跡大塚・歳勝土遺跡の竪穴式住居や方形周溝墓を復元整備した公園。江戸時代の旧家を移築した都筑民家園や工房、広場等もある。センター北駅から徒歩 10 分弱。	＜博物館＞9,269 m ² 開港期までを中心とする横浜の歴史に関する資料を収集、保管、展示、及び調査研究をして、市民の利用に供するとともにその学習、調査研究等に資する。	＜博物館＞ 約 168,000 人	H28 横浜市統計書 (H28. 4. 1-H29. 3. 31)
三殿台遺跡（三殿台考古館） /横浜市	＜史跡＞約 1ha 縄文・弥生・古墳時代のムラの跡で、3 棟の復元住居と発掘された遺構の実物を展示する保護棟を整備・公開。	＜考古館＞273 m ² 三殿台遺跡から出土した遺物を中心に展示を行っている。	＜考古館＞ 約 16,600 人	H27 横浜市統計書 (H27. 4. 1-H28. 3. 31)
さきたま古墳公園 県立さきたま史跡の博物館 /埼玉県行田市	＜史跡公園＞約 37.5ha 埼玉古墳群と調和の取れた観賞・保護、及び散策を目的に整備された公園。	＜博物館＞2,498 m ² 埼玉古墳群・出土品、県内の遺跡、関係資料の収集・保管・調査研究、展示。	＜博物館＞ 約 113,700 人	H27 県観光統計 (H26. 4. 1-H27. 3. 31)
水子貝塚公園 水子貝塚資料館 /富士見市	＜史跡公園＞約 4ha 縄文時代前期を代表する貝塚で、遺跡の保存と活用のため公園として整備。5 棟の竪穴住居や外側に縄文の森を復元。展示館や資料館を併設。	＜資料館＞403 m ² 市内の各遺跡から出土した考古資料が展示、富士見市の原始・古代について解説。	＜資料館＞ 約 42,000 人	H24 資料館活動報告 (H23. 4. 1-H24. 3. 31)
上高津貝塚ふるさと歴史の広場 土浦市立考古資料館 /茨城県土浦市	＜史跡公園＞約 5ha 縄文時代後・晩期の遺跡で、竪穴住居・掘立柱建物・大型炉等を復元。貝塚の断面展示等、考古資料館が整備されている。	＜資料館＞1,800 m ² 上高津貝塚と縄文人の生活の様子を動画とジオラマによる視聴覚展示や体験展示を取り入れながら解説。	＜資料館＞ 約 28,000 人	H28 統計つちうら (H27. 4. 1-H28. 3. 31)
大串貝塚ふれあい公園 水戸市埋蔵文化財センター /水戸市	＜史跡公園＞ 貝塚の周辺を整備した公園で、巨人像や貝層断面観覧施設、縄文人の暮らしを紹介する埋蔵文化財センター等を併設。	＜センター＞ 市内の発掘事業等の管轄の他、大串貝塚や縄文人の暮らしを展示。	＜センター＞ 約 40,000 人	H27 水戸市統計年報 (H27. 1. 1-12. 31)

常陸風土記の丘 /石岡市	＜常陸風土記の丘＞ 石岡市の歴史的財産を活用し、歴史・伝承・体験学習・スポーツ・コミュニティーなどの余暇のための施設。長屋門（旧内田家）の案内所、遺跡の一部を復元した鹿の子史跡公園・古代家屋復元広場（有料）等がある。水際公園は季節ごとに、桜、ゆり、ハス等が楽しめる。	＜展示研修施設＞2,458㎡ 石岡市内で発掘された貴重な埋蔵文化財、遺物を遺跡別に展示しており、古代から近世にいたる石岡市のあゆみを概観できる。常設展示を中心に、企画展・特別展も行っている。	145,011 人	H27 統計いしおか (H26.4.1-H27.3.31)
おやま縄文まつり の広場 ※寺野東遺跡 寺野東遺跡資料館 /栃木県小山市	＜史跡公園＞約 2.9ha 国史跡寺野東遺跡の環状盛土遺構や水場遺構、石敷台状遺構が復元され、資料館が併設されている。	＜資料館＞ 寺野東遺跡の内容を展示・紹介する。	約 5,000 人	H28 市実施計画 H27 年度実績
うつのみや遺跡の 広場 ※根古谷台遺跡 /宇都宮市	＜史跡公園＞約 1.76ha 日本最大規模（1号長方形大型建物）を誇る復元建物と、埋葬の諸形態などを展示した資料館が整備されている。	＜資料館＞249㎡ 根古谷台遺跡から出土した縄文時代の遺物や埋葬の形態などを展示。	17,218 人	平成 25 年度実績
下野国分寺・国分 尼寺跡 しもつけ風土記の 丘資料館 /下野市	＜下野国分寺跡＞約 6.2ha ＜天平の丘公園＞約 11ha ＜国分尼寺跡＞約 2.5ha 国分尼寺跡は、主要伽藍の基壇と礎石が復元表示されている。尼寺跡は金堂、講堂、回廊の範囲を盛土と芝生で表示し、金堂礎石を復元表示している。史跡内には薄墨桜が植栽されている。	＜資料館＞1,036㎡ 隣接する国指定史跡下野国分寺跡・尼寺跡、古墳等の史跡、出土した資料の解説・学習施設。	約 220,000 人 ＜資料館＞ 約 19,300 人	H28 天平の花まつり来場者数 H28 年度 入館者数
下野薬師寺跡ふる さと歴史の広場 下野薬師寺歴史館 /下野市	＜史跡公園＞約 2.4ha 回廊の一部が復元され、史跡公園として活用。	＜歴史館＞384㎡ 瓦等の出土遺物、下野薬師寺に関する文献史料、復元模型等の展示、映像等による下野薬師寺の歴史の解説。	約 10,000 人	
上毛はにわの里公 園 ※保渡田古墳群 かみつけの里博物 館 /群馬県高崎市	＜史跡公園＞約 13ha 国指定の保渡田古墳群が整備・石棺が展示され、かみつけの里博物館、土屋文明記念文学館が併設されている。	＜博物館＞約 2,000㎡ 榛名山東南麓で出土した 5 世紀後半の人物・動物埴輪や当時を再現した模型を展示。	＜博物館＞ 約 30,000 人	H29 市教育行政方針 (H27.4.1-H28.3.31)

毛野国白石丘陵公園 藤岡歴史館（埋蔵文化財収蔵庫） /藤岡市	＜史跡公園＞約 4ha 国指定史跡七興山古墳と白石稲荷山古墳を結び、古墳群の保存とレクリエーション・憩い・学習の場を提供する。	＜歴史館＞ 市の埋蔵文化財収蔵庫で、地域の考古遺産を収蔵・展示。白石古墳群や本郷埴輪窯址・猿田埴輪窯址に関する常設展示。	＜歴史館＞ 10,341 人	H29 藤岡市統計書 (H28. 4. 1-H29. 3. 31)
岩宿の里公園 岩宿博物館 /みどり市	＜史跡公園＞約 18ha 旧石器時代の遺跡で、地層は岩宿ドームとして保存され、見学できる。	＜博物館＞ 出土石器の展示。	＜史跡公園＞ 23,500 人 ＜博物館＞ 21,500 人	みどり市統計 (H18. 4. 1-H19. 3. 31)
上野国分寺跡 上野国分寺館 /前橋市・高崎市	＜史跡公園＞約 6.2ha 金堂・塔の基壇や築垣が復元され、ガイダンス施設を併設。	＜国分寺館＞180 m ² 1/20 スケールの七重塔の模型や国分寺跡から出土した瓦等を展示。	＜国分寺館＞ 約 8,500 人	H25 教育委員会点検・ 評価報告書 H24 年度

※史跡公園は敷地面積、博物館等は延床面積

(4) 全国

全国の先行事例調査は、縄文時代から古墳時代の史跡公園 10 万人以上の利用者数のあるところを対象としました。なお、関東圏で挙げた史跡はこの一覧から除外しています。縄文時代に関しては、加曽利貝塚と同じ特別史跡（三内丸山遺跡、大湯環状列石、尖石石器時代遺跡）についても調査を行いました。

縄文時代の遺跡では、青森県の三内丸山遺跡の約 30 万人で最も利用者が多くなっています。三内丸山遺跡は発掘調査時に巨大な 6 本柱跡や大型住居跡等の発見で注目され、縄文集落のシンボリックな存在として教科書にも掲載されました。遺跡としての知名度の高さと、6 本柱跡等の大規模遺構の復元、博物館（縄文時遊館）の建設等の整備事業を推進したことによる施設面の充実、東北縦貫自動車道青森インターから車で 10 分であることや、新青森駅・青森駅からのバス便等の交通アクセスの良さから、青森県の観光スポットの定番として定着したことが、集客数に反映されていると考えられます。また、観光案内サイトなどでは施設が充実しているが、博物館を含めて無料であることを評価ポイントとして挙げている利用者が多くみられました。博物館（縄文時遊館）自体は無料ですが、施設内にはレストランや売店があり、ここで一定以上の観光消費が行われていると推定できます。近接地に青森県立美術館（年間入館者数約 27 万人）が立地していることも集客に寄与していると考えられます。この美術館も青森県の観光の定番スポットとして多くの観光案内に取り上げられており、三内丸山遺跡とセットで紹介されている例が多くみられます。なお、三内丸山遺跡は季節ごとにイベントを実施するなど、利用者を飽きさせない集客のための工夫も行っています。

弥生時代の大型集落として著名な佐賀県の吉野ヶ里遺跡（吉野ヶ里歴史公園）は、2016（平成 28）年度実績で約 73 万人を集客しています。この遺跡は魏志倭人伝に記載のある望楼と推定される遺構が発見されたことから発掘時に大きな注目を集め、弥生時代を代表する遺跡として有名になりました。その後、国営公園となり大規模な整備事業が行われたことにより、117ha という広大な面積の中に、弥生時代の大規模集落を徹底的に復元整備し、望楼、祭殿等のシンボリックな遺構復元により、魏志倭人伝の「クニ」の中心集落を思わせる景観を創り出しました。広大な敷地面積を活かして、集落復元により歴史的景観を体感するエリアと、遊具やバーベキュー、グランドゴルフ等が行える遊ぶための公園エリアにゾーニングされています。長崎自動車道東脊振インターから車で 5 分と交通利便性にも優れています。利用者数は一時 40 万人前後になりましたが、その後、イベントや体験学習に力を入れることにより利用者が回復しています。

宮崎県の西都原古墳群は歴史的価値の高い古墳群と共に、宮崎県を代表する花のスポットとして著名であり、春は約 2000 本の桜と 8ha に渡って咲く菜の花や、秋はコスモス、ヒマワリ、ツツジ、白梅等、季節ごとに花を楽しむことから、年間 100 万人を超す観光客を集めています。こちらも東九州自動車道西都インターから車で約 10 分の位置にあり、アクセスに優れています。

これら集客力の高い史跡公園に共通していることは、知名度（発信力）、交通利便性、施設面の充実、モニュメントを含めた歴史的雰囲気や体感できる景観、季節の花の観賞など歴史的要素以外に楽しめる要素を備えていることがうかがえます。これに対し歴史的価値は高くともこれらの要素を備えていない史跡では、集客面で苦戦している様子がうかがえます。

表 巻末 6-6 集客数が多い縄文時代から古墳時代の史跡公園

名称/所在地	概 要		利用者数	備考	
	史跡公園	博物館等			
縄文	<特別史跡> 三内丸山遺跡 /青森県青森市	史跡公園 約 20ha 縄文時代の集落跡で大型掘立柱建物・竪穴住居等の復元展示。タブレット端末による縄文時代の VR 体験と発掘調査時の解説等の IT ガイドも行う。縄文まつり等イベント開催。	縄文時遊館 7,360 m ² 出土した重要文化財等の展示、解説員によるミュージアムガイド、ビデオ上映、縄文時代中期の遺跡の復元模型を展示。図書閲覧コーナーを併設。体験学習や各種講座等も開催。	三内丸山遺跡 (縄文時遊館) 297,130 人	H27 青森県観光 入込客統計 (H27. 1. 1-12. 31)
	<特別史跡> 大湯環状列石 /秋田県鹿角市	大湯環状列石 約 24ha 縄文時代後期の遺跡で環状列石を露出展示。	大湯ストーンサークル館 1,550 m ² 大湯環状列石の遺物や発掘調査結果を展示。体験工房やホール、野外広場等を併設。	大湯環状列石 18,475 人 ストーンサークル館 17,516 人	H27 鹿角市統計書 (H27. 1. 1-12. 31) H28 秋田県観光統計 (H28. 1. 1-12. 31)
	<特別史跡> 尖石石器時代 遺跡 /長野県茅野市	史跡公園 約 6.7ha 2 体の国宝土偶を代表とした縄文遺跡で復元住居を展示。木の実拾いや家族で縄文風の小屋作り等の体験学習を実施。	尖石縄文考古館 3,194 m ² 尖石遺跡・与助尾根遺跡と発掘を行った宮坂英弼氏の研究業績を紹介。国宝土偶や遺物、模型を展示。周辺の博物館と美術館と連携したイベント実施。	考古館 約 55,500 人	H28 県観光統計 (H28. 1. 1-12. 31)
	上野原遺跡 /鹿児島県 霧島市	上野原縄文の森 約 36ha 縄文～中世の複合遺跡で、遺跡や地層の展示や復元集落、広場やアスレチック等を整備。縄文生活体験できる施設や、上野原縄文の森展示館、鹿児島県立埋蔵文化財センター等も併設。	上野原縄文の森展示館 3,070 m ² 上野原遺跡の重要文化財を中心に県内で発見された土器や石器等の遺物、上野原の縄文の世界をイメージした「縄文シアター」やジオラマ、映像資料等を展示。縄文の森全体を見渡せる展望所もある。	縄文の森 121,779 人 展示館 37,038 人	H28 霧島市統計書 (H27. 4. 1-H28. 3. 31)
弥生	<特別史跡> 吉野ヶ里遺跡 /佐賀県神埼郡 吉野ヶ里町 ・神崎市	吉野ヶ里歴史公園 約 73ha 弥生～中世の環濠集落跡で、祭殿、ムラ等の復元、甕棺や出土品展示。展示室や古代植物館、弥生くらし館を併設。グランドゴルフや野外炊事、アスレチック、弥生時代の植生を再現した森等を整備。	歴史公園センター 6,765 m ² 公園の案内所。ガイダンスルームやミニシアター、レストランを併設。弥生くらし館 1,013 m ² 体験工房、土器復元作業を見学できる公開作業室、ギャラリー、映像室等。	歴史公園 約 731,000 人	国営吉野ヶ里歴史 公園管理運営プロ グラム (H27. 4. 1-H28. 3. 31)
	<特別史跡> 登呂遺跡 /静岡県静岡市	<史跡公園>約 7ha 弥生時代の集落・水田遺跡で、復元集落区域では野外体験学習ができる。	登呂博物館 約 2,300 m ² 出土遺物を展示。弥生体験展示室では住居、高床倉庫、祭殿、水田等が復元展示されている。	登呂博物館 186,436 人	H28 静岡市統計書 (H27. 4. 1-H28. 3. 31)
古墳	西都原古墳群 /宮崎県西都市	<史跡公園>約 62ha 古墳を復元整備、発掘された状態の遺構展示。考古博物館(体験館)、ガイダンスセンターを併設。ウォーキングイベント・天体観測会等も実施。	西都原考古博物館 約 6,600 m ² 南九州の歴史、ハンズオン展示。体験・実験講座の実施。古代生活体験館 約 1000 m ² 古墳時代の道具作りや生活の一部が体験できる。	史跡公園 1,038,884 人	H27 宮崎県観光入 込客統計調査 (H27. 1. 1-12. 31)

7 専門家ヒアリングの結果

(1) 吉野ヶ里歴史公園のヒアリング

1. ヒアリングの目的

40万人の集客を70万人へと向上させた吉野ヶ里歴史公園に、集客のための取り組みや管理運営について、加曽利貝塚に活かせる手法や事例を管理者から聞き取り、現地で整備や利用の実態を視察した。

2. 日程

2016年12月14日 吉野ヶ里歴史公園管理センターヒアリング及び視察

14:00～ 国営海の中道会費公園事務所歴史公園課ヒアリング

14:30～ 吉野ヶ里歴史公園管理センターヒアリング

15:00～ 吉野ヶ里歴史公園史跡内視察

12月15日 吉野ヶ里歴史公園史跡視察

3. 吉野ヶ里歴史公園の概要

1) 規模、事業概要

1992（平成4）年に吉野ヶ里遺跡の国営公園化が決定、2001（平成13）年に第1期開園区域16.3ha（入口、北内郭、南内郭、西方倉庫群）供用開始。

2016（平成28）年12月現在は、国営公園区域約54haはほぼ整備完了。県営公園部分63ha中、44haの整備完了。

表 巻末7-1 吉野ヶ里歴史公園の規模

国営公園区域（約54ha）	特別史跡区域（約22ha）
	県史跡区域（約28ha）
	史跡指定地外（約4ha）
県営公園区域（約63ha うち43ha整備済み）	史跡指定地外
計 約117ha	

2) 施設概要

発掘調査結果と公園設計のために実施された検討調査に基づき、吉野ヶ里の弥生集落は北上位、南下位の観念で構成されていたと推定し、北墳丘墓を祖霊の墓、北内郭を祭殿、南内郭を上位身分（大人・たいじん）の居住区、南のムラを庶民の居住区、南内郭の西側倉庫群をクニの宝物や税を納め、市が開かれた場所と設定し、建物のみならず当時の生活の様子を人形等で展示している。北墳丘墓は発掘時の遺構の露出展示を行っている。

利便施設は特別史跡区域内には設置せず、県史跡区域に体験学習等を行う施設（弥生のくらし館、古代植物館）が設置されている。史跡指定地外となる県営公園区域はレクリエーション主体の公園緑地となっている。

園内は広大なため園内を走るバスが運行されている。

4. ヒアリング内容

1) 来園者数の推移と構成

<推移>

開園当初の2001（平成13）年度は68.1万人の入園者があったが、その後落ち込み2004（平成16）年度には41.5万人となった。その後南のムラや祭りの広場等供用区域が追加されたことや、イベント、体験学習等の取り組みにより入園者数が回復し、2015（平成27）年度には開園以来最高の73.1万人を記録した。2016（平成28）年度は熊本地震の影響で68.5万人に減少。熊本地震の影響は2017（平成29）年度も続いている。来園者数は入場券でカウントしている。

<来場者の構成>

九州からの来場者が6割を占めるが、年齢層に偏りはあまりない。他の史跡（公園）と比べて大学生等20代の来園者も多い。（10代の）主要な客層は修学旅行生。ハウステンボスとセットで回るパターンが多い。体験学習を行って、滞在時間は1〜2時間程度である。

2）集客への取り組み

<集客効果が高いと思われる取り組み>

年間を通じて様々なイベントを実施している。東口駐車場で毎月第一日曜日に開催される軽トラ市は、多いときには1日で1万人近くが訪れる。

佐賀県が子育て支援の一環として子供連れだと県営区域は無料とする制度をつくったことや、国営公園部分を含めた年間パスポート（入場料半額）が発行されたことも、集客に貢献していると考えられる。

<情報発信>

管理者は園内の情報を公園HPやブログ、Facebook等のSNSを通じて情報発信している。季刊で「ひみか通信」を発行し、特別企画やイベント等を告知している（佐賀・福岡県内の小学校全校生徒、天神駅等で配布）。園内ではWi-Fiサービスを実施しており、来場者が園内で撮った写真のSNS投稿を促している。1カ月7〜800件の接続がある。

<人気のあるイベント・体験>

春・秋に行う、南のムラでの宿泊体験は50人募集で100人ほどの応募が集まる。食事作りから全てスタッフを配置しなければならないため、スタッフの負担が大きい。トイレは弥生のくらし館の設備を利用、照明は通路のみ設置（暗闇を体験してもらう）。

修学旅行生がメインの客層のため、1時間程度で一度に大人数の生徒に体験してもらえるコンテンツが必要だが、難しい。

3）管理運営について

<指定管理者>

吉野ヶ里遺跡は国営公園区域と県立公園区域からなる。史跡指定地は全て国営公園区域に含まれる。両区域を公園財団が指定管理していたが、現在は区域ごとに指定管理者が異なり、国営公園部分と、県立公園区域は別の事業者が管理を行っている。また、国・県の関係者が毎月集まって報告等の打合せを行っている。

<イベント等の企画>

区域ごとに指定管理者がイベントを企画し、国と協議して行っている。

<ボランティア>

園内(国営区域)の案内、体験学習の指導の補助をお願いしている。修学旅行等で訪れた学童への指導・案内が主な業務のため、土日祝日の業務は少なく、スタッフの多くはシニア層である。開園時から長期勤めてもらっている方もいる。

養成のため、ガイドマニュアルを渡し、歴史講座へ参加してもらっている。公園センターには県文化課OBの歴史専門員もいるため、分からないことは都度確認してもらう。案内業務で話す内容を統一したいが、ボランティアなのでそこまでお願いできない。

<予算>

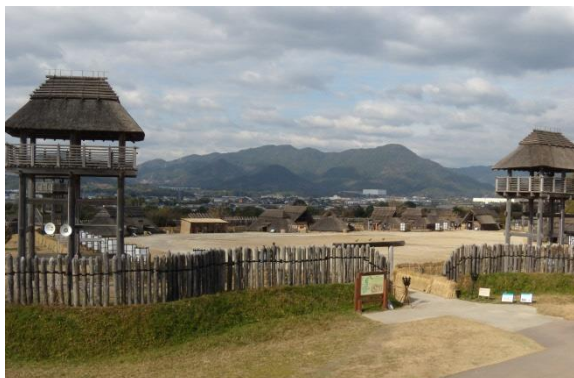
整備事業はほぼ終了しているため、専ら施設の維持管理費が予算の大半を占めている。

費用が掛かるのは復元建物のメンテナンスである。維持管理の計画を策定し、改修は毎年1棟ずつ順に行っている。

運営維持管理費は年間約5億円である（入園者数から、うち半分程度は入場料収入を充当できると推定）。

5. 公園内視察

<建物及び生活状況の復元>



南内郭



北内郭 祭殿



倉と市



南のムラ



祭殿 3 階の祭りの様子 祖霊への祈り



祭殿 2 階の祭りの様子 王と各地の首長の祭り



南内郭 王の家の様子

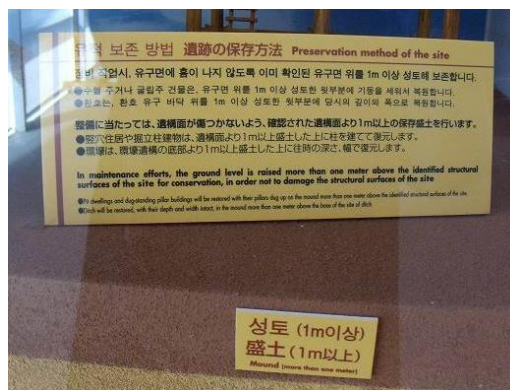


南内郭 大人の家の様子

<サイン・案内・ユニバーサルデザイン>



多言語・点字パンフレット



多言語による解説板



多言語の音声ガイド付き解説板



QRコードによる意見収集



現在位置を示すサイン



点字による案内・解説



幼児・車イス対応の手洗い

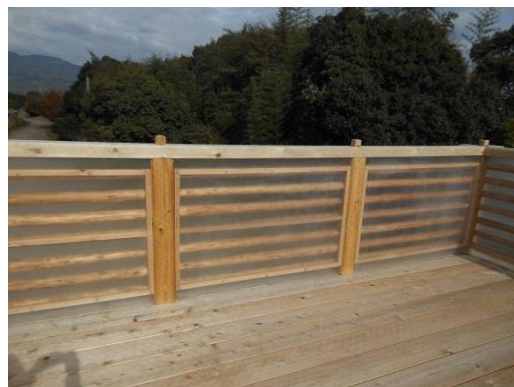


復元建物に設置された昇降機



復元建物に設置されたスロープ

< 景観への配慮 >



半透明アクリル板による転落防止



排水枡の修景



園内照明



復元建物ライトアップの修景



植栽による屋外消火栓の修景



復元建物内部の照明



弥生をイメージしたスタッフの服装

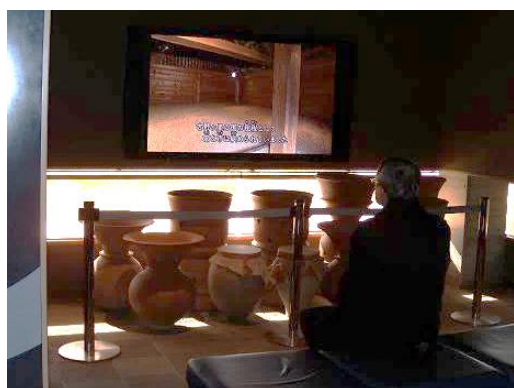
<ガイダンス施設・展示の工夫>



入口ゾーンの映像ガイダンス



入口ゾーンのミニシアター



展示施設の映像ガイダンス



保存修理作業の公開



遺構露出展示



遺構上部をガラス越しに見られる展示



竪穴住居を模した簡易テント



建築基準を満たした竪穴住居の防災設備



<園内施設>



県立公園区域の施設（水飲み場）



県立公園区域の施設（炊事コーナー）



県立公園区域の施設（休憩施設）



県立公園区域の施設（遊具）

<体験プログラム>

■その場で気楽に体験できるメニュー



弥生体験の衣装貸出



かぶり物で弥生人の髪型みずらを体験



見て触れる生活道具の展示



スタッフによる展示物の作成

■その場で申し込み 30 分～1 時間程度で体験できるメニュー



勾玉作り



火おこし体験

■申し込み制でじっくり取り組むメニュー



公園内で育てた蚕の繭から糸をとり、布を織る



公園内のドングリ等を使った木エクラフト

6. 加曽利貝塚グランドデザイン及び史跡整備事業への参考点

吉野ヶ里歴史公園は国営公園であり、国家事業として約 280 億円を投入して整備が行われ、維持管理運営経費も年間約 5 億円にのぼる。

史跡公園としては特殊な事例であり、加曽利貝塚とは条件・背景が異なる部分も多いが、整備ストーリー、運営管理の体制、体験学習プログラム、多言語対応、バリアフリー対応、園内交通等、多くの参考点があった。

1) 整備ストーリー

大規模な環壕に囲まれた吉野ヶ里遺跡は、北墳丘墓が北端に位置し、墳丘墓の墓道の南正面に大型の重層建物が発見された北内郭、さらにその南側に内環壕に囲まれた南内郭、一番南側に内環壕がない南のムラが位置する。これらの発掘結果から、集落の構造を「北上位、南下位」の観念で構成されたと推定し、このストーリーに沿って整備が行われている。復元整備は「弥生人の声が聞こえる」をテーマに行われ、建物復元だけではなく、人形等を用いた生活シーンの復元も行われている。

復元展示は、ストーリーに基づいた弥生テーマパークとも言えるものであり、来園者に当時の集落の様子を体感させるのに一定以上の効果をもたらしていると考えられる。一般的にはあまり史跡公園を訪れることが無い若い世代の来園者も多いことは、その表れであろう。復元考察で中心的な役割を担った元佐賀県文化財課の高島忠平氏からは、600年にわたる吉野ヶ里遺跡の変遷を踏まえた上で、復元対象時期となる弥生時代後期後葉の各ゾーンにおける生活シーンのシナリオを作成したとうかがった。

加曽利貝塚でも、縄文時代の加曽利の集落の様子をリアルに体感できる整備を行っていくためには、調査成果に基づいた生活シーンを検討していく必要があると考えられる。これは、博物館や史跡における展示解説のみならず、体験学習等のソフト事業のソース（源泉）にもなるものであると考えられる。

2) 集客への取り組み

①イベント

集客効果の高い取り組みとして、公園管理センターではイベント（催事）を重視しているとのことであった。事前に配布いただいた運営維持管理業務マニュアルには 2011（平成 23）年度から 2013（平成 25）年度に 109 の催事（体験学習を含む）が実施され、約 77 万人の参加があったことが記載されている。今回の視察期間中も「光の響」というライトアップイベントが開催されていた。これはシーズンオフとなる冬期の集客を狙ったもので、北内郭で行われたと推定される冬至の祭りにちなんで、冬至の時期に光を使った幻想的な景観を演出するイベントである。

またイベントの中には、他から持ち込まれ場所を提供する「持ち込みイベント」も存在する。その一つである「吉野ヶ里夢ロマン市 軽トラ市」は、地元の特産品や飲食物等を軽トラ等を用いて販売するもので、毎月第一日曜日に東口の駐車場で開催される。人気イベントに成長し、多い時には 1 万人近くの来客があるという。

この例から、市民に史跡を様々な活用してもらえよう、持ち込みイベント歓迎の告知を行うべきと感じた。また、イベントを活発に行うためには、運営体制と共にイベントが行えるオープンスペース（広場、大型駐車場等）が必要であることを実感した。

②体験学習

体験学習には「弥生時代の衣装を身に着けてみる」といったその場で気軽に体験出来るもの、その場で申し込み 30 分～1 時間程度で出来るもの（蠟石での勾玉づくり、火おこし、鋳型を用いた銅鏡等の製作等）、申し込み制でじっくり取り組むもの（機織機を使ったコースターづくり等）がある。南内郭では公園スタッフによる生活用具の製作風景の公開も行われていた。

1 時間程度の体験学習は弥生のくらし館、申し込み制の体験学習は古代植物館と場所を変えて実施している。修学旅行等の学校の団体利用では、30 分～1 時間程度で出来る体験学習が中心となるため、弥生のくらし館の体験学習室は 300 人程度が収容できるスペースが確保されていた。学校団体利用の際の体験学習メニューは、大勢の子供達が一斉に行え、最初の手順を説明した後は、スタッフが付いて指導をする必要が無いものであることが条件のようである。

加曽利貝塚でも気楽に行えるものからじっくり行えるものまで幾つかの種類の体験学習メニューを揃える

必要があると考えられる。また、学校の団体利用の際の体験学習メニューについては、団体利用が可能なスペースの広さと、大勢が一斉に行えるメニューの検討が必要であると考えられる。

③情報発信

吉野ヶ里歴史公園では、ホームページ等運営側からの情報発信とは別に、SNS 等を通じて来園者からの情報発信を促せるよう Wi-Fi サービスを実施している。

加曽利貝塚でも各種情報発信は実施しているが、来場者から園内の写真や情報を、SNS 等を通じて発信してもらえるような体制・設備の整備が必要であると考えられる。

3) 管理運営について

①運営維持管理体制

吉野ヶ里遺跡公園では運営維持管理は指定管理者制度を採用している。国営公園部分は公園財団、地元造園会社等の共同事業体が受託しており、それぞれが全体統括、維持管理、広報宣伝など役割を分担して管理運営を行っているようである。

加曽利貝塚の運営管理のあり方については今後検討が必要であるが、集客のためには経験と発案力のある組織との協働が必要であると考えられる。

②スタッフ

公園管理事務所の正規スタッフの他に、アルバイトやボランティアのスタッフが重要な役割を果たしていた。約30名いるというボランティアスタッフは、主に修学旅行等の学校団体利用の際の対応を担っているとのことである。古代植物館で体験学習の指導にあたっているスタッフは開園以来働き続けているとのことであった。これらのスタッフにより園内の古代の森の植物を利用した木工クラフト等、新しい体験学習メニューの開発や園内に置かれて目を楽しませるシカやイノシシのオブジェ製作なども行われていた。イベントの際の設営等もこれらのスタッフが参加している。また、外国人観光客に対応するためのスタッフや、急病人等に対応するための看護師資格を持ったスタッフも存在する。

吉野ヶ里歴史公園と加曽利貝塚では運営管理費が異なるため、同規模のスタッフを抱えることは難しいと考えられるが、学校の団体利用が多い加曽利貝塚でも一度に大人数の来場者の対応が必要となるため、ボランティアによる案内・指導補助の役割は重要であると考えられる。また、体験学習の実施にあたっては指導員が必要となることから、現在の協力三団体を基盤に新たなボランティア育成のための取り組みを行っていく必要があると考えられる。

4) 園内の施設・設備について

その他、園内の施設・設備について参考点として気が付いた点は以下の通り。

- ・バリアフリー・多言語対応等のユニバーサルデザインを徹底されていた。
- ・サイン等のデザイン統一、弥生のイメージを損ねるような構造物・設備の修景を図られていた。
- ・竪穴住居での宿泊体験は人気のある体験メニューであり、建築基準と復元検討のすり合わせをしながら宿泊可能な施設として復元することも可能であった。
- ・公園として多様なレクリエーションの利用ができるよう施設整備がされていた。
- ・広大な敷地であるが、園内バスなど、対応が図られていた。

(2) 北海道大学観光学高等研究センター西山徳明教授ヒアリング報告

1. ヒアリングの目的

歴史文化遺産を活かした観光や地域づくりの視点を本計画策定の参考とすべく、「地域で観光を創り出す」ための研究を行っている北海道大学観光学高等研究センターのセンター長西山徳明教授にヒアリングを行った。

2. 日 程

2018（平成30）年3月6日 16時～17時30分 於北海道大学観光学高等研究センター

3. ヒアリング内容

1) 歴史遺産を活かした地域づくりについて

史跡等の歴史遺産を観光や地域づくりにどう活かすかを考える時には、それ単体で捉えるのではなく、千葉市全体の遺産の中で捉えるべきである。加曽利貝塚を起爆剤として地域のブランド化に繋げていこうという方法もあると思うが、まずはその遺産の価値を市民や関係者が共有することが大切である。

①福岡県太宰府市の市民遺産

福岡県の太宰府市では5年間かけて2005（平成17）年に「文化財保存活用計画」という市内文化財の保存活用のためのマスタープランを策定した。これは歴史文化基本構想のひな形にもなった。この計画の策定にあたって市民ベースの歴史文化遺産調査を行った。市の学芸員の方々が指導しながら、市民が地域にどのような歴史文化遺産があるか調査する。大学の研究者が関わることもあった。市内の有形/無形、動産/不動産の歴史文化遺産が1万件くらい集まり、それをデータベース化した。

これを活用する方法として、私は市民遺産という考え方を提唱した。地域の歴史、文化、自然等、地域が自慢したいストーリーとそれを構成する資産を地域の住民の方々が市民遺産として提案する。それを市民遺産会議で説明して討議し、認められれば市民遺産として登録される。この活動によって多くの市民が自分たちの地域の歴史文化遺産の価値を知り、自らの手で発掘していった。

太宰府市は福岡市のベッドタウンで、太宰府天満宮や特別史跡の大宰府跡その他の史跡が多くあるが、それが必ずしも市民に認識されていなかった。市民遺産活動により歴史の街という認識が市民に広がり、眠っている資産が顕在化された。これを観光や経済的なことにつなげていくこともできる。

②山口県萩市の「萩まちじゅう博物館」

市民遺産をエコツーリズムとエコミュージアムとして展開したのが「萩まちじゅう博物館」である。コアとなる本格的な博物館の他に萩の町の武家屋敷、町人地、港町等のエリアそのものをサテライトと考え、ここにさらにサテライトのコア・ミュージアムをつくる。サテライトのコア・ミュージアムはその地域の（空き家となった）古民家等を活用する。そして、地域の歴史文化遺産をめぐるルート（ディスカバリートレイル）を設定して、マップをつくりサテライトのコア・ミュージアムで情報提供する。大元のコア・ミュージアムではこうした萩まちじゅう博物館に関する情報提供や展示が行われる。

大切なのは、サテライトとなる地域の歴史文化遺産の洗い出しや、それを結ぶディスカバリートレイルの設定・発見を、地域の方々が参加して行うことである。太宰府の市民遺産で行ったような調査（ワークショップ）を積み重ねて、これらが出来上がっていった。そしてサテライトのコア・ミュージアムとなった伝統的な木造建築の活用方法についても、萩市および委員会が地元の方々と活用方法について2年間にわたって議論した。その結果、オープンと同時に住民の方々の交流の場となり、観光客をもてなす場となった。そして、この取り組みによって、浜崎という港町が、3万～4万のお客さんが訪れるようになった。伝建地区になって電柱や老朽家屋の多かった街並みも10年かけて美しくなった。

これに触発された萩の様々な地域が、サテライトに名乗りをあげ、先ほどのような調査を行い、地元のまちづくりの組織をつくり、行政に頼んで拠点施設の整備を順次展開している。とても成功したまちづくり例となった。

2) 事業の進め方、組織体制のあり方について

①計画・設計段階から市民参加で事業を進めることが重要

歴史文化遺産を活かした地域づくりを進めていく際に重要なことは、地域の人々を巻き込んでいくこと。これはモノやハコが出来てからでは遅く、計画や設計の段階から行っていく必要がある。太宰府市の例も萩市の例も計画の段階で市民が参加して事業を進めていった。

②官民協働で事業を推進しマーケットにつなげることができる体制づくり

また、地域の遺産を活かした観光ということではこれからはDMO (Destination Management Organization) の役割が重要であると言われている。観光庁の「明日の日本を支える観光ビジョン」でもDMO (※注1) の設立が挙げられている。歴史文化遺産を活かした地域づくりは、その地域の人々が地域の遺産の価値を知って地域に愛着を感じるようになる、地域交流が活性化するという側面と共に、その資産の価値を観光や物産開発などマーケットにつなげる側面がある。DMOはこの両者を総括するようなプランを企画・実行できるものであることが望ましい。

資産の価値をマーケットにつなげる経済開発的な側面を含めた地域づくりを行うためには、民間事業者のノウハウを取り入れることが必要となる。PPP (Public Private Partnership) の視点が重要になる。PPPとは従来はPublicの役割と思われていた公益目的の事業を、Public sector (行政等) の権限とPrivate sector (民間) の事業遂行ノウハウやファイナンス力等を、相乗効果的に活かすことでより経済的で高品質なものとするためのPartnership (関係) である。これからの観光開発においては、公益目的を掲げる非営利の地域運営組織 (例としてDMO) を設立し、PPP理念に基づいた観光開発を行うことで、従来の公益事業 (遺産保護、修復、コミュニティの活性化等) を官民協働で行っていくのがあるべき姿となる。

③加曽利貝塚の遺産活用は市全体の枠組みの中で検討することが重要

観光につなげるような集客を考えるのであれば、DMOのような組織をPPPの理念に基づいて運営していくことが重要であろう。千葉市が市としてDMOの設立を検討して進めていくなど、市全体の枠組みの中で検討する必要があると考えられる。

※注1 DMO：観光経営の視点に立って、観光地域づくりを行う組織・機能

8 千葉市まちづくり未来研究所による政策提言報告書の抜粋

千葉市まちづくり未来研究所とは、研究テーマについて知識・関心のある公募による研究員が、自主運営によるグループワーク等を通じ、政策提言をとりまとめ、さらに、その提言の実現に向け、様々な活動に主体的に参画していく仕組みであり、研究員による活動そのものが「千葉市まちづくり未来研究所」となります。2016（平成28）年10月からは、「都市アイデンティティによるまちのデザイン」をテーマにした研究活動が始まり、2018（平成30）年3月に政策提言報告書がまとめられました。

ここでは、その政策提言報告書のうち、加曽利貝塚についての部分を抜粋して掲載します。

（1）縄文のまち活性化プロジェクト政策提言 抜粋

1 縄文のまち活性化プロジェクト 政策提言  【研究員】遠藤智世、太田正孝、押尾衛、加納弓、竹内英二、宮下登久子 目次 1. 背景、現状・問題、方向性、加曽利貝塚概要 1.1. 背景 1.2. 現状・問題 1.3. 方向性 1.4. 加曽利貝塚概要 2. 政策提言 2.1. 情報発信 2.2. 博物館の建設 2.3. 縄文の森公園パークレンジャー制度の創設 2.4. 貝塚公園の整備 2.5. 遊び場としての縄文の森や公園の整備 2.6. 加曽利貝塚周辺における「民泊・飲食施設」等の整備 2.7. 加曽利貝塚までのアクセス改善 2.8. 坂月川ネイチャーバス、散策路の整備、丸木舟レース 3. 参考資料 1-1	1. 背景 日本全国には縄文時代の貝塚が2400か所ほどある。千葉市はその内約130か所を数え、最大の貝塚都市である。なかでも加曽利貝塚は全国的に代表的な貝塚遺跡である。 かつて、日本が高度成長の時代、加曽利貝塚にも開発の波が押し寄せた。この時加曽利貝塚を守れと立ち上がったのが千葉高教諭武田宗久氏と多くの千葉市民だった。この市民運動の高まりのおかげで、千葉市は貝塚史跡を全面的に買収した。さらに市は市民の熱意にこたえ、当時としては珍しい遺跡博物館と野外観覧施設を建設した。 時が経ち、市民の熱意も冷め、施設は老朽化し、加曽利貝塚は次第に世間から注目されなくなってきた。しかしこの状況を打破するのが今回の特別史跡指定である。 昨年10月の特別史跡の指定は、改めて加曽利貝塚のすばらしさを宣言するものであった。指定以来多くの人々が再び来館するようになった。と同時に加曽利貝塚の環境の不備が指摘されるようになった。それは貧弱な展示室、トイレ環境、アクセスの分離などである。 この特別史跡指定を好機として、私たちは、加曽利貝塚に来る多くの人々が感銘を受けもう一度来てみたいと思える環境を整えること、また加曽利貝塚が縄文文化研究の先進的な発信拠点であること、このような姿を目標とし、世界に誇れる加曽利貝塚を作り上げていきたい。かつてここを守り保存した熱いたくさんの方々の思いを継承するために。 2. 現状・問題 (1) 加曽利貝塚までのアクセス改善 (2) ボランティアの募集・育成 (3) 市民の協力の充実 (4) 縦割り行政の統合調整機関の創設 (5) 総合的な情報発信 (6) 魅力を感じる縄文の森の整備（多世代にわたるリピーター作り） 3. 方向性 (1) 市民が活躍する縄文の森 (2) 日本が誇る縄文文化の最先端拠点づくり (3) 国内外から人の集まる特別史跡 1-2
---	---

4. 加曾利貝塚概要



1-3

2.2.1 情報発信

1. 目的
 - (1) 毎年の発掘調査をおこない、その成果の公表・発信を目的とした「縄文サミット」を開催し、学術関係者のみならず市民にも情報発信をおこなう。
 - (2) 現在開催されている「縄文春祭り」と「縄文秋祭り」を毎年開催し、市民向けの情報発信や市民との協働の機会とする。
 - (3) 「縄文の森」の周知にかなするイベントを行う。
2. 理由
 - (1) 現在発掘調査がおこなわれているが、その成果をより多くの人に知ってもらう必要がある。
 - (2) 研究者や市民に向けた学術情報発信の場や交流の機会を提供する必要がある。
 - (3) 「縄文春祭り」と「縄文秋祭り」は、特別史跡化の効果もあり大盛況であった。今後、さらなる情報発信と、市民を巻き込む機会として活用するため、定期的な開催と、市民参加のしくみが求められる。
3. 内容
 - (1) 学術的側面
 - サミットを定期的に開催し、千葉市が主体となる。とくに、学術的な価値を広める場として、縄文時代の遺跡をもつ自治体と連携しこれらを開催すれば、国内外への発信の機会となる。
 - 研究者や関係者によるシンポジウムを開催する。
 - (2) 市民参加
 - 現在おこなわれている「縄文春祭り」「縄文秋祭り」を毎年開催する。
 - パークレンジャーが主体となって開催し、博物館と市が協力する。
4. ファーストアクション
 - (1) 発掘成果の公表
 - (2) 縄文時代の遺跡をもつ自治体との関係構築
 - (3) 縄文祭りの関係者で協議し、ボランティアが活動できる部門を作る
 - (4) 縄文時代を感じられる飲食物や物品の開発
5. ゴール（目指すべき姿）
 - 加曾利貝塚が国内外に知られており、「縄文貝塚遺跡といえば加曾利貝塚」と言われるようになっていく。
 - 縄文祭りが、パークレンジャーと市民が主体となって開催されている。

1-4

- 縄文時代を感じられる飲食物や物品が市内外に知られ、有名になっている。
- 千葉市は「縄文サミット」の初開催都市となり、加曾利貝塚周辺には、民泊を利用して多くの研究者が集まっている。

1-5

2.2.2 博物館の建設

1. 目的

多目的な機能と研究機関を備えた博物館を建設
2. 理由
 - (1) 特別史跡の指定にあたり、文化庁から現在の博物館を史跡外に出すよう指導されている。
 - (2) 現在の博物館は老朽化していて耐震性も希薄である。
 - (3) あまりにも手狭であり、加曾利の魅力を十分に発信できていない。展示品も少なく縄文文化を学習・経験・発信するには不十分である。
 - (4) リピーター客が少ない。
 - (5) 研究機関が併設されていない。
3. 内容
 - (1) 移転先を現臨時駐車場にする。
 - (2) 縄文時代がよくわかる展示が行える十分な広さを持つ展示室
 - (3) 見学者への研修が行える最新設備を持つ研修室
 - (4) ボランティアの控室、地域住民のためのコミュニティー室
 - (5) 縄文時代関係の図書室
 - (6) 縄文文化を世界に発信できる研究機関
 - (7) 見学者のためのレストラン
4. ファーストステップ
 - (1) 移転先の候補の一つの現臨時駐車場は、私有地であり買収交渉が必要である。
 - (2) 地域は第一種低層住宅地域であるため、用途地域の変更が必要でもある。
 - (3) 博物館建設の基本構想作成委員会に市民の参加を求めること。
5. ゴール（目指すべき姿）
 - 見学者が縄文の知識と経験に触れ、縄文文化を身近に感じられる博物館。
 - 常に新しい縄文文化に触れられ、また来たいと思う博物館である。
 - 縄文文化について最新情報が常に発信できる博物館であり世界中の学者・学生が来館する。
 - また、地域住民やボランティアの拠り所でもある。
6. 必要な資材
 - (1) 建設用地買収費
 - (2) 博物館建設費用

1-6



狭く、老朽化した現在の博物館



新博物館建設場所の推薦地

1-7

2.2.3 縄文の森公園パークレンジャー制度の創設

1. 目的

- (1) 加曽利貝塚公園や縄文の森で活動する団体を一括する団体を設置することで、当該エリアにおける諸団体の活動の円滑化を図る。
- (2) 団体の名称は「縄文の森パークレンジャー」とする。
- (3) 「縄文の森パークレンジャー」内に以下の団体を新設する
 - 縄文の森が保全地区に指定されるので、その維持・管理をおこなう「公園メンテナンス・保全ボランティア」
 - 遊びに来た子供たちに遊び方を教える「縄文の森ブレイリーダー」
 - 外国人観光客の増加に対応する「多言語ガイド」

2. 理由

- (1) 加曽利貝塚と縄文の森には、現在「加曽利貝塚博物館友の会」「加曽利貝塚土器づくり同好会」「加曽利貝塚ガイドの会」「加曽利自然観察会」「坂月川愛好会」「縄文の森と水辺を守る会」などの団体があるがそれぞれ別個に活動をしている。これらを効率的に連携し合えば大きな力になる。
- (2) 縄文の森は広さ22㍓あり、緑地保全によって規制がかかっている。中央部分には坂月川が流れ、その周囲は休耕田が荒れ放題で放置されている。小倉の森は、雑草や樹木が伸び放題である。そのため、「公園メンテナンス・保全ボランティア」を設置し、広く参加者を募る。
- (3) 特別史跡化を受け、多様な来訪者に対応する必要がある。そのため、多言語ガイドといった、従来にはないガイド方法を充実させる必要がある。

3. 内容

- (1) 「縄文の森パークレンジャー」における構成団体内での情報共有
- (2) ボランティア等の人材育成、募集の管理運営
- (3) 加曽利貝塚公園に常住の事務局を置き、運営にあたる
- (4) 坂月川を利用したイベントの実施
- (5) 小倉の森の整備と子供のおそび場の建設
- (6) ビオトープの拡大
- (7) 湿地を利用したイベントの実施
- (8) 小倉台に大須賀家、四間家を移設・整備し民泊・飲食の運営
- (9) 「縄文の森基金」を創設し市民からの募金を管理する。

4. ファーストアクション

- (1) 事務局の設置
- (2) 検討委員会の設置

1-8

- (3) 基金の設置
- (4) NPOの立ち上げとボランティアの募集
- (5) イベントの実施。

5. ゴール（目指すべき姿）

- 加曽利貝塚や縄文の森に関心をもつ市民が、「縄文の森パークレンジャー」として関わっている。
- 縄文の森パークレンジャー事務局が、各団体のボランティアの募集や人材育成などの情報を一元的に管理しているため、各団体のボランティアの要請や、イベントなどにスムーズに対応できている。それにより、ボランティア団体が安定的に継承されている。
- 広大な「縄文の森」の保全が、近隣住民のみならず、自然保護や縄文遺跡に関心をもつ市民によって担われている。
- プレーリーダーを導入したことにより、近隣だけではなく、より多くの子どもたちに自然に触れ合って遊ぶ機会を提供できている。とくに、自然の少ない地域に住む子供には良い機会となる。
- 縄文の森のイベント、維持・管理のための運営経費は、市民の寄付、自主事業収益、市等からの受託費用を持って賄う。

6. 必要な資源

- (1) センター設置場所（部屋）
- (2) 運営経費



坂月川と縄文の森

1-9

2.2.4 貝塚公園の整備

1. 目的

加曽利貝塚は、13.4ヘクタールあり市民の公園としても広大である。特別史跡である研究対象としての貝塚と憩いの場としての公園、また広域避難場所としての整備が必要。

2. 理由

- (1) 特別史跡の指定を受け、多くの人々が来訪することが予想される。しかし、現在の旧態依然の手洗い所、バリアフリーになっていない観覧施設と散策通路は障害者へ失望を与える。
- (2) また、市民を含めた来訪者への休憩所の整備も必要である。
- (3) 子供の来訪が少なく、リピーターもいない
- (4) 広域避難場所としての備えがない

3. 内容

- (1) 新たな野外施設として大型建物の復原
- (2) 野外施設のバリアフリー化と外国人でも理解できる案内板や機器を設置する。
- (3) 手洗い所の整備
- (4) 樹木を伐採し貝塚の盛り上がりをよく分かるようにする。
- (5) 市民が憩える東屋を設置する。
- (6) 大須賀家を移設する。
- (7) 防災無線等を整備し、園内イベントでも使用できるようにする。

4. ファーストステップ

- (1) トイレの近代化。
- (2) 施設のバリアフリー化
- (3) 大型建物の復原

5. ゴール（目指すべき姿）

- 児童用遊具等も置いて子供が何時でも遊べる。障害者も不便な思いをすることなく施設を移動し、見学できる。外国人には野外観覧施設ごとに外国語での案内がある。
- 貝塚の盛り上がりがよくわかる加曽利貝塚公園。
- 大型建物を復原し新たな魅力を発信する。

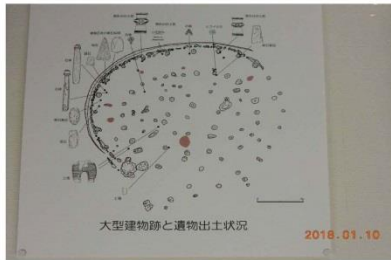
6. 必要な資源

- (1) 整備費用
- (2) 建設費

1-10



古いままのトイレ



大型建物跡の記録

I-11

2.2.5 遊び場としての縄文の森や公園の整備

1. 目的

- (1) 子供たちをターゲットとし、縄文の森特別緑地保全地区及び坂月川、加曾利貝塚公園エリアの全体を子供たちが遊べる縄文の森テーマパークとして整備する。
- (2) 観光資源としての加曾利貝塚の磨き上げを行い、来場者を増やすことで、公園及び周辺地域全体の活性化を図る。

2. 理由

- (1) 加曾利貝塚に最も多く訪れる来場者は、社会科学系に来る小学生たちであり、子供たちの意見を反映した公園づくりに効果が期待できるため。
- (2) 小学生たちの意見を反映した「あそび場」を設けることで、加曾利貝塚に「また来たい」と感じさせ、リピーターになってもらうため。

3. 内容

提案内容は千葉市内小学6年生アンケートに基づいた内容としている。アンケートの自由回答欄では「体験」という言葉が最頻語であったため、「体験」を重視した整備の方向性とする。

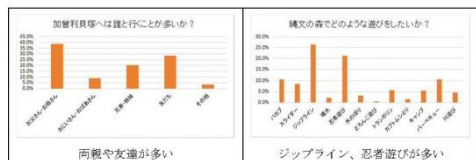
- (1) 体験型の遊び内容を整備する。

- ① 市民から員を集め貝塚を新規に作る。
- ② 弓矢の練習、土器づくり、竪穴式住居での宿泊

- (2) ジップライン等の新たな目玉遊具を設置し、来場のきっかけを作る。



I-12



(2018年9月実施：千葉市内小学6年生776名のアンケート調査結果より)

4. ファーストアクション(最初に行う取組)

- (1) 貝塚作り、弓矢の練習、土器づくり、竪穴式住居での宿泊等の体験型の遊びの中から実現できる遊びをピックアップし、ボランティアの育成を行う。
- (2) ジップライン等の子供に人気があり、かつ話題性のある遊具の選定し、設置場所の検討を行う。

5. ゴール(目指すべき姿)

縄文をテーマとした体験型の公園を目指し、貝塚以外にも興味を持っている来場者数を増やす。加曾利貝塚縄文の森への観光客数を増やし、公園及び周辺地域全体の活性化を図る。

6. 必要な資源

- (1) 体験型遊具
貝塚作りの場所の確保、弓矢練習場の確保、竪穴式住居の整備、ジップラインの設置
- (2) 体験指導のボランティア
体験型の遊びの指導者の育成

I-13

2.2.6 加曾利貝塚周辺における「民泊・飲食施設」等の整備

1. 目的

- (1) 来訪者等のための宿泊施設を作る。
- (2) 我が国最大級貝塚の地域文化と、緑豊かな里山といった自然資源を活用し、千葉市経済の活性化を担う。

2. 理由

- (1) 研究者のため、里山自然観察する児童生徒のため、観光客のための宿泊施設を整備する。
- (2) 観光立国として国は2020年までに旅行者数と消費額増の目標を掲げている。千葉市に於いてもそれは目標であり、加曾利貝塚は千葉市に於ける貴重な観光資源のひとつです。
- (3) 若葉区に指定された特区民泊制度(平成29年に、若葉区・緑区一部地域に指定された)を導入し、経済効果を高める。
- (4) 現在移籍先が決まっていない大須賀家、旧四間家を民泊施設として移設する。

3. 内容

- (1) 現在加曾利貝塚に存在する「旧大須賀家」並びに解体保存中の「旧四間家」を国の登録有形文化財建造物制度による指定を受け、宿泊施設・飲食施設等に活用する。また、若葉区は今年国家戦略特別区域に指定された。この制度を導入し貝塚への来訪者や、日本人はじめ外国人観光客等への滞在施設を創設し、滞在に必要な役務を提供する。
- (2) 児童生徒の里山体験宿泊施設としても利用する。

4. ファーストステップ

- (1) 遺跡内に存在する「旧大須賀家」と解体保存中の「旧四間家」2棟の登録有形文化財建造物登録をし(国からの助成が期待できる)保存活用する。行政・専門家・地域住民・ボランティア団体等が構成員となり使用課題等の検討を行う。
- (2) 既に特区民泊施設特定認定事業者となられた方々との連携を密にしながら、若葉区の特市民泊エリアに存在する建物の掘り起こし調査と共に事業者を募る。調査等の構成員は、地域住民・行政・専門家・ボランティア団体・特区民泊施設特定認定事業者等とする。
- (3) 大須賀家、四間家を小倉台に移転し、民泊として活用する。

5. ゴール(目指すべき姿)

世界に誇る加曾利貝塚は保存活用等への整備が施され、周辺エリアの豊潤な大地に広が

I-14

る自然界では余暇活動が活発化し、日本を始め世界の国々からの来訪者で賑わい滞在型宿泊施設・飲食施設が繁盛する「消費額倍増の観光まち」が誕生する。

6. 必要な資源

(1) 旧大須賀家・旧四間家は、登録有形文化財建造物登録後届出、保存活用する。

- ・ 移設場所
- ・ 移築費用
- ・ 経営する事業者

(2) 滞在型宿泊施設

- ・ 計画・調査費用
- ・ 日本文化にふさわしい建物
- ・ 経営する事業者



旧大須賀家（加曾利貝塚内）



旧大須賀家（内部）



旧四間家（解体保存中）

I-15

2.2.7 加曾利貝塚へのアクセスの改善

1. 目的

加曾利貝塚への経路を分かりやすく、縄文文化への案内と分かる案内をする。

2. 理由

- (1) 現在の桜木駅は加曾利貝塚への最寄り駅であるにも関わらず案内表示がない。
- (2) 桜木駅から加曾利への徒歩経路が分かりづらい。
- (3) 最も近いバスの停留所も徒歩 15 分はかかるのもっと恒痛する。
- (4) 車での案内表示も不十分である。

3. 内容

- (1) モノレール千葉駅から桜木駅への案内を分かりやすくする。
- (2) 桜木駅は、「加曾利貝塚前」と駅名を改称するか、(加曾利貝塚前) というサブネームをつけ分かりやすくする。桜木駅は貝塚の駅であるという雰囲気駅全体で表現する。
- (3) 加曾利貝塚への徒歩経路は、「縄文のこみち」という愛称をつけ縄文文化の雰囲気を伝える土器や土偶の配置を行い、ワクワク感を醸し出すようにする。
- (4) バス交通は定期バス経路を加曾利貝塚まで延伸する。あるいは現在の停留所をもっと加曾利貝塚に近い所に移動する。
- (5) 車利用者には、遠距離からも誘導できるよう標識を整備する。
- (6) 外国語案内板を整備

4. ファーストステップ

- (1) モノレール会社との交渉。
- (2) 「縄文のこみち」改修に向け周辺住民の理解の促進。
- (3) バス会社との交渉。
- (4) すべての標識の見直し。

5. ゴール（目指すべき姿）

加曾利貝塚へ行こうと思う市民・外国人が、電車、徒歩、バス、乗用車等何を使っても容易く楽しくワクワク感を持って加曾利貝塚へ来ることができる。

6. 必要な資材

- (1) 広告費
- (2) 標識等製作費
- (3) 道路整備費

I-16

外国語案内板



現在の桜木駅



I-17

2.2.8 坂月川ネイチャーバス、散策路の整備、丸木舟レース

1. 目的

坂月川とその天端の整備を行い、坂月川で丸木舟レースまたはカヤックのレースを行う。また、天端の整備により加曾利の里山から東京湾まで散策できるようにする。縄文時代と変わらない坂月川周辺を保存し自然環境の生態学習や歴史を学ぶ場所にする。

2. 理由

- (1) 加曾利貝塚は、海と密着した遺跡である。
- (2) 縄文の森が、縄文時代から続く景観である。
- (3) ホテルやカフェの来る自然豊かなエリアにする。

3. 内容

- (1) 坂月川の天端を整備し、市民のジョギングやサイクリングがおこなえる堤防散策路を海までとして活用する。
- (2) 散策路の途中には、休憩所・手洗い所を設置する。
- (3) 坂月川の流れを滞留させている土砂の浚渫を行い、東京湾と加曾利貝塚を結ぶ丸木舟やカヤックのレースを行う。東京にも近くカヤック競技等のメッカにしていこう。
- (4) 放置されている休耕田の整備、荒れている山の整備を行う。
- (5) 旧大須賀家、旧四間家を小倉台に移設し、カフェ、民泊等の施設にする。
- (6) 豊かな自然で、環境学習のイベントを行う。

4. ファーストステップ

- (1) 坂月川は千葉市の管轄であり、都川は 2 級河川で県の管轄であるため川の整備のため両者の調整を行う。
- (2) カヤック等競技の実行委員会の立ち上げを行う。

5. ゴール（目指すべき姿）

子どもたちは、坂月川周辺で、泥遊びに耽れ、大人たちは小倉台のカフェから里山を見ながらお茶をすたり、川の堰堤では、ジョギングをしたり、自転車をこいだり、散策をしたり各々自然を楽しんでいる。今日は、寒川からここまでのカヤック競技があり、ゴールのため多くの人が集まっている。そろそろ、笛も飛びそうだ。

6. 必要な資材

- (1) 河川の整備費
- (2) イベント開催費
- (3) 小倉台の整備費と旧大須賀家、旧四間家の移築

I-18

<坂月川>



<大須賀家>



1-19

謝辞

加曽利貝塚グループにおける研究員としての活動ならびに、本提言の作成に際して、市川市立市川考古博物館、飛ノ台史跡公園博物館、千葉市文化財課の皆様にお世話になりました。また、アンケートに際しては、千葉市教育委員会、都賀小学校、山王小学校、生浜西小学校、大蔵寺小学校、さつきが丘西小学校、上の台小学校、平山小学校、扇田小学校、稲浜小学校、真砂西小学校、大宮台小学校、千城台東小学校、の先生ならびに6年生の児童の皆様にご協力いただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

1-20

参考資料1 アンケート質問票

【アンケート概要】

時期：H29.9中旬～H29.10中旬 対象：千葉市内小学6年生
方法：学校内で書面による回答 回収数：776名

加曽利貝塚についてのアンケート

私たちは、「千葉市まちづくり未来研究所」の研究員です。加曽利貝塚を、どのようにしたらもっと楽しくできるかを考えています。そこで、小学生のみなさんのアイデアを聞きたいと思い、このようにアンケートをすることにしました。
アンケートの結果は、誰が書いたかを分らないようにしてまとめ、千葉市長に提出する「加曽利貝塚での遊び場所についての提案」に使います。

Q1 縄文時代といえば、何をイメージしますか。あてはまるものをいくつか選んで、番号に○をつけてください。

- | | | | |
|-----------|------------|-----------|-----------|
| 1. 貝塚 | 2. 土器 | 3. 狩り（弓矢） | 4. たてあな住居 |
| 5. 縄文時代の服 | 6. 土偶（どぐう） | 7. その他（ ） | |

Q2 加曽利貝塚を見学したとき、何が楽しかったですか。あてはまるものをいくつか選んで、番号に○をつけてください。

- | | | | |
|----------|----------------|-----------|---------|
| 1. 貝塚の展示 | 2. 博物館 | 3. たてあな住居 | 4. 火おこし |
| 5. 土器づくり | 6. 自然がたくさんある公園 | 7. その他（ ） | |

Q3 加曽利貝塚を見学したとき、何が楽しくなかったですか。あてはまるものをいくつか選んで、番号に○をつけてください。

- | | | | |
|----------|----------------|-----------|---------|
| 1. 貝塚の展示 | 2. 博物館 | 3. たてあな住居 | 4. 火おこし |
| 5. 土器づくり | 6. 自然がたくさんある公園 | 7. その他（ ） | |

Q4 今の加曽利貝塚公園で遊ぶとしたら、何がしたいですか。あてはまるものをいくつか選んで、番号に○をつけてください。

- | | | |
|-----------------------------|---------------------|---------------|
| 1. 火おこし | 2. 土器作り | 3. 弓矢の練習 |
| 4. 広い公園で遊ぶ | 5. 石器作り | 6. たてあな住居で宿はく |
| 7. イボキザゴスープ*など縄文時代の料理を作ってみる | 8. 植物からせんいを取り出し服を作る | |

*イボキザゴ…縄文時代の人が食べていた貝のこと。今でも千葉県内の海岸でとれます。



うらにもアンケートがあるよ！

1-21

Q5 学校の校外学習以外で加曽利貝塚に遊びに行くときは、だれと行くことが多いですか。あてはまるものをいくつか選んで、番号に○をつけてください。遊びに行ったことがない人は、もし行くことになった場合はだれと行くかを、いくつでもえらんで番号に○をつけてください。

- | | | |
|--------------|----------------|----------|
| 1. お父さん・お母さん | 2. おじいさん・おばあさん | 3. 兄弟・姉妹 |
| 4. 友だち | 5. その他（ ） | |

Q6 もし加曽利貝塚の近くにある森で遊ぶとしたら、どのような遊びがしたいですか。1つだけ選んで、番号に○をつけてください。

- | | | | |
|------------|----------|------------|-----------|
| 1. バカブ* | 2. スライダー | 3. ジップライン | 4. 噴水 |
| 5. 忍者遊び | 6. 木のぼり | 7. どんろご遊び | 8. トランポリン |
| 9. カブトムシとり | 10. キャンプ | 11. バーベキュー | 12. 川遊び |

*バカブ…森の中にネットをはりめぐらせた遊具のこと

Q7 加曽利貝塚をもっとおもしろくするには、どのようにしたらいいと思いますか。自由に書いてください（図案書きでもかまいません）。



1-22

※アンケートの個別回答は省略しています。

特別史跡加曽利貝塚グランドデザイン

発行日 2019（平成31）年2月

編集・発行 千葉市・千葉市教育委員会

〒260-8730

千葉県千葉市中央区問屋町1-35 千葉ポートサイドタワー11階

千葉市教育委員会事務局生涯学習部文化財課

電話 043-245-5960

E-mail bunkazai.EDL@city.chiba.lg.jp



加曾利貝塚PR大使
かそりーぬ